課告番号 甲 第 4139 号

インド・ホイサラ寺院の平面構成に関する研究

矢 口 直 道

①

インド・ホイサラ寺院の平面構成に関する研究

矢口直道

インド・ホイサラ寺院の平面構成に関する研究

目次

序 ・・・ 1

第1節 研究の目的，対象，方法 ・・・ 1

第2節 既往研究 ・・・ 2

第3節 本論文の構成 ・・・ 5

第Ⅰ章 ホイサラ寺院の歴史背景 ・・・ 9

第1節 政治的背景 ・・・ 9

第2節 宗教的背景 ・・・ 12

第Ⅱ章 ホイサラ寺院の平面類型 ・・・ 17

第1節 ホイサラ寺院を構成する各室とその機能 ・・・ 17

第2節 平面類型 ・・・ 21

第3節 その他のホイサラ寺院との比較 ・・・ 27

第4節 考察 ・・・ 31

第Ⅲ章 宗派・神格別分類と平面類型の相関 ・・・ 36

第1節 宗派・神格別分類 ・・・ 37

第2節 考察 ・・・ 45

第Ⅳ章 ホイサラ寺院を構成する各室平面と寺院本殿の平面類型との相関 ・・・ 52

第1節 ナヴァランガの構成 ・・・ 52

第2節 他室の構成 ・・・ 58

第3節 考察 ・・・ 60

第Ⅴ章　平面構成からみたホイサラ寺院と
後期チャールキヤ寺院との相関　・・・　67

第１節　平面類型　・・・　67

第２節　宗派・神格別分類と平面類型との相関　・・・　71

第３節　各室の平面構成と平面類型との相関　・・・　78

結　・・・　89

第１節　本論文の成果と意義　・・・　89

第２節　今後の研究の展望　・・・　92

あとがき　・・・　93

脚注　・・・　94

主要参考文献　・・・　118

図版一覧　・・・　123

資料　ホイサラ寺院一覧

インド・ホイサラ寺院の平面構成に関する研究

序

第1節　研究の目的・対象・方法

本論文は，南インド，カルナータカ州南部に11世紀から14世紀にかけて勢力を保ったホイサラ朝のもとで建立された寺院について，その特徴を平面構成の分類を通して考察するものである[注1]。

本論文では238基のホイサラ寺院本殿を対象とするが[注2]，このうち第Ⅱ章では外壁面の分割に着目したホイサラ寺院の分類と比較するため，主にホイサラ王等によって建立された59基の寺院を，第Ⅳ章では寺院本殿を構成する各室の平面形態が確認されている189基の寺院を対象とした。第Ⅴ章では238基のホイサラ寺院に加え，EITAに平面図が記載された62基の後期チャールキヤ寺院を対象とした[注3]。ここでいう本殿はガルバグリハ（祠堂），シュカナースィ（前室），ナヴァランガ（拝殿），ポルティコ，マハーマンダパ（前殿），ナンディー堂を指し，本殿を囲うプラーカーラ（周壁），マハードヴァーラ（門）等の附属建築物は含めない。これらの附属建築物は本殿の平面構成寺院周辺に増築することが可能で，本殿の平面類型または本殿を構成する各室の平面形態には影響がほとんどないものと考えたからである[注4]。

従来のインド建築史では，寺院の平面構成に着目した分類として，祠堂の数に着目したものと，祠堂のまわりに遶道が配置されるか否かで分類したものがある。前者は，祠堂の数に従ってエーカクータ（ekakuta），ドヴィクータ（dvikuta），トリクータ（trikuta），チャトゥシュクータ（catuskuta），パンチャクータ（pancakuta）と呼ばれる。後者は遶道が配置される寺院をサーンダーラ（sandhara），そうでないものをニランダーラ（nirandhara）と呼び区別している。ホイサラ寺院を代表するベールールのチェーンナケーシャヴァ寺院（H. 137）[注5]，ハレービードのホイサレーシュヴァラ寺院（H. 235），ソーマナータプラのチェーンナケーシャヴァ寺院（H. 177）を例にみると，ベールールの寺院がエーカクータ，ハレービードがドヴィクータ，ソーマナータプラがトリクータで，すべての寺院がニランダーラとなる。これらの分類は，平面構成の一部の特徴を示すもので，全体的な特徴を示すものではなく，ホイサラ寺院にみられる様々な平面類型をうまく説明しているとはいえない。

このため本論文では寺院本殿全体をみる視点から，ガルバグリハに至る軸線を想定し，それについての対称性に基づいた平面類型を考える。ガルバグリハに至る軸線に沿って各室が配置されているものを一軸対称平面，この軸線に対して非対称であるものを非対称平面と呼ぶ。次に，ナヴァランガの左右に室があるものには主ガルバグリハに至る軸線に直交する第二の軸線が想定できるが，このように主軸，副軸をもつものを二軸対称平面とし，さらに一軸対称平面，二軸対称平面が左右に並置されたものを並置平面とする。

こうして分類した平面類型について，以下の二点から論ずることによりホイサラ寺院の性格が明らかになるものと考える。まず第一に，宗教建築である性格上，そこにまつられた神格と宗教的背景について考察する必要がある。寺院にまつられた神格と入口位置との相関をみることによって，寺院の平面類型に当時の宗教的背景が反映していることが明らかにされよう。第二に寺院本殿を構成する各室の平面形態との関連をみることにより，複雑な平面類型の寺院内部の様相を理解することが可能となろう。

第２節　既往研究

ホイサラ朝に関する刻文は，そのほとんどがカルナータカ刻文集（*Epigraphia Carnatica*）に記載されており[注6]，その通史はデッレットによってまとめられている[注7]。ホイサラ寺院の遺構は1906年から1956年にかけて行われた調査結果が，マイソール考古局年次報告書（*Annual Reports of the Mysore Archaeological Department*／以下，MARと略記）として出版されている[注8]。ナラシンハチャールは初期の出版にかかわる一方で，ドーッダガッダヴァッリ[注9]，ベールール[注10]，ソーマナータプラの寺院について[注11]独自の調査報告書を刊行している。北カルナータカの遺構は，コーセンス[注12]，レア[注13]によって調査されている。本論文では主にこれらの調査に基づいた一次資料を扱っている。

ブラウンは，ホイサラ寺院にみられる特徴として，以下の四点について整理している[注14]。

１）寺院外壁の平面形態，寺院本殿の平面類型。ヴィマーナ[注15]の外壁面がギザギザしたいわゆる星形平面を呈し，寺院は高い基壇（platform）の上に建ち，プラダク

シナ（遶道）[注16] がない。複数の祠堂が一つの寺院に設けられ，多神格をまつる。

2）ヴィマーナ外壁面の水平分割。ヴィマーナ外壁が下から，叙事史等を彫込んだ数層のモールディングで構成されるピータ（基部），神像のレリーフ，その上のシカラ風のレリーフの順に，水平に三分割される。

3）シカラ（上部構造）の形態。徐々に細くなっていく塔状のシカラはコーニスによって外壁面と離れているような印象がある。水平に積上げられた層には小シカラが並び，星形平面にしたがった縦溝の付いたような外観を呈する[注17]。

4）柱のデザイン。ごく薄い円盤を何枚も重ねたような円柱で，旋盤の上で柱を回転させて削ったように見える[注18]。私が調査した範囲では，柱を削るための旋盤を設置したような遺構が見あたらず，また柱の円盤状の端部に円の中心に向って石鑿で彫った痕跡があることから[注19]，実際に柱を削るのに，旋盤を用いたとは考えにくい[注20]。

本論文では，このうち寺院の平面類型に着目することは上述のとおりであるが，ヴィマーナ外壁面に着目した研究がなされてきている。

ホイサラ美術の研究家シェッターは，主に彫刻，建築装飾，美術の観点からホイサラ寺院について言及し，後期チャールキヤ朝美術の影響，ドラーヴィダ様式の影響についても論じている。さらに上述の祠堂の数による分類により寺院を整理し，そのそれぞれについて典型例を示している[注21]。また寺院を建立した施主，建設にたずさわった建築家集団についても言及している。ホイサラ朝の時代にホイサラ朝の版図で建設された寺院をすべてホイサラ寺院と呼んでおり，現存する427基の寺院を紹介している[注22]。

デル・ボンタは博士論文[注23] のなかで，37の寺院がホイサラ王家または王家の重要な大臣，軍人によって建設された寺院であるとし，これらの寺院のみをホイサラ様式の寺院と呼び，ハレービード・タイプとコーラヴァンガラ・タイプに分けて特徴を述べている[注24]。これらは主に寺院外壁面のデザインから以下の四点をもって区別されている。

a）ヴィマーナの外形平面形については，ハレービード・タイプには，星形平面のものとそうでないものもあるが，コーラヴァンガラ・タイプには，星形平面の寺院がない。

b）ハレービード・タイプの寺院はすべて基壇に載るが，コーラヴァンガラ・タイ

プでは，一例のみが基壇に載る[注25]。

c）ハレービード・タイプの寺院はすべて寺院の外壁最下部に数層の連続したモールディングがあるが，コーラヴァンガラ・タイプではその数例に一層または二層のフリーズがあるのみで，ほとんどの場合は単純なデザインのモールディングである。

d）ハレービード・タイプの寺院はすべて外壁面が疑似二層の構成になっているのに対し，コーラヴァンガラ・タイプは，一層の構成である。

デル・ボンタは，ハレビード・タイプはホイサラ朝独自の様式であり，コーラヴァンガラ・タイプは，ホイサラ朝以前の後期チャールキヤ朝の様式とハレービード・タイプの混交様式であるとしている[注26]。

ダーキーは主にピータ（基部）のデザインに着目し，インド全土にわたる寺院について網羅的な研究を行っている。ホイサラ寺院についてはその最新刊*Encyclopaedea of Indian Temple Architecture, South India, Upper Dravidadesa, Later Phase*で南カルナータカ地方を指す地域名を用いて，ホイサラナードゥ様式として言及し，デル・ボンタ同様二つに分類している。すなわち，ピータが数層のフリーズになっている装飾様式をトレンドBとし，それ以外をトレンドAとする。デル，ボンタの分類と比較すると，コーラヴァンガラ・タイプがトレンドAに，ハレービード・タイプがトレンドBにほぼ対応している。ダーキーはトレンドAはかなりの部分北カルナータカ様式に由来するが，トレンドBは外部立面に相当な独自性がみられる，としている。本論文では第Ⅱ章で，デル・ボンタ，ダーキーによって主にヴィマーナ外壁面のデザインから分類した類型との比較を行った。

ハーディーは，ヴィマーナ壁面の平面的な分轄に着目し，カルナータカ州のヒンドゥー教寺院をドラーヴィダ様式，非ドラーヴィダ様式，混淆様式に分けて論じている。ホイサラ寺院はその多くはドラーヴィダ様式，数例が非ドラーヴィダ，混淆様式に位置づけられ，カルナータカ州の建築を通してみると，後期チャールキヤ朝様式の亜流と位置づけられている[注27]。

フォエケマはハーディーと同様の方法で92基のホイサラ寺院について調査している[注28]。ホイサラ寺院本殿の平面類型について述べているが，寺院本殿外壁の壁面分割を記述するための便宜上分類し，記述したもので，平面類型について論じているわけではない。本論文では，MARの調査報告では不十分な寺院について参照した。

コッリヤーは，ホイサラ寺院に残る刻文から，ギルドの存在，カーストなど広範な社会背景のもとに，12，13世紀のホイサラ寺院の建設にたずさわった建築家または彫刻家それぞれの個性について論じている[注29]。本論文ではその社会背景に対する記述を主に第Ⅰ章で参照している。

このようにホイサラ寺院の研究は外壁面に着目した研究が主流であった。本論文は，外壁面の細かな凹凸のような装飾的な要素を除いて平面類型に着目し，それに基づいて神格の配置等を考察することにより，当時の宗教的背景が反映したホイサラ寺院の平面構成を，寺院本殿を構成する各室の平面形態との関連をみることにより，複雑な平面類型の寺院内部の様相を考察し，ホイサラ寺院研究に新たな一面を見出す可能性があるものと考える。

第３節　本論文の構成

第Ⅰ章では，ホイサラ寺院を考察する上での背景となる政治，宗教的背景について整理する。政治的背景ではホイサラ朝と周辺の政治勢力との関係を歴代の王について述べ，ホイサラ歴代の王とその当時の版図，隣国との関係についてまとめている。宗教的背景では，ジャイナ教，ヒンドゥー教シヴァ派，ヴィシュヌ派が共存するようになった背景に着目している。ジャイナ教，ヒンドゥー教シヴァ派はホイサラ以前から保護されていたが，ジャイナ教が12世紀に最盛期を迎え，その後は衰退するのに対し，シヴァ派は，その後も隆盛であった。ヒンドゥー教ヴィシュヌ派は南カルナータカではラーマーヌジャがタミール地方から逃れてきたことが契機となって，12世紀初頭以降信仰が広まった。これらの宗教・宗派は，支配階層からは異なる宗派の寺院建立を助成したり，同村に異宗派の寺院を建立するなど，共存共栄するように図られていたが，中にはセクト主義に基づいて，シヴァ派，ヴィシュヌ派の間で対立する構図も指摘した。建立された寺院については，寺院の建立に携った芸術家が，ほとんどシヴァ派で，宗教宗派にかかわらず寺院を建立していることから，寺院の建立は施主の意向を反映したもので，異宗派の共存共栄，または対立の構図の中で考えることができるとした。

第Ⅱ章では，ホイサラ寺院の平面類型の分類について具体的に考察し，壁面分割に

着目した分類との比較を行った。平面類型に関しては，ガルバグリハに至る軸線について線対称の一軸対称平面，二軸対称平面，並置平面と，非対称平面に分けて考えることができる。デル・ボンタ，ダーキーによる壁面分割に着目した分類との比較をする上で，ホイサラ寺院の代表的なものがホイサラ王家またはそれに準ずる将軍，政府高官等によって建立された寺院にみることができることから，刻文等から59寺院を対象にした。これら59基の寺院と本論文で対象としている238基の寺院との関連をみた上で，壁面分割に着目したホイサラ寺院の分類と平面類型に基づく分類の相関について論じた。デルボンタのハレービード・タイプ，ダーキーのトレンドBはともにホイサラ独自の建築様式と認められ，このように分類された寺院の平面類型は二軸対称平面である割合が多いことから，二軸対称平面がホイサラ独自の建築様式と強く結びついている点を指摘した。

第Ⅲ章では，ホイサラ寺院にまつられた神格の種別と位置，及び寺院の本殿入口との相関について整理し，ホイサラ寺院において特異な平面構成を考察した。ヒンドゥー教シヴァ派，ヴィシュヌ派，シヴァ，ヴィシュヌ両神を同時にまつる重層信仰，ジャイナ教の宗派別に第Ⅱ章で分類した平面類型との関連を考察した。いずれの宗派でも，一軸対称平面が最も多く，他王朝の寺院と共通するが，複数の神格をまつる場合に，それぞれの宗派で異なる平面類型が用いられる。つまり，同宗派の神格をまつる場合シヴァ寺院では並置平面が特徴的にみられ，ジャイナ教寺院，ヴィシュヌ寺院に二軸対称平面が多く用いられるなど，寺院の平面類型はは対称に，異宗派の神格をまつる重層信仰寺院の場合には非対称になる傾向があり，同種の神格をまつる場合と異種の神格をまつる場合の建築表現の違いであると考えられる点を指摘した。さらに重層信仰寺院とシヴァ寺院の非対称平面では，主ガルバグリハの位置と入口位置の方位がそれぞれ，ナヴァランガの西側，南側で，共通であることからその影響関係について論じた。11世紀から建立が認められる重層信仰寺院の方がシヴァ寺院より早くから建立されていたとみることができることから，重層信仰寺院では入口の正面にヴィシュヌ神をまつり，入口から向って左側に主神であるシヴァ神をまつることにより，神格のヒエラルキーを表現する非対称平面が発展し，それがシヴァ神のみをまつる非対称平面に影響を与えたと考えることができ，ホイサラ寺院で特異な非対称平面は，シヴァ信仰とヴィシュヌ信仰のヒエラルキカルな建築表現の追求の中から生み出されたもの

であると推論した。

第Ⅳ章では，ホイサラ寺院を構成する室の平面形態について考察している。まず，ナヴァランガについて平面形態と壁面の構成，ニッチの配置，天井装飾との関連をおさえ，その他の室について同様に検討し，最後にそれら相互の関連と寺院の平面類型との相関について論じた。ホイサラ寺院本殿はナヴァランガ中央のアンカナと同じ大きさの室をその周囲に配置し，寺院本殿全体でガルバグリハの正面性を強調するようにニッチ等が配置されているものと推論した。また，ガルバグリハ，シュカナースィ，ナヴァランガのガルバグリハ側の壁面を閉鎖的なひとまとまりであると考え，ポルティコ，マハーマンダパ，ナヴァランガの入口側のジャガティーから成るひとまとまりを，柱，梁による開放的なものであると考えることにより，これら二つのまとまりがナヴァランガ中央のアンカナの周りに配置されることによって，ホイサラ寺院本殿はこれら二つのまとまりがナヴァランガで混淆しているものと考えられることを指摘した。

第Ⅴ章では，後期チャールキヤ寺院についてホイサラ寺院と同様に，（1）本殿の平面類型，（2）まつられた神格と位置，（3）本殿を構成する各室の平面形態，ニッチ，壁面の構成の三点を分析し，その結果と第Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ章の考察をふまえてホイサラ寺院の平面構成とを比較し，両者の相関を考察した。まず平面類型について，双方の平面類型はほぼ同様の構成であると考えることができ，相互に影響関係が認められる点を指摘した。まつられた神格と位置に関しては，第Ⅲ章で論じている重層信仰寺院と非対称のシヴァ寺院の影響関係について後期チャールキヤ寺院のシヴァ寺院も考慮に入れて論じる必要性を指摘した。平面形態については，ナヴァランガの壁面はホイサラ寺院と同様に，ガルバグリハを強調するように配置されている様子がうかがえるが，ホイサラ寺院では，正方形を規範としてひとつの機能にひとつの室を当てるなど，画一化した平面構成になっており，この点を後期チャールキヤ寺院との比較を通してみたホイサラ寺院の平面構成の特徴であるとしている。

結では本論文の成果として，ホイサラ寺院本殿は平面類型に分類して考察できること，これらの平面類型が宗派別に特徴づけられること，ホイサラ寺院の平面形態が正方形を規範としてナヴァランガを中心に構成されていることの三点を挙げ，総括とした。今後の研究の展望では，タミール地方で建立されたホイサラ寺院や，同時代の諸王朝の寺院を研究することによりヒンドゥー王朝最後の寺院群の平面構成が明らかに

なる可能性を述べている。

第Ⅰ章
ホイサラ寺院の歴史的背景

本章ではホイサラ寺院を考察する上での背景となる政治，宗教的背景について整理する。政治的背景ではホイサラ朝と周辺の政治勢力との関係を歴代の王について述べ，宗教的背景では，ジャイナ教，ヒンドゥー教シヴァ派，ヴィシュヌ派が共存するようになった背景について着目した。

第１節　政治的背景

ホイサラ朝以前のカルナータカ地方では，北カルナータカのラーシュトラクータ朝とタミール地方のチョーラ朝が抗争し，南カルナータカのガンガ朝はラーシュトラクータ朝の主権を認め，属国の地位にあった。973/4年に後期チャールキヤ朝が北カルナータカに興り，ラーシュトラクータ朝に代って，チョーラ朝と抗争するようになった。この間にガンガ朝は滅んだことによって生じた政治的空白に乗じてホイサラ朝が興った。

ホイサラ朝は，ドラーヴィダ語系のカンナダ語を用い，ガンガ朝の中心地だったタラカードゥ（マイソール県）の北方の山間部に興ったとされる。11世紀前半にソーセユール（現アンガディ・チクマガルール県）にあった資産家であろうと考えられている。ホイサラ朝の支配が認められる10世紀から14世紀中庸までの政治勢力は複雑に絡み合っていて，ホイサラ朝周辺には様々な小藩候国があった。ホイサラ朝の創始期には後期チャールキヤ朝，チョーラ朝といった巨大帝国とは直接抗争せず，コーンガールヴァ朝，チャンガールヴァ朝といった隣国との抗争に限られた。

ホイサラ朝はニルバカーマ（カーマホイサラ／在位1006－47 A.D.）の代になって実質的に刻文等に残るようになるが，この王については多くは知られていない。ヴィナーヤディトヤ（在位1047-98 A.D.）の時代になって，1076年に後期チャールキヤ朝と主従関係を結ぶなど，後期チャールキヤ朝，チョーラ朝の抗争に参画するようになった。ホイサラ朝は近隣の藩候がタミール地方に拠点のあるチョーラ朝と主従

関係にあったのとは異なり，後期チャールキヤ朝に従った。コーンガールヴァ朝，チャンガールヴァ朝などのカルナータカ南部丘陵地の藩候が，侵略者チョーラ朝と，同族の支配者後期チャールキヤ朝のはざまで揺れ動くのを片目に，着実に支配をのばしていった。ヴィナーヤディトヤは，1062年には首都をドーラサムドラ（現ハッサン県ハレービード）に定め[注1]，丘陵地から平原へと進出してきた。

エーレーヤンガ（在位1098-1102 A.D.）とバッラーラⅠ世（在位1102-08 A.D.）の短命を受けて，バッラーラⅠ世の弟ヴィシュヌヴァルダナが即位した。ヴィシュヌヴァルダナ（在位1108-42 A.D.）は，チョーラ朝の勢力を南カルナータカから一掃し，1116年にはガンガ朝の古都タラカードゥを占領し，ガンガ朝が治めた地域に権力を確立する。ヴィシュヌヴァルダナはホイサラ領下のみならずタミール地方にも遠征したが，1127年に後期チャールキヤ王ヴィクラマーディトヤⅥ世が没すると，1113年にはバンカープラに軍の拠点を築くなど，ホイサラ領北方に関心を向けるようになった。

ナラシンハⅠ世（在位1143-73 A.D.）はわずか8歳で王位についたが，ヴィシュヌヴァルダナの没後，チャンガールヴァ朝などの藩候が独立を企てるなどホイサラ領の北側が混乱しはじめた。一方，チョーラ朝はホイサラ領の東側（現在のコーラール県近辺）を占領した。1154年にはカラチューリ朝のビッジャラが後期チャールキヤ朝の王位を奪取し，政治的混乱を引き起した。チャールキヤ王タイラⅢ世は王権を剥奪されたが活発に活動していた。ホイサラ領の北西部の混乱にはホイサラ朝が介入する余地があったがナラシンハⅠ世は行動を起さず，失地を回復するには至らなかった。

1173年に父親であるナラシンハⅠ世に対し謀反を起して王権を奪取したバッラーラⅡ世（在位1173-1220 A.D.）は，自身をヴィーラ・バッラーラ（英雄バッラーラの意）と称した。チャールキヤ朝を混乱状態に陥れたカラチューリ朝に対し，デーヴァギリのセーヴナ朝，オルガッル（現ワランガル）のカーカティーヤ朝が対峙していた。カラチューリ朝は一時的にホイサラ朝と同盟したが，1183年には後期チャールキヤ王ソーメーシュヴァラⅣ世が王権を回復し，1187年にはカラチューリ朝の勢力を排除した。しかし弱体化したチャールキヤ朝は，1187年から1189年にかけてのバッラーラⅡ世の度重なる侵攻で中心地のクンタラ地方を占領され，1195年には首都カルヤーナの主権を失い，1215年まではカダンバ朝のもとで庇護を受けながら王朝は存続するが，これ以降チャールキヤ朝の名は歴史から姿を消した[注2]。一方，1192年にバッラーラ

Ⅱ世はチャールキヤ朝からの独立を宣言し，独自の年号を創始した[注3]。後期チャールキヤ朝の没落を受けて，バッラーラⅡ世はホイサラ領北方でヤーダヴァ朝と対峙することになった。ホイサラ領北方で増大する戦費を調達するために，バッラーラⅡ世は晩年，ホイサラ領南方のタミール地方に注目しはじめ，1218年にチョーラ朝からパーンドゥヤ朝との交戦に際し支援要請に応じ，ナラシンハⅡ世を派遣するなど，タミール地方への関与を強めていった[注4]。

ナラシンハⅡ世（在位1220-35 A.D.）は，息子ソーメーシュヴァラとラージャラージャⅢ世の娘との婚姻関係を結ぶなどチョーラ朝との血縁関係を深め，カルナータカ地方より，タミール地方の政治に深く係わるようになった。この間隙をついて，首都ドーラサムドラにホイサラ朝と主従関係にあったセーヴナ朝が侵攻した。ナラシンハⅡ世はこれを退けることたが北カルナータカで領地を失った。しかし，タミール地方の領土が広がったため，この時点でホイサラ領は最大となった（図Ⅰ－1）。

ソーメーシュヴァラ（在位1235-60 A.D.？）はタミールナードゥ州中部のカンナヌールに第二首都を建設し，タミール地方との関係がより密接になっていった。タミール地方に拠点を置くソーメーシュヴァラに対してカルナータカでは家臣がそれぞれの支配地域を確立していくなど，ホイサラ朝の崩壊がはじまりつつあった。死後，広範なホイサラ領はナラシンハⅢ世がドーラサムドラを中心としたカルナータカ南部を，ラーマナータがカンナヌールを中心としたタミール北部に分割統治された。

タミールを支配していたラーマナータ（在位1254-94 A.D.）は，1274年以降数度にわたりドーラサムドラのナラシンハⅢ世に対して内戦を挑んだ。ヴィシュヴァナータ（在位1294-97 A.D.）にも受継がれ，1297年まで続いた。ドーラサムドラのナラシンハⅢ世（在位1254-91 A.D.）はセーヴナ朝の脅威に加え，内戦を抱えて孤立していった。

バッラーラⅢ世（在位1291-1343 A.D.）はナラシンハⅢ世の後を受けて帝国を再統合するが，カーカティーヤ朝，セヴナ朝による侵攻が続き，一方ではデリースルタン，アラー・ウドディーン・カルジーの将軍であったマリク・カーフールの侵略がはじまった。マリク・カーフールはデーヴァギリ（1294，1306 A.D.），ワランガル（1309 A.D.）に続き，1311年には，ドーラサムドラからマドゥライにかけて侵攻した。デリースルタンの支配下のセヴナ朝とともに南に侵攻したマリク・カーフールに

バッラーラⅢ世は降伏し，ドーラサムドラを放棄し，ベールールなど各地を転々とした。この間，イスラム寺院がラーメーシュヴァラムに建設されるなど，かつてのヒンドゥー文化の中心地は荒廃した。1311年から1312年にかけてのこの侵攻の後，1316年にはドーラサムドラを再建したが，1326年から1327年にかけてカルジー朝に代ったトゥグルグ朝による侵攻に遭遇した。トゥグルグ朝は反逆者グルシャープ追討という名目でドーラサムドラに入り，猛攻を繰返した。この時もバッラーラⅢ世は首都ドーラサムドラを追われ各地を転々とするが，タミール地方での影響力は依然として強かった。1340年にバッラーラⅣ世に王位を譲り，カルジー朝に代ったトゥグルグ朝によるマドゥライのイスラム教徒と対峙していたが，1342年，マドゥライ・スルタンによって処刑された。

バッラーラⅣ世（在位1343-46 A.D.？）が後を継いだものの，1344年までにはホイサラ領北東部はヴィジャヤナガラ朝の支配下になり，多くの家臣もヴィジャヤナガラ朝の影響下にあった。1346年にはホイサラ朝はヴィジャヤナガラ朝のハリハラによって吸収され，歴史の舞台から姿を消した。

第2節　宗教的背景

ホイサラ朝の時代のカルナータカ州南部では，ジャイナ教をはじめヒンドゥー教シヴァ派，ヴィシュヌ派が広く信仰されていた。

ジャイナ教は，ガンガ朝以来，初期西チャルキヤ朝，ラーシュトラクータ朝，後期チャールキヤ朝等に保護され，ホイサラ朝時代には確立された宗教であった。さらにホイサラ朝の起源を語る伝説にジャイナ教修行者が関与している。すなわち，ホイサラ朝の伝説上の創始者サラがジャイナ教の修行者に襲いかかった虎を殺した時に修行者が，「ポイ，サラ」または「ホイ，サラ」（サラよ，撃て，の意）と呼びかけ，これがホイサラ朝の名前の由来であるとされる。また，ヴィシュヌヴァルダナに至るまでのホイサラ王はすべてジャイナ教徒であり，ヴィシュヌヴァルダナ王妃シャーンタラーデーヴィーをはじめ，重臣の多くはジャイナ教徒で，ジャイナ教団への土地の寄進，寺院の建立が盛んに行われた[注5]。このようなジャイナ教に対する保護は，バッラーラⅡ世の時代まで続き，12世紀はジャイナ教にとってその絶頂期と言える。13世紀に

なると，土地の寄進，寺院の建立も少なくなり，ジャイナ教徒の王妃を迎えることもなくなった[注6]。1255年には，ナラシンハⅢ世が首都ドーラサムドラ（現ハレービード）のパールシュヴァナータ寺院を訪れ，ウパナヤナの儀式[注7]を執り行うなど[注8]，ジャイナ教寺院に対する保護は13世紀に至るまでみられるが，ジャイナ教は，シヴァ派，ヴィシュヌ派の台頭によって，勢力が衰えていった。

ヴィシュヌ信仰は10世紀末から11世紀はじめにかけてチョーラ朝によって南カルナータカ地方に導入されたものとされるが，12世紀初頭にホイサラ王ヴィシュヌヴァルダナがホイサラ朝の中心地方にヴィシュヌ信仰を導入するまでは，カンヴァー川，カーヴェリー川周辺のいくつかの集落に限られたものだった[注9]。ヴィシュヌ派は南カルナータカではラーマーヌジャがタミール地方から逃れてきたことが契機となって信仰が広まったものと考えられている[注10]。この時期については諸説があるが，12世紀初頭にはタミール地方からホイサラ領に達していたものと考えられる[注11]。ラーマーヌジャは，従来のウパニシャッドのような哲学，あるいは儀礼中心の祭式主義とは異なり，最高の人格神ナーラーヤナに，肉親に対するような愛の感情を持って絶対的に帰依するバクティ（信愛）の概念を体系化した最初の哲学者，宗教家であるといわれる。さらにラーマーヌジャはバクティを行うことが困難な女性や低カーストの人々にも，最高神に自己のすべてをゆだね全面的庇護を求めるプラパッティという道を示し，広く一般大衆に受入れられ，ホイサラ朝の下で展開したヴィシュヌ信仰に強く影響を与えた[注12]。ラーマーヌジャは，当時のホイサラ王，ビッティ・デーヴァがジャイナ教からヒンドゥー教ヴィシュヌ派に改宗し，名前もヴィシュヌヴァルダナに改名したという伝説は広く知られている。ヴィシュヌヴァルダナは1116年にチョーラ勢力をカルナータカから排除したのを記念して，ホイサラ領下にヴィシュヌ寺院が建立し[注13]，ヴィシュヌ信仰の基礎を築いた。ヴィシュヌ信仰は，ラーマーヌジャという精神的指導者と，新興のホイサラ勢力のもとで爆発的に広まっていった。

シヴァ派は，ホイサラ朝の時代にはカーラームカ(Kalamukha)とカーパーリカ(Kapalika)の二つの分派が影響力があった。11世紀以降カーラームカの苦行僧がカルナータカに住んでいた形跡があり，ホイサラ朝以前から影響力があったものと考えられる[注14]。12世紀初頭のヴィシュヌ派の台頭を受けて，シヴァ派はヴィシュヌ派と競うように寺院を建立していった。一方，1153年頃以降に北カルナータカで，バクティ

を説くラーマーヌジャの教義と似たヴィーラシャイヴァ派（リンガーヤト派）が興り[注15]，ヴィシュヌ派に見られるような宗教改革の気運もうかがえる。

さて，これらの宗教，宗派が共存していた背景についてみることにする。まず，寺院を建立した人々についてその宗派をみると，ホイサラ王家だけを見てもジャイナ教，ヒンドゥー教シヴァ派，ヴィシュヌ派の三つの宗教宗派が共存しており，ひとつの宗派のみを庇護することはなかった。例えば，ホイサラ朝初期のをヴィシュヌヴァルダナ王を例に取ると，王自身はジャイナ教からヴィシュヌ派に改宗したが，その兄バッラーラⅠ世はシヴァ派で，ジャイナ教徒を王妃に迎えている。ヴィシュヌヴァルダナ王妃のシャーンタラーデーヴィーとその母親はジャイナ教徒であるが，父親はシヴァ派で，ヴィシュヌヴァルダナの子，ナラシンハⅠ世はヴィシュヌ派である。このような傾向は王家ばかりではなく重臣の中にも見られる[注16]。またヴィシュヌヴァルダナ王はベールールのチェーンナケーシャヴァ寺院等のヴィシュヌ派の寺院を建立する一方で，ホイサラ朝最大のシヴァ寺院であるハレービードのホイサレーシュヴァラ寺院も建立し，さらに臣下がジャイナ教寺院を建立する際にも助成している[注17]。このように異なる宗派の寺院を建立した背景には，ホイサラ帝国を拡大し，大多数の人々の支援を得ようとした支配者の思惑があるものと推察される。

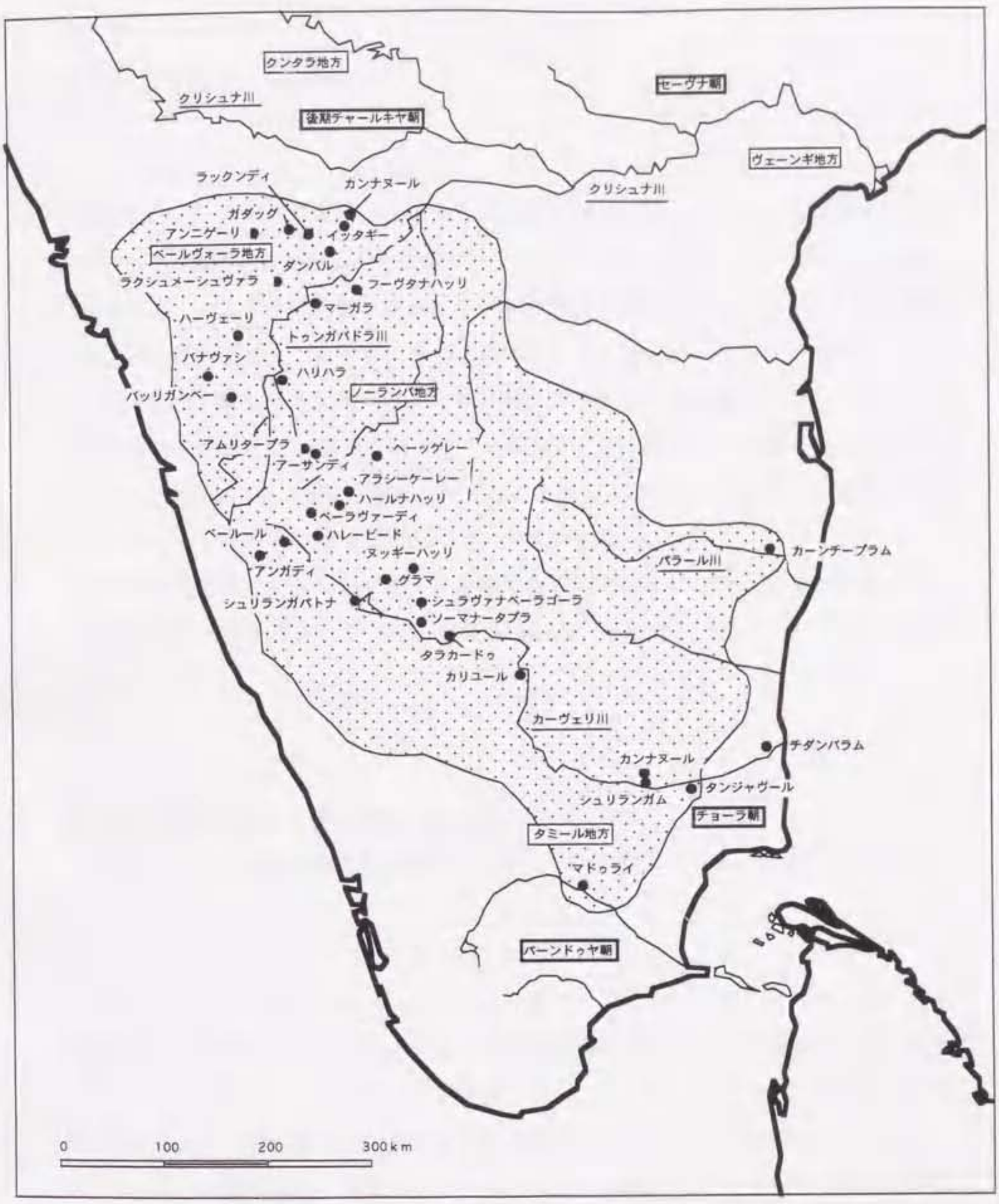
ホイサラ朝のもとでは，アグラハーラと呼ばれるバラモンの居留地が開村され，多くの住民が移住して人口の少なかった南カルナータカに一時は南インドの主要部を支配下におくような強大な帝国が築かれた原因のひとつと考えられているが[注18]，このアグラハーラは，シヴァ派のシヴァープラ，ヴィシュヌ派のアグラハーラ，ジャイナ教のジナラーヤを総称したものである。アグラハーラを建設する際に寺院を同時に建立することが一般的に行われていたが，異宗派の寺院を同一村内に建立することがしばしば見受けられる。ホイサラ寺院では，シヴァ派，ヴィシュヌ派を問わず，その外壁に両派の彫像が彫込まれるものがあり[注19]，ジャイナ教寺院には，すべての宗教を包含する記述が見られ[注20]，宗派を越えた寛容性が示されているものと考えられる。シヴァ神，ヴィシュヌ神を同時にまつる重層信仰寺院もこうした流れの中で捉えることができよう。

一方，シェッターは，シヴァ派，ヴィシュヌ派が，それぞれの中心地に自派の寺院を建立したこと，1268年建立のソーマナータプラのチェーンナケーシャヴァ寺院（ヴィ

シュヌ派）にはヴィシュヌ神にまつわる彫像しか見られないこと等を挙げ[注21]，コッリヤーはこれに加え，シヴァ派，ヴィシュヌ派の対立を示す刻文を挙げて[注22]，シヴァ派，ヴィシュヌ派のセクト主義に基づいた対立の構図を読み取っている。

最後に寺院建立にたずさわった芸術家について簡単に触れることにする。ホイサラ寺院には，その外壁のレリーフ等に彫刻家，または建築家の名前が刻文として残っていることが多く，コッリヤーの研究によって，彼らの宗派が判明している[注23]。それによると，シヴァ派カーラームカが彼らの多くが活動していた地域で隆盛だったので，この宗派に属する人々が宗派を越えて寺院の建立にたずさわっていた。ヴィシュヌ派，ジャイナ教の彫刻家の刻文は事例が少なく一概には判断できないが，一例が判明しているヴィシュヌ派の刻文はヴィシュヌ寺院に，ジャイナ教徒の彫刻家の刻文は，主としてジャイナ教寺院に限られるが，シヴァ寺院にも残されている[注24]。

以上をまとめると，ホイサラ朝のもとでは，ジャイナ教，ヒンドゥー教シヴァ派が広く信仰されていたところに，ラーマーヌジャによって，ヒンドゥー教ヴィシュヌ派が新たに信仰を集めるようになったものと理解できる。これらの宗教・宗派は，支配階層からは異なる宗派の寺院建立を助成したり，同村に異宗派の寺院を建立するなど，共存共栄するように図られていたが，中にはセクト主義に基づいて，シヴァ派，ヴィシュヌ派の間で，対立する構図も指摘できる。建立された寺院については，寺院の建立に携った芸術家が，ほとんどシヴァ派で，宗教宗派にかかわらず寺院を建立していることから，寺院の建立は施主の意向を反映したもので，異宗派の共存共栄，または対立の構図の中で考えることができよう。



図Ⅰ－1．ホイサラ朝の最大版図（13世紀初頭）

1：1,000,000 *State map of Goa, Daman & Diu and Karnataka*, Fourth edition, 1981, Survey of India ； S. Setter, *Hoysala Sculptures in the National Museum, Copenhagen*, Copenhagen, 1975, をもとに筆者が作成）

第Ⅱ章
ホイサラ寺院の平面類型

本章では，ホイサラ王家，またはそれに準ずる地位の人々によって建立された寺院をホイサラ寺院の代表的なものと位置づけ，これらについて主にガルバグリハ（祠堂）に至る軸線についての対称性の観点から平面類型を分類する。デル・ボンタは37基の寺院をホイサラ王家またはそれに準ずる人々によって建立された寺院として挙げている。113基の寺院について述べたダーキーの分類もすべてを網羅するものではない。デル・ボンタの挙げた37基の寺院は，その根拠が必ずしも明らかではないため，本章ではMAR の記述の中に寺院を奉献した王家または大臣の名前が記されているものを加えて，表Ⅱ－1に挙げる59基の寺院について考察する 。

まず寺院を構成する室をおさえ，平面類型化の方法を記した後，59基の寺院についてその地域的，経時的分布について考察を加え，デル・ボンタ，ダーキーによる分類との比較を行う。

第1節　寺院を構成する各室とその機能

まず，ホイサラ寺院本殿をその機能に着目して以下の六つの室に分類して考える。

1－1．ガルバグリハ（garbhagrha／祠堂）

ガルバグリハは寺院の最も奥に位置する小室で，ガルバ（子宮）グリハ（家）の名が示すように「胎内」と同一視される，厚い壁に囲われた窓のない空間である。またガルバグリハ上部にあるシカラ（上部構造）は，メール山（須弥山），すなわち神話上の聖なる土地と同一視され，聖なる神像を安置する聖所として機能している。ガルバグリハは，礼拝時以外の顕在化していないときには眠っているとされる神々を目覚めさせ，再び眠りにつくまでの間の一時的な仮の宿であると理解されている[注1] 。

1－2．シュカナースィ（sukanasi／前室）

表Ⅱ－1．王家または重臣の建立によるホイサラ寺院一覧

表中の地名，人名などの読み方はシェッターによる。「施主」欄に「不明」とあるのは，刻文が崩壊しているため施主の名前はわからないが，外壁の彫像の下などに他の寺院と同じ彫刻家の名前が刻まれているなど，寺院の刻文以外から王家と関係の深い人物によって建立されたことが推定できるものである。「年代」欄の「以前」はその年代に刻文はあるがそれが寺院の建立に触れていないものを指し，「c.」は *circa* の略である。「ポンタ」はデル・ポンタによる分類を，「ダーキー」はダーキーによる寺院の分類を示す。「ダーキー」欄の「LC」はダーキーによって後期チャールキヤ寺院に分類されたものを指す（序－注2参照）。

寺院名	所在地名	所在県名	施主	年代	平面類型	ポンタ	ダーキー	図版番号
チェンナケーシャヴァ	トゥルヴェーケーレー	トゥムクール	ソーヴァンナ・ダンナーヤカ	13世紀中葉	一軸対称－1	-	A	H. 15
チェンナケーシャヴァ	アララグッペ	トゥムクール	不明	13世紀前半	一軸対称－1	H	B	H. 16
ケーシャヴァ	ホーンナーヴァラ	ハッサン	シャンカラダナダナータ	1149	一軸対称－1	K	A	H. 17
チェンナケーシャヴァ	ナーガラープラ	トゥムクール	バッラーラ三世	1260 c.	一軸対称－1	H	B	H. 21
チェンナケーシャヴァ	ダルマープラ	マイソール	不明	12世紀初頭	一軸対称－1	K	A	H. 24
コーダンナ・ラーマ	ヒレーマガルール	チクマガルール	不明	12世紀後半	一軸対称－1	K	A	H. 35
ケーシャヴァ	フッレーケレー	ハッサン	ブーチラージャ	1163	一軸対称－1	K	A	H. 36
ラクシュミーナラシンハ	ソーマナータプラ	マイソール	ソーマナータ	1268 c.	一軸対称－1	-	-	H. 40
チェンナケーシャヴァ	タンダガ	トゥムクール	不明	12世紀後半	一軸対称－1	K	A	H. 41
チェンニガラーヤ	トゥルヴェーケーレー	トゥムクール	ソーヴァンナ・ダンナーヤカ	1263	一軸対称－1	-	-	H. 42
パールシュヴァナータ	ヘッゲーレー	チトラドゥルガ	ゴーヴェー・デーヴァ	1160	一軸対称－1	-	-	H. 48
イーシュヴァラ	アラシーケーレー	ハッサン	バッラーラ二世	1220	一軸対称－1 m	H	A	H. 52
パールシュヴァナータ	ハレーピード	ハッサン	ボーッパ・デーヴァ	1133	一軸対称－1m	-	A	H. 64
ブラフメーシュヴァラ	キッケーリ	マンドゥヤ	パンマヴェー・ナヤキティ	1171	一軸対称－1 n	K	A	H. 65
ソーメーシュヴァラ	ビーマナハッリ	マンドゥヤ	コーッメーヤールの息子たち	1229	一軸対称－2	-	-	H. 77
カッレーシュヴァラ	カサラゲーレー	マンドゥヤ	バッラーラ二世	1190	一軸対称－2	-	-	H. 85
ヴィーラバドラ	ハレーピード	ハッサン	不明	12世紀初頭	一軸対称－2	K	AB	H. 97
ヴィーラナーラーヤナ	ベールール	ハッサン	不明	1117	一軸対称－2	K	A	H. 98
ラクシュミーナーラーヤナ	トーンヌール	マンドゥヤ	スリゲーヤ・ナーガッヤ	12世紀	一軸対称－2	-	A	H. 107
シャーンティナータ	ジナナータプラ	ハッサン	ヴァースダイ カバンダヴァ・レーチマッヤ	1200 c.	一軸対称－2	K	A	H. 113
アンダランマ	ベールール	ハッサン	バッラーラ二世	13世紀初頭	一軸対称－2	H	A	H. 123
ナーゲーシュヴァラ	モーサレー	ハッサン	ナーガナーヤカ	1250	並置－1	K	A	H. 227
チェンナケーシャヴァ	モーサレー	ハッサン	ナーガナーヤカ	1250	並置－1	K	A	H. 228
チェンナケーシャヴァ	マラレー	チクマガルール	ラーヤナ・ダンダナータ	1130	並置－1	-	A	H. 229
シッデーシュヴァラ	マラレー	チクマガルール	ラーヤナ・ダンダナータ	1130	並置－1	-	A	H. 230
ホイサレーシュヴァラ	ハレーピード	ハッサン	ヴィシュヌヴァルダナ	1120 c.	並置－2m	H	B	H. 235
パンチャリンゲーシュヴァラ	ゴーヴィンダナハッリ	マイソール	2人の将軍	12世紀後半	並置－4 m	K	A	H. 237
パンチャリンゲーシュヴァラ	ソーマナータプラ	マイソール	ソーマナータ	1268	並置－5	－	A	H. 238

寺院名	所在地名	所在県名	施主	年代	平面類型	ポンタ	~~ダキー~~	図版番号
ソーメーシュヴァラ	ハールナハッリ	ハッサン	不明	1234 c.	二軸対称－1	H	B	H. 133
キールティナーラーヤナ	タラカードゥ	マイソール	ヴィシュヌヴァルダナ	1117	二軸対称－1	-	A	H. 136
チェンナケーシャヴァ	ベールール	ハッサン	ヴィシュヌヴァルダナ	1117	二軸対称－1	H	A	H. 137
ソーメーシュヴァラ	パンダニケー	シモガ	ボーッパ・セーッティ	1274	二軸対称－2	-	-	H. 140
ラクシュミーナラシンハ	ヌッギーハッリ	ハッサン	ボーンマナ・ダンナーヤカ	1246	二軸対称－2	H	B	H. 144
ヨーガマハーデーヴァ	セーッティケーレー	トゥムクール	ゴーパーラ・ダンナーヤカ	1261	二軸対称－2	-	A	H. 145
マハーリンゲーシュヴァラ	マーヴタナハッリ	ハッサン	不明	1200 c.	二軸対称－2	K	-	H. 153
ケーダレーシュヴァラ	ハレービード	ハッサン	バッラーラ二世	1219以前	二軸対称－21	H	B	H. 157
ラクシュミーナーラーヤナ	ホーサホーラル	マンドゥヤ	不明	13世紀中葉	二軸対称－21	H	B	H. 158
ラクシュミーナラシンハ	ハールナハッリ	ハッサン	ベーッダ、ヘーッガデー、ソーヴァンナのケーサンナ三兄弟	1234	二軸対称－21	H	B	H. 159
ラクシュミーナラシンハ	ジャーヴァガル	ハッサン	不明	c.1250	二軸対称－21	H	B	H. 148
マッリカールジュナ	バスラール	マンドゥヤ	ハリハラ・ドーマヤカ	1234	二軸対称－21n	H	B	H. 160
サウムヤケーシャヴァ	ナーガマンガラ	マンドゥヤ	バンマーラデーヴィー	1135	二軸対称－22	-	A	H. 161
ジャイナ寺院	マールクリ	ハッサン	ブーチマッヤ	1173	二軸対称－3	-	-	H. 168
チャッテーシュヴァラ	チャットチャットハッリ	ハッサン	チャッタダナーヤカ	1200 c.	二軸対称－3	-	A	H. 172
ラクシュミーナラシンハ	バドラーヴァティ	シモガ	不明	13世紀中葉	二軸対称－31	H	B	H. 176
チェンナケーシャヴァ	ソーマナータプラ	マイソール	ソーマナータ	1258	二軸対称－32	H	B	H. 177
ヴィーラバドラ	アーサンディ	チクマガルール	ハラハ・サーハニ	1205	二軸対称－5	K	A	H. 185
ヴィーラナーラーヤナ	ベーラヴァーディ	チクマガルール	不明	1206 c.	二軸対称－6	K	A	H. 186
ブーチェーシュヴァラ	コーラヴァンガラ	ハッサン	ブーチラージャ	1173	二軸対称－7	K	A	H. 187
ハリハレーシュヴァラ	ハリハラ	チトラドゥルガ	パラルヴァ	1224	二軸対称－12m	K	LC	H. 139
ケーダレーシュヴァラ	ナーガラープラ	トゥムクール	不明	1260	非対称－1	H	B	H. 189
ヘーメーシュヴァラ	ドージェートカ	マンドゥヤ	ドゥンメーヤ・ナーヤカ	1179	非対称－1	-	-	H. 193
アムリテーシュヴァラ	アムリタープラ	チクマガルール	アムリテーシュヴァラ・ダンナーヤカ	1196	非対称－2	K	A	H. 200
ダルメーシュヴァラ	グラマ	ハッサン	マーラシンガッヤ	1123	非対称－21	K	-	H. 206
サダーシヴァ	ヌッギーハッリ	ハッサン	キーラカ	1249	非対称－2n	-	A	H. 208
ヨーガナラシンハ	ナラシープラ	ハッサン	マムチヤッカ	1280以前	非対称－3	K	A	H. 209
アムリタリンガ・マーニケーシュヴァラ	ナンディターヴァレー	チトラドゥルガ	マーニカンナ	1220	非対称－4	K	LC	H. 220
マッリカールジュナ	ホーンナーリ	シモガ	ホイサラ・デーヴィ	1055	非対称－4n	-	-	H. 223
ベーシャヴェーシュヴァラ	アグラハーラ・ベルグリ	ハッサン	ケーシャヴァスヴァ・ダンナーヤカ	1260	非対称－5	-	A	H. 224
カッベーチェーンニガラーヤ	ベールール	ハッサン	シャーンタラー・デーヴィ	1117 c.	非対称－51	-	A	H. 226

ガルバグリハの前に位置し，ガルバグリハ同様厚い壁に覆われ，窓はない。ガルバグリハとの間には入口が設けられ，木造の扉がある。ナヴァランガとの間は扉を設けないか，ジャーラカと呼ばれる石造の格子窓を両脇に設けて木造の扉を取付ける。ホイサラ寺院ではシカラに続いてこの室の上部にある「オウムの嘴」の意味を持つシュカナーサがあるためこのように呼ばれるが，ヒンドゥー教一般ではアンタラーラ（antarala）と呼ばれ，「緩衝空間」を意味する。

1－3．ナヴァランガ（navaranga／拝殿）

ナヴァランガは，ヒンドゥー寺院一般ではマンダパ(mandapa)と呼ばれる拝殿と同じであるが，ホイサラ寺院の場合，四本の柱と東西，南北それぞれ二本の梁で九つに分割された正方形平面を呈していることがほとんどであることから[注2]，ナヴァ（9）ランガ（ホール）と名付けられこれが定着した[注3]。刻文には，ヌルトゥヤ・ゲーハ(nrtya-geha／劇場)，ランガ・マンタパ(ranga-mantapa／集会場，劇場)，ランガ・スタラ（ranga-sthala／劇場）等の機能に応じた名称がみられる[注4]。

1－4．ポルティコ

ナヴァランガの前面に腰壁と半柱で囲われた半屋外空間で，寺院の本殿入口にあたるが，ポルティコがなく直接ナヴァランガに入る寺院もある。刻文には，マンタパ（mantapa／ホール），ドゥヴァーラ・マンタパ（dvara-mantapa／入口の間）の記述がみられる。本論では，他室との混同を避けるためポルティコをこの室の名称として用いる。

1－5．マハーマンダパ（mahamandapa／前殿）

腰壁と半柱で囲われたホールで，ポルティコの前に位置する。刻文にはムカ・マンタパ（mukha－mantapa／前殿），マハー・マンダパ（maha-mantapa／大ホール），ソーバーナ・マンタパ（sobhana-mantapa／集会場），カルヤーナ・マンタパ（Karyana-mantapa／結婚式場）等の名称で呼ばれる。ナヴァランガと似た機能があって必ずしも機能のみで分類できるわけではないが，本論ではマハーマンダパをポルティコ前面に位置する半屋外空間を統合して指す語とする。

1－6．ナンディー堂（nandi mandapa）

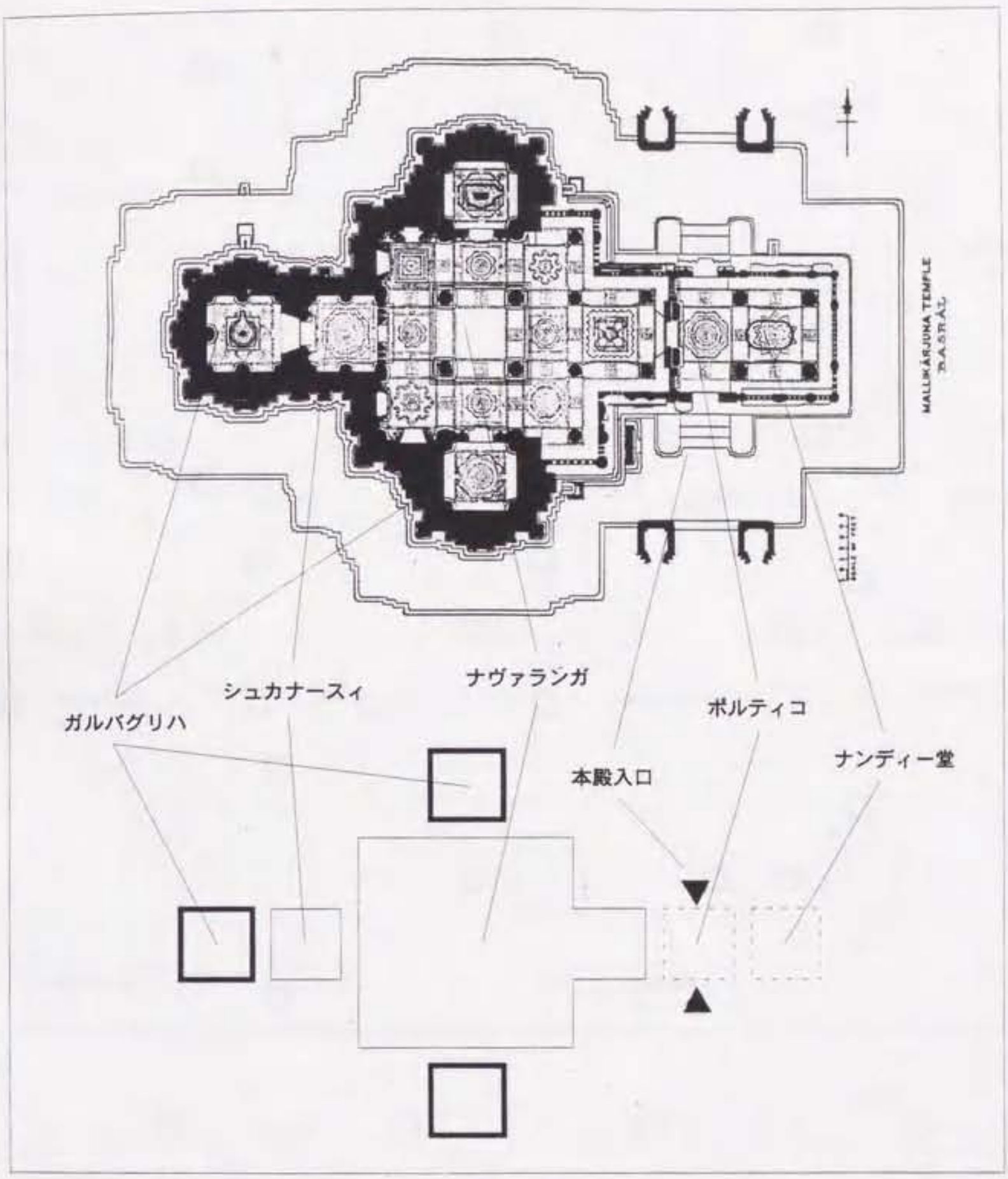
シヴァ神の乗物である牡牛，ナンディーをまつる小祠堂は，シヴァ神をまつるガルバグリハの反対側に位置する。ナンディーはナヴァランガ内に置かれることもあればシュカナースィに置かれることもあり，必ずしも小祠堂にまつられるとは限らない。またナンディー堂は半屋外空間であったり格子窓で仕切られることが多く，本稿ではガルバグリハとは区別して考える。

第2節　平面類型

機能に着目して各室相互の位置関係を考察することを主とするので，外壁面の凹凸の細かい点については省略し平面を模式的に示す。図Ⅱ－1に挙げるようにMARの実測図を模式化し，ガルバグリハを実太線で，ポルティコ，マハーマンダパ，ナンディー堂を点線で示してある他は実線で示す。図Ⅱ－2は上記の59基のホイサラ寺院の平面類型を模式的に表したものである。上述した機能によって分類した各室の配置を軸線について対称性に着目してみると，ホイサラ寺院の平面類型は，各室が東西軸線上にのみ位置している一軸対称平面，軸線に沿って対称に室が配置された寺院が並置された並置平面，ナヴァランガの南北にも室が配置されているが，軸線について対称となる二軸対称平面，非対称となる非対称平面に分けて考える[注5]。

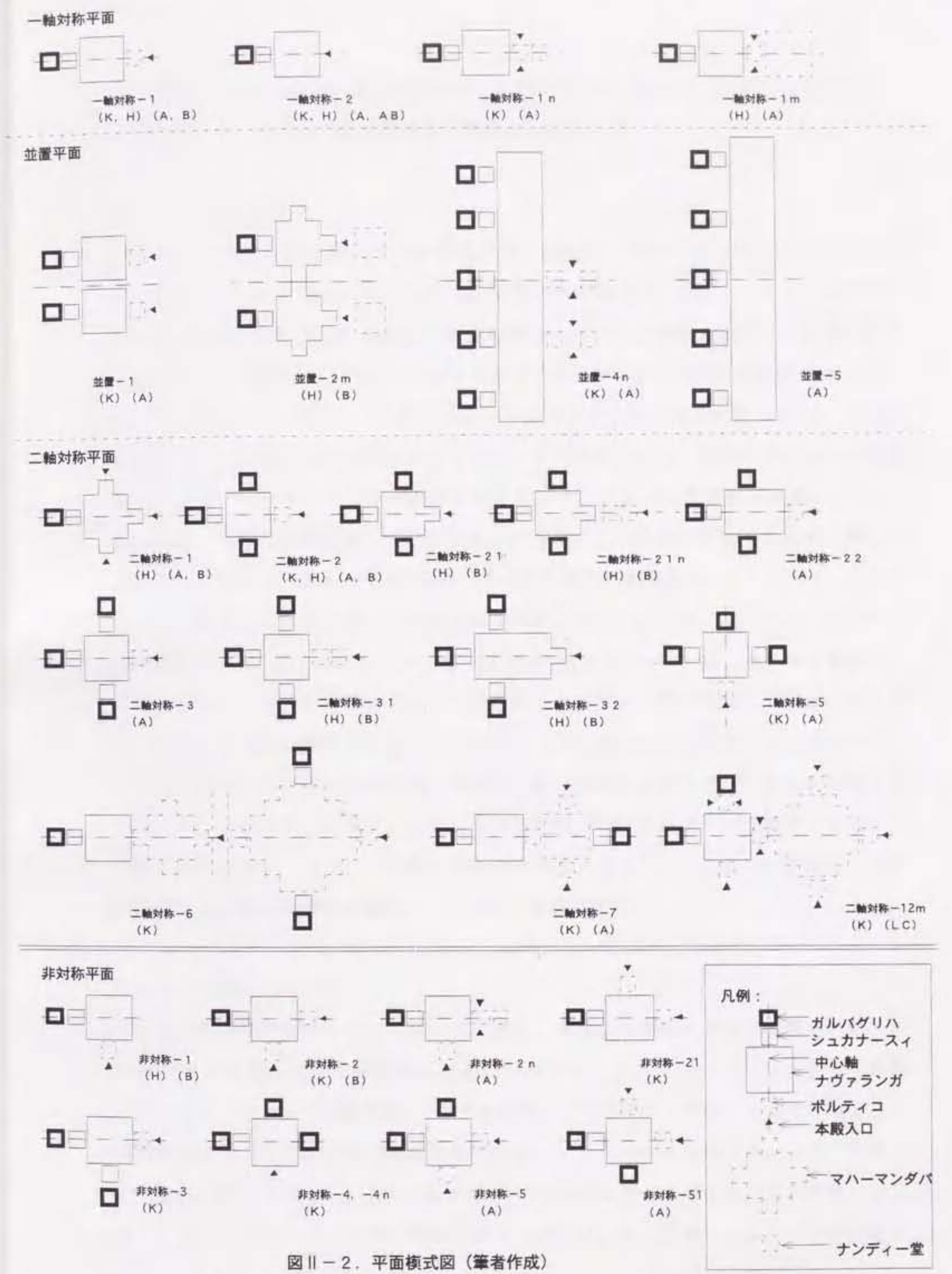
2－1．一軸対称平面

図Ⅱ－2の平面模式図に示すように，各室が一列に並んでいるものを一軸対称平面と呼ぶ。ガルバグリハ，シュカナースィ，ナヴァランガ，ポルティコがこの順番に一列に位置している寺院は，東西軸に沿って西にガルバグリハが位置するが，ジャイナ教寺院には南北軸に沿って南にガルバグリハが位置するものがある[注6]。一軸対称－2の寺院は，ポルティコがなく直接ナヴァランガに入る寺院を示す。アラシーケレのイーシュヴァラ寺院（一軸対称－1m／H．59）[注7]，キッケーリのブラフメーシュヴァラ寺院（一軸対称－1n／H．65）は東西軸線に沿ってポルティコの前面にマハーマンダパまたはナンディー堂が位置し，ポルティコには南北両方向からはいる。ポルティ



図Ⅱ－1．平面図の模式化

（パスラールのマッリカールジュナ寺院
[MAR 1934 Pl. XI.] をもとに筆者が作成）



図Ⅱ－2．平面模式図（筆者作成）

[m]はマハーマンダパ，[n]はナンディー堂が付随するものを指す。（K），（H）は，デル・ボンタによるコーラヴァンガラ・タイプ，ハレービード・タイプ，[K,H]は双方が含まれるものを，[A]，[B]はダーキーによるトレンドA，トレンドBを指す。

コの前面にナンディー堂，またはマハーマンダパのある一軸対称－1m，－1nを除き，入口からガルバグリハに至る動線も一軸線上にある。

2－2．並置平面

マラレーのシッデーシュヴァラ寺院（H．230），チェーンナケーシャヴァ寺院（H．229），モーサレーのナーゲーシュヴァラ寺院（H．227），チェーンナケーシャヴァ寺院（H．228）寺院は，規模の同じ一軸対称の寺院が近接して並置されているもので（並置－1），ハレービードのホイサレーシュヴァラ寺院（並置－2m／H．231）は後述のハールナハッリのソーメーシュヴァラ寺院（二軸対称－1／H．133）が左右に二つ並置され，十字形のナヴァランガの張出した袖の部分でつながった形態をしている。ソーマナータプラのパンチャリンゲーシュヴァラ寺院（並置－5，H．238）は，寺院前面が倒壊しているため，ポルティコの位置は不明であるが，同じ大きさのガルバグリハが南北に五つ並び，そのそれぞれの東側にシュカナースィ，ナヴァランガが位置し，ナヴァランガで南北につながっている。一方，ゴーヴィンダナハッリのパンチャリンゲーシュヴァラ寺院（並置－4m／H．237）は，南から二番目と三番目のナヴァランガの東側にポルティコを経てナンディー堂が位置しており，それぞれのポルティコには南北に階段が設けられている。南から四番目までは，ポルティコの位置，ナヴァランガのつなぎ方に対称性，統一性が見られるが，一番北に位置するナヴァランガには見られない。これはもともと四つのガルバグリハを並置するように計画されたものに，もう一つ増築したものと考えられる[注8]。これらの寺院は，一軸対称または二軸対称平面が並置されたものと理解できる。

2－3．二軸対称平面

二軸対称平面の寺院はナヴァランガの東西，南北に十字形に各室が配置されているもので，東西軸について線対称となる。ハールナハッリのソーメーシュヴァラ寺院（H．133）のような二軸対称－1の平面類型は，ナヴァランガがちょうどポルティコを取り込んだような形で十字形を呈している。ヌッギーハッリのラクシュミーナラシンハ寺院（H．144）のような二軸対称－2の平面類型ではナヴァランガの西側にシュカナースィ，ガルバグリハが，南北にガルバグリハ，そして東にポルティコが位置す

る。二軸対称－3の寺院（H．162-169）では，ナヴァランガの南，西，北側にシュカナースィ，ガルバグリハが，東側にポルティコが位置する。二軸対称－2の寺院ではナヴァランガの西側にのみシュカナースィがあるのに対し，マルクーリのジャイナ寺院（H．168）のような二軸対称－3の寺院ではすべてのガルバグリハにシュカナースィが付随する。これらは一軸対称平面に加えて，ナヴァランガの南北にガルバグリハまたはシュカナースィが配されたものと考えることができる。二軸対称－21，二軸対称－22の平面類型は，室の配置は二軸対称－2と同様であるが，ナヴァランガの平面形態が異なる（二軸対称－3についても同様）[注9]。ホーサホーラルのラクシュミーナーラーヤナ寺院（H．158）のような二軸対称－21の平面類型は，ナヴァランガの東側の中央部分が張出していて，ポルティコがナヴァランガと一体となっている。バスラールのマッリカールジュナ寺院（二軸対称－21 n／H．160）は，二軸対称－21の東側にポルティコとナンディー堂が位置し，南北からポルティコにはいるようになっている。バドラーヴァティのラクシュミーナラシンハ寺院（二軸対称－31／H．176）は，二軸対称－1の寺院のポルティコの東側にポルティコが増築され，もとのポルティコはナヴァランガに取込まれたものである[注10]。ナーガマンガラのサウムヤケーシャヴァ寺院（二軸対称－22，H．161），ソーマナータプラのチェンナケーシャヴァ寺院（二軸対称－32，H．177）は，ナヴァランガが長方形を呈している。アーサンディのヴィーラバドラ寺院（二軸対称－5／H．185）は，ナヴァランガの東西にシュカナースィ，ガルバグリハが，北側にガルバグリハ，南側にポルティコが位置している。ベーラヴァーディのヴィーラナーラーヤナ寺院（二軸対称－5，H．186）はもともと西側に位置するガルバグリハ，シュカナースィ，ナヴァランガ，マハーマンダパからなる寺院に，東側につながるソーパマンダパ，その南北にあるシュカナースィ，ガルバグリハが増築されたものである[注11]。ナヴァランガの三方にガルバグリハが位置していないが，東西軸について対称の位置にガルバグリハが設けられている。コーラヴァンガラのブーチェーシュヴァラ寺院（二軸対称－7／H．187）は東西軸に沿ってガルバグリハ，シュカナースィ，ナヴァランガ，マハーマンダパ，スーリヤをまつる小祠堂が位置している。腰壁と半柱で天井を支えるマハーマンダパは，ナヴァランガとほぼ同じ大きさの開放された空間に，南北にマハーマンダパと一体となった入口をとり，西側は，ポルティコを経てナヴァランガに，東は小祠堂につながる。ハリハラのハリ

ハレーシュヴァラ寺院（二軸対称－12m／H．139）は，東西軸線上にガルバグリハ，シュカナースィ，ナヴァランガ，マハーマンダパが位置し，ナヴァランガの南北にもそれぞれポルティコが位置している。ナヴァランガとマハーマンダパの間にはポルティコ状の空間があり南北に階段が設けてある。マハーマンダパは，この他に南，東，北側に入口を開いている。ナヴァランガの北側のポルティコにはカーラヴァイラバをまつる小祠堂がつながっている。カーラヴァイラバを祠る小祠堂をのぞけば，この寺院は東西軸に対して線対称である。これは後述の非対称－7の寺院とナヴァランガのまわりの様子が酷似しているが，カーラヴァイラバを祠る小祠堂の前にあるのはシュカナースポルティコであり，極めて特異である。

二軸対称平面は，ナヴァランガを中心としてそのまわりに位置する室の数，種類により差異を生じているものと理解できる。

2－4．非対称平面

非対称平面の寺院は上述の二軸対称平面とは異なり，ナヴァランガのまわりに非対称に室が位置している。ナーガラープラのケーダレーシュヴァラ寺院（H．189）のような非対称－1の平面類型はガルバグリハ，シュカナースィ，ナヴァランガが東西軸線上に，ポルティコがナヴァランガの南側に位置している[注12]。アムリタープラのアムリテーシュヴァラ寺院（非対称－2／H．200）はナヴァランガの東と南に，グラマのダルメーシュヴァラ寺院（非対称－21／H．206）は東と北にポルティコが位置する。ヌッギーハッリのサダーシヴァ寺院（非対称－2n／H．208）は，非対称－2の平面類型の東側にナンディー堂があり，ポルティコには南北からはいる。ナラシープラのヨーガナラシンハ寺院（非対称－3／H．209）は，ナヴァランガの西，南側に，シュカナースィ，ガルバグリハが位置し，東側にポルティコが位置する。ナンディターヴァレーのアムリタリンガ・マーニケーシャヴァ寺院（H．220），ホーンナーリのマッリカールジュナ寺院（H．222）のような非対称－4，－4nの平面類型はナヴァランガの西側にシュカナースィ，ガルバグリハが，北，東側にガルバグリハが位置し，南側からナヴァランガにはいる[注13]。これらの寺院は，ナヴァランガの北または南側一方をのぞいて室が位置している。これに対し，アグラハーラ・ベルグリのケーシャヴェーシュヴァラ寺院（非対称－5／H．224），ベールールのカッペチェニガラーヤ

寺院（非対称－51／H．226）は，ナヴァランガの四方に室が位置している。二軸対称平面の場合，東西軸に対して対称に室が位置していたのに対し，この平面類型の寺院は，ガルバグリハとポルティコがナヴァランガの相対する方向に一組ずつ二組位置していて，それぞれのガルバグリハに至る二本の軸線を考えるとナヴァランガでこの軸線は交差する。

第３節　その他のホイサラ寺院との比較（表Ⅱ－２）

以上で分類したホイサラ王家の建立による寺院とその他のホイサラ寺院との関係について考察する。表Ⅱ－２に挙げるように238基のホイサラ寺院をガルバグリハに至る軸線についての対称性で分類すると，一軸対称平面が最も多く，次いで二軸対称平面，非対称平面，並置平面の順になっている。ほとんどの平面類型はホイサラ王家の建立による寺院にみられるが，ホイサラ王家の建立による寺院にはみられない平面類型は以下に挙げるとおりである。

一軸対称平面では，ガルバグリハとポルティコからなる平面類型（一軸対称－３），ガルバグリハのまわりに入れ子上にガルバグリハを囲繞するプラダクシナ（巡道）が配置されるものである（一軸対称－４）。前者は，トーンヌールのナラシンハ寺院（H．128）ベーラゴーラのバクタヴァトサラ寺院（H．129）で，ナヴァランガのない単純な平面類型はこの他にも数多くあったであろうと考えられるが，寺院の平面構成を考える上でさほど重要であるとは思われない。後者はタミールナードゥ州との州境近いテーラカナンビのラクシュミーヴァラダラージャスヴァミー寺院（H．130），ゴーパーラスヴァミー寺院で（H．131），シュラヴァナベーラゴーラのカッタレ・バサディ（H．132）である。これらの寺院は，ホイサラ寺院の中でも特異で，タミール地方のチョーラ朝や，ジャイナ教の中心地シュラヴァナベーラゴーラを保護していたガンガ朝の建立した寺院の影響が残るものと考えられる。この他にシュラヴァナベーラゴーラのバンダーリ寺院は（H．63），ガルバグリハが長方形でシュカナースィがなく極めて特異である[注14]。

並置平面では，一軸対称平面が二つ（並置－２／H．231-234）または三つ（並置－３／H．236）並置されるものがある。これらは並置された寺院の類例と考えてよい。

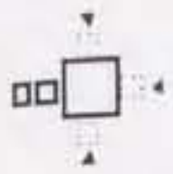
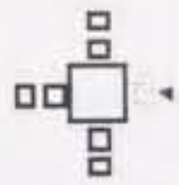
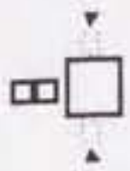
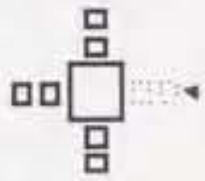
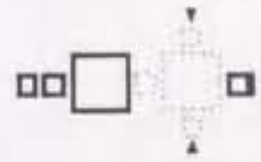
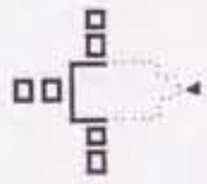
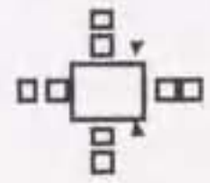
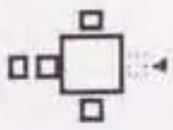
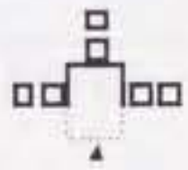
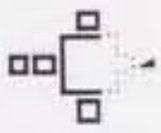
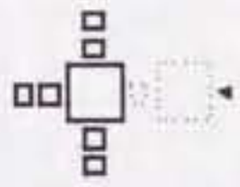
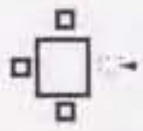
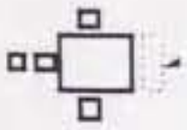
表Ⅱ－2［1］．ホイサラ寺院の平面類型（一軸対称平面，並置平面）

注）「H」欄の○印はホイサラ王家によって建立された寺院の平面類型を指す。「DB」欄はデルボンタによる分類で，K：コーラヴァンガラ・タイプ，H：ハレービード・タイプを示す。「DH」欄はダーキーによる分類で，A：トレンドA，B：トレンドB，AB：両者の要素を持つ寺院，LC：後期チャールキヤ寺院に分類されるものを指す。以下の表についても同様。

平面類型（模式図）	H	DB	DH	寺院数	計
一軸対称－1	○	K, H	A, B	52	
一軸対称－1 m	○	H	A	13	
一軸対称－1 n	○	K	A	2	
一軸対称－2	○	K,H	A, AB	59	
一軸対称－2 m	－	－	－	2	
一軸対称－3	－	－	－	2	
一軸対称－4	－	－	－	3	133

平面類型（模式図）	H	DB	DH	寺院数	計
並置－1	○	K	A	4 (2組)	
並置－2	－	－	－	4	
並置－2 m	○	H	B	1	
並置－3	－	－	－	1	
並置－4m	○	K	A	1	
並置－5	○	－	A	1	12

表Ⅱ－2［2］．ホイサラ寺院の平面類型（二軸対称平面）

平面類型（模式図）	H	DB	DH	寺院数	平面類型（模式図）	H	DB	DH	寺院数	平面類型（模式図）	H	DB	DH	寺院数	計
 二軸対称－1	○	H	A,B	5	 二軸対称－3	○	－	A	14	二軸対称－6	○	K	A	1	
 二軸対称－11	－	－	－	1	 二軸対称－31	○	－	B	1	 二軸対称－7	○	K	A	1	
二軸対称－12m	○	H	LC	1	 二軸対称－32	○	H	B	1	 二軸対称－8	－	－	－	1	
 二軸対称－2	○	K,H	A,B	17	 二軸対称－32	－	－	－	1						
 二軸対称－21	○	H	B	3	 二軸対称-3m	－	－	－	1						
二軸対称－21 n	○	H	B	1	 二軸対称－4	－	－	－	5						
 二軸対称－22	○	－	A	1	二軸対称－5	○	K	A	1						56

表Ⅱ－2［3］．ホイサラ寺院の平面類型（非対称平面）

構式図	H	DB	DH	寺院数	構式図	H	DB	DH	寺院数	計
非対称－1	○	H	B	11	非対称－31	－	－	－	4	
非対称－2	○	K	A	6	非対称－32	－	－	－	3	
非対称－21	○	K	－	1	非対称－4	○	K	LC	3	
非対称－21m	－	－	－	1	非対称－4n	○	－	－	3	37
非対称－2n	○	－	A	1	非対称－5	○	－	A	1	
非対称－3	○	K	A	1	非対称－51	○	－	A	2	

二軸対称平面では，ガルバグリハの正面を除くナヴァランガ左右側壁にポルティコが配置されるもの（二軸対称－11／H．138），ナヴァランガの三方にガルバグリハが配置されるがシュカナースィがないもの（二軸対称－4／H．180-184），ナヴァランガの四方にガルバグリハが位置し北側のガルバグリハの両脇から本殿に入るもの（二軸対称－8／H．188）である。

非対称平面では，ガルバグリハ，シュカナースィ，ナヴァランガ，ポルティコ，マハーマンダパが一軸線上にこの順に位置し，さらにナヴァランガ北側に入口があるもの（非対称－21m／H．207）がみられる。これは，ナヴァランガ南側にポルティコが配置される平面類型（非対称－2／H．200-205）に準じているものと考えられる。またナヴァランガの西側にガルバグリハ，シュカナースィが，もう一つのガルバグリハがナヴァランガ北側に位置し，東または南側に入口が位置するものがある（非対称－31，32／H．200-218）。ナヴァランガ西，南側にガルバグリハ，シュカナースィが位置し，東側にポルティコが位置する非対称－3（H．209）の類例と考えられよう。

以上のように，ホイサラ王家とその重臣の建立による寺院では，ホイサラ寺院全体と比較して，平面類型に大差がなく，デル・ボンタ，ダーキーの分類と比較する際にホイサラ王家の寺院のみを考えることも妥当であると思われる。

第4節　考察

以上のホイサラ寺院の平面の類型化に関して地域的，経時的分布をみる。次にこの平面類型と，デル・ボンタの分類したハレービード・タイプ，コーラヴァンガラ・タイプ，ダーキーのトレンドA，トレンドBとの比較を行う。

4－1．平面類型の地域的・経時的分布（図Ⅱ－3）

表Ⅱ－1に示すように，ホイサラ寺院は，カルナータカ州南部の七つの県に散在している。ホイサラ朝が首都を置いたハレービードのあるハッサン県に約半数の寺院が集中し，近接するチクマガルール県，マンドゥヤ県，トゥムクール県，マイソール県にそれぞれ，6，8，7，6基の寺院があり，北部のシモガ県，チトラドゥルガ県にはそれぞれ3基の寺院しかない。また12世紀前半から13世紀後半にかけて，12世紀後半に

図Ⅱ－3．カルナータカ州南部見取図

(*1:1,000,000, State map of Goa, Daman & Diu and Karnataka*, Fourth edition, 1981, Survey of India をもとに筆者が作成)

少なくなるが継続して寺院が建設されており，特に相関はみられない。

4－2．デル・ボンタによる分類との比較

ハレービード・タイプの寺院を東西軸についての対称性の観点から見るとナーガラーブラのケーダレーシュヴァラ寺院（非対称－1／H．189）を除いてすべて線対称である。単純な一軸対称平面の寺院ではなく，二軸対称平面の寺院で，ナヴァランガの三方にガルバグリハ，残る一方に入口があるものが多い。ハレービードのホイサレーシュヴァラ寺院の平面（並置－2m／H．235）はナヴァランガの一方にガルバグリハ，他の三方に入口があるハールナハッリのソーメーシュヴァラ寺院（二軸対称－1／H．133）が並置されたものと理解でき，関連が認められる。

コーラヴァンガラ・タイプの寺院のうち，モーサレーのナーゲーシュヴァラ寺院，チェンナケーシャヴァ寺院（並置－1／H．227，228）は規模のほぼ等しい二つの寺院が近接して並置されており，この点でゴーヴィンダナハッリの寺院（並置－4m／H．237）との関連が認められる。二軸対称平面のうち，二軸対称－2はハレービード・タイプでも見られるが，それ以外はボルティコの東側にマハーマンダパが位置し，さらにその南北にガルバグリハ（二軸対称－6／H．186），またはボルティコが配置されるなど（二軸対称－7，－12m／H．187，139），より複雑な平面類型を呈している。アーサンディのヴィーラバドラ寺院（二軸対称－5／H．185）は，各室が線対称に位置しているが，シュカナースィのないガルバグリハが入口正面に位置している点，線対称となる軸が東西軸ではなく南北軸である点が異なっている。非対称平面をみると，非対称－5，－51をのぞいて東西軸上にガルバグリハ，シュカナースィ，ナヴァランガが位置している。一軸対称平面に加えて，非対称－2，－21はそれぞれナヴァランガの南，北側にボルティコが，非対称－3はガルバグリハ，シュカナースィが南側に位置している。非対称－5は，ナヴァランガの南側の入口をのぞいてガルバグリハが位置するが，西側にはシュカナースィも位置している。

ハレービード・タイプに分類された16基の寺院のうち，二軸対称平面の寺院が10基で，そのうちナヴァランガの三方にガルバグリハが位置するものが8基で半数を占めている。

4－3．ダーキーによる分類との比較

ダーキーの分類によるトレンドAとトレンドBは，それぞれデル・ボンタのコーラヴァンガラ・タイプ，ハレービード・タイプに対応しているものとみなすことができるが，若干異なる分類がなされている。ダーキーがトレンドAと分類し，デル・ボンタがハレービード・タイプと分類した寺院は，アラシーケーレーのイーシュヴァラ寺院（一軸対称－1m／H．52），ベールールのアンダランマ寺院（一軸対称－2／H．123），チェンナケーシャヴァ寺院（二軸対称－1／H．137），バドラーヴァティのラクシュミーナーラーヤナ寺院（二軸対称－3／H．176）の3基である。これらはヴィマーナの外壁が二層に分割されているが，ビータ（基部）が数層のフリーズになっていないものである。

一方，ハレービードのヴィーラバドラ寺院（H．124）は，ダーキーによるとアディスターナはトレンドAであるが，外壁はトレンドBの様式で神像が彫刻されており，両者の要素を持つものとしている。デル・ボンタは，コーラヴァンガラ・タイプと分類しているが，その中では唯一基部に神像のフリーズがある例外であるとしている。

トレンドBに分類された12基の寺院をみると，その平面類型は，2基が一軸対称平面で，1基が並置，1基が非対称，その他の8基が二軸対称平面である。二軸対称平面のうちでも1基を除いて7基がガルバグリハがナヴァランガの三方に位置している。

4－4．まとめ

ホイサラ王家またはその重要な家臣等によって建設された寺院の平面類型の分布には，上述のように地域的，経時的な特徴は特にみられないが，平面のヴァリエーションには規則性がうかがえる。寺院の平面類型をガルバグリハに至る軸線についての対称性の観点からみると，ガルバグリハ，シュカナースィ，ナヴァランガ，ポルティコ，マハーマンダパがこの順番に配置される一軸対称平面を基本とし，ナヴァランガの周りにその他の室が配置されると考えることができる。一軸対称平面が組となって平面を構成する場合，それらが並置されたものがみられるが，各室が単体でナヴァランガのまわりに配置される場合，ナヴァランガの左右に東西軸線について左右対称に配置される二軸対称平面と，非対称に配置される非対称平面がある。各室を自由に組合わせることによって様々な平面類型が考えられるが，ナヴァランガを中心として東西，

南北の軸に沿って室が配置されている。

デル・ボンタ，ダーキーによって示された主にヴィマーナのまわりの壁面の構成についての分類と比較してみると，ハレービード・タイプの寺院は一つの寺院を除き東西軸について線対称で二軸対称平面を持つ寺院がまたトレンドBの寺院も二軸対称平面でガルバグリハがナヴァランガの三方に位置する寺院が多い。非対称平面の寺院はほとんどが，コーラヴァンガラ・タイプ，トレンドAに分類され，二軸対称の寺院についても，ハレービード・タイプ，トレンドBの寺院よりも複雑な平面類型を呈している。後期チャールキヤ朝の時代に建設されたダンバルのドッダ・バサッパー寺院[注15]やガダッグのソーメーシュヴァラ寺院[注16]が非対称であることを考慮すると，コーラヴァンガラ・タイプに後期チャールキヤ朝の時代の寺院の平面構成の影響が受継がれているものと考えられる。

最後にホイサラ独自の壁面分割であるとされるハレービード・タイプ，トレンドBについて，まつられた神格との関連をみておきたい。これらはそれぞれ16基，14基の寺院が分類されているが，いずれもヴィシュヌ神をまつる寺院が9基，8基でシヴァ神をまつる寺院（それぞれ5基），シヴァ，ヴィシュヌ両神をまつる寺院（それぞれ1基）に比べて多い。ホイサラ朝のもとで隆盛になったヴィシュヌ寺院は新たなホイサラ独自の建築様式で建立される傾向にあったものと考えることができよう。

第Ⅲ章
宗派・神格別分類と平面類型の相関

本章ではホイサラ寺院にまつられた神格の種別と位置，及び寺院の本殿入口との相関について整理し，ホイサラ寺院において特異な平面構成を考察するものである。ホイサラ寺院では，シヴァ神をまつる寺院（以下シヴァ寺院），ヴィシュヌ神をまつる寺院（以下ヴィシュヌ寺院），ジャイナ教の神々をまつる寺院（以下，ジャイナ教寺院）が多く，一つの寺院に複数の神格がそれぞれのガルバグリハ（祠堂）の中にまつられることもある[注1]。またホイサラ寺院では，シヴァ神，ヴィシュヌ神の他にスーリヤ神，マヒシャースラマルディニ神（シヴァ神の妃）等の異種の神格をまつる重層信仰の寺院（以下重層信仰寺院）もあるが[注2]，シヴァ神，ヴィシュヌ神をまつる寺院が最も多い。インドの中世寺院では，西に一つの主神をおき，東から寺院に入るものが多くみられるが，ホイサラ寺院における主神の位置に関してはこうした方位に加え入口との相関が重要な要因になっている。第Ⅰ章でふれたようにホイサラ朝のもとでは，アグラハーラと呼ばれるバラモン居留地が数多く建設され，これと同時に寺院も建立されている。したがって，寺院以外の建物との相関で入口位置が決定されていると考えるよりは，ある特定の方位を向くガルバグリハと入口との関係は寺院内部に起因しているものと考えられるのである。

デル・ボンタは，一つの寺院にガルバグリハが二つあるドヴィクータ型寺院と，三つあるトリクータ型寺院を宗派別に分けて整理している[注3]。シェッターはドヴィクータ型寺院と，トリクータ型寺院を，シヴァ派，ヴィシュヌ派，重層信仰に分けてガルバグリハと入口の位置によって分類し，事例の特徴を述べているが，総括的な見方が示されている訳ではない[注4]。これらの研究は主としてドヴィクータ，トリクータという祠堂の数による分類に基づいており，宗派と寺院本殿の平面類型との関係の考察が十分ではないと思われる。

マイソール考古局年次報告書（MAR）[注5]には，崩壊しているものも含めて460基以上のホイサラ寺院が記載され，またシェッターも427基を挙げているが[注6]，本章では寺院平面の構成，入口の位置等がMARに記述され，さらにまつられた神格が明らかな

238基の寺院を扱う。

第Ⅱ章で考察したように，ホイサラ寺院は，主にガルバグリハ（祠堂），シュカナースィ（前室），ナヴァランガ（拝殿），ポルティコによって構成され[注7]，これらの組合わせによって様々な平面が形作られている[注8]。寺院を構成しているこれらの諸室が主神をまつるガルバグリハに至る軸線に沿って対称に配置されているかどうかによって，線対称の寺院と非対称の寺院に大きく分けて考えることができる。線対称の寺院には，ガルバグリハ，シュカナースィ，ナヴァランガ等が一軸線上に配置される寺院（一軸対称平面），主神をまつるガルバグリハに加えてナヴァランガの左右に，さらにガルバグリハまたはポルティコが配置される寺院（二軸対称平面），ガルバグリハ，シュカナースィ，ナヴァランガが並置された寺院（一軸対称の並置）がみられる。また二軸対称平面に非対称に神格が配置されるものを二軸対称（非対称）として分けて考える。本章では上記の宗派別にこれらの一軸対称，二軸対称，並置，非対称の平面類型について考察するが，特徴的にみられる多神格をまつる寺院について特に着目する。

第１節　宗派・神格別分類

宗派・神格別の寺院建立数をみると（表Ⅲ－１），シヴァ神のみ，ヴィシュヌ神のみをまつる寺院が多く，次いで，重層信仰寺院，ジャイナ教寺院の順となっている。シヴァ神またはヴィシュヌ神をまつる寺院が12世紀から13世紀にかけて多く建立されるのに対し，ジャイナ教寺院は主に12世紀に建立されている。なお，シヴァ神，ヴィ

表Ⅲ－１．宗派・神格別の寺院建立数

宗教，宗派		11世紀	12世紀	13世紀	14世紀	不明	計
ヒンドゥー教	シヴァ派	6	30	41	2	3	82
	ヴィシュヌ派	1	35	31	10	6	83
	重層信仰	4	19	17	-	1	41
	その他	-	2	2	-	-	4
ジャイナ教		3	24	-	1	-	28
計		14	110	91	13	10	238

表Ⅲ－2．シヴァ寺院の平面類型

一軸対称平面		並置平面		二軸対称平面		非対称平面		計
	13		4		3		11	
	27		1		2		3	
	2		1		1		1	
	2		1		1		1	
	1		1		1		1	
	1		1		2		1	
	2		1		2		1	
	48		8		9		17	82

シュヌ神以外のヒンドゥー教の神格を単独でまつる寺院が3基あるが[注9]，これらはすべて，ナヴァランガの西側にガルバグリハ，東側に入口が位置する一軸対称平面の寺院である。

1－1．シヴァ寺院（表Ⅲ－2）

シヴァ寺院の平面類型について，ナヴァランガを中心としてガルバグリハ，シュカナースィ，寺院の本殿入口が，どの方位に配されているのかを表Ⅲ－2に示す（以下，表Ⅲ－3，4，5についても同様）。シヴァ寺院ではガルバグリハにまつられる偶像はリンガであることが一般的で図像的に区別することは難しいが[注10]，チットゥールのラーマナーテーシュヴァラ寺院[注11]（H．1）のようなナヴァランガの東側に入口が

あり，西側にガルバグリハが位置している一軸対称平面が最も多く，配置は同じであるが入口の方向が異なる寺院がわずかながらみられる。ハールナハッリのソーメーシュヴァラ寺院[注12]（H．133）のように，ナヴァランガの一方にシュカナースィ，ガルバグリハが位置し，その他の三方に入口が位置する寺院がある一方で，バスラールのマッリカールジュナ寺院（H．160）のように本殿入口をのぞく三方にガルバグリハが位置し，入口から主ガルバグリハに至る軸線について対称に位置する二軸対称寺院がみられる。

トゥルヴェーケーレーのムーレーサンカレーシュヴァラ寺院[注13]（H．190）のように，ナヴァランガの南側に入口があり，西側にガルバグリハ，シュカナースィが位置する非対称の寺院もみられる。ヌッギーハッリのサダーシヴァ寺院[注14]（H．208）は，ナヴァランガの西側にガルバグリハ，東，南側に入口が位置し，東側の入口はナンディー堂につながっている。この寺院は，後に寺院の南側に多くの附属建物が　増築され，現在は南北に長くなっている。ガルバグリハの正面ではない南側に入口のある寺院ではこの方向に拝殿等が展開していく可能性があり，サダーシヴァ寺院のようにこの南側の入口を本殿の主たる入口としてとらえることが可能であろうと思われる。またスィンダガッタのサンガメーシュヴァラ寺院[注15]（H．231）のように，ガルバグリハ，シュカナースィ，ナヴァランガ，入口のポルティコが並置され，ナヴァランガでつながったような寺院もある。

ヴィシュヌ寺院に比べ非対称平面の寺院が多く，また一軸対称平面が並置されナヴァランガを共有するものはシヴァ神のみをまつる寺院にしか見られない。

1－2．ヴィシュヌ寺院（表Ⅲ－3）

ヴィシュヌ神は10種のアヴァターラ（化身）の他にも，24種のヴィシュヌ・ムールティ（顕現）などの神話に基づいて様々な名前で呼ばれ，そのそれぞれがガルバグリハにまつられる。ホイサラ寺院では，ヴェーヌゴーパーラ（クリシュナ），ケーシャヴァ，ナーラーヤナ，ナラシンハがまつられることが多い。ヴェーヌゴーパーラは単独では2基の寺院にしかまつられていないが[注16]，その他のヴィシュヌ・ムールティと組合わせてまつられるときには，入口を入って左側のガルバグリハにまつられる。入口正面の主ガルバグリハには，その寺院の名称と同じアヴァターラまたはヴィシュヌ・

表Ⅲ－3．ヴィシュヌ寺院の平面類型

一軸対称平面		並置平面		二軸対称平面				非対称平面		計
	28				2		1		3	
	1				1		2		1	
	8				8		1		1	
	1				1				1	
	14				2					
	1				1					
	2				1					
	2	56		–	1			21		6	84

ムールティがまつられることが多い[注17]（表Ⅲ－８）。

ここにもシヴァ寺院同様，ナヴァランガの一方に入口があり，その反対側にのみガルバグリハが位置する一軸対称平面の寺院が多数を占める。ガルバグリハがナヴァランガの西側に位置する寺院がほとんどであるがガルバグリハが北側に位置する寺院もわずかながらみられる。入口の正面，左右にガルバグリハが位置し，左右対称となる二軸対称平面の寺院のうち，アダグールのラクシュミーナーラーヤナ寺院[注18]（H. 147）のように，入口正面の主神をまつるガルバグリハにのみシュカナースィが付随

するものが最も多い[注19]。

非対称平面はシヴァ寺院に比べて少ない。シヴァ寺院では入口の正面に必ずしもガルバグリハが位置するわけではないが，ヴィシュヌ寺院ではナラシープラのヨーガナラシンハ寺院[注20]（H．209）のように，非対称平面でもナヴァランガの東側に入口があり，主たるガルバグリハはナヴァランガの西側で，入口正面に位置している[注21]。ヴェーラヴァーディのヴィーラナーラーヤナ寺院[注22]（H．186）は，一軸対称寺院の東側に，南北にガルバグリハ，シュカナースィが位置するソーバマンダパと呼ばれる広間が増築されたもので，ホイサラ寺院でこの平面類型のものは一つだけである[注23]。またカイダラのチェーンナケーシャヴァ寺院（H．138）は，ナヴァランガの東側にシュカナースィ，ガルバグリハが位置し，南，北側に入口が位置する特異な平面類型をしている[注24]。ヴィシュヌ寺院では，カイダラの一例をのぞいてすべてナヴァランガの主たる入口の正面に，主神をまつるガルバグリハがある。

1－3．重層信仰寺院（表Ⅲ－4）

重層信仰寺院では，主ガルバグリハにシヴァ神の象徴としてのリンガを[注25]，これ以外のガルバグリハにパンチャヤターナ[注26]の神格のうちのいずれかをまつることが多い（表Ⅲ－9）。主ガルバグリハに向って右側にヴィシュヌ神をまつることが多いが，これ以外の神格もまつられる。

二軸対称平面の寺院では，三つあるガルバグリハのうち中央に主神であるリンガをまつり，左右にその他の神格をまつる。一方，コーラヴァンガラのブーチェーシュヴァラ寺院[注27]（H．187）は，ナヴァランガの西側にリンガをまつるガルバグリハ，シュカナースィが，ナヴァランガの東側に，南北に入口があるマハーマンダパ（広間）が位置し，さらにその東側にスーリヤをまつるガルバグリハ，シュカナースィが位置する。ハリハラのハリハレーシュヴァラ寺院[注28]（H．139）は，ナヴァランガの西側にシュカナースィ，ガルバグリハが位置し，東側にはマハーマンダパがあり，これらは東西の一軸に沿っている。さらにナヴァランガの南側にも入口があり，北側にはポルティコを介してカーラバイラヴァをまつるガルバグリハが位置する。ドーッダガッダヴァッリのラクシュミーデーヴィー寺院[注29]（H．188）は，ナヴァランガの東，南，西側に，それぞれガルバグリハ，シュカナースィがあり，ラクシュミー，ヴィシュヌ，

表Ⅲ－4．重層信仰寺院の平面類型

一軸対称平面	並置平面	二軸対称平面	二軸対称平面（神格非対称）	非対称平面	計
–	4（2組）	1	6	4	
		5	1	3	
		1	2	6	
		1	1	2	
		2	1		
	4（2組）	1			
		11	11		15	41

リンガをまつる。さらに北側にもシュカナースィ，ガルバグリハが位置し，カーリー（シヴァ神の妃）をまつるが，このシュカナースィの両脇に入口が位置している。以上三つの寺院はそれぞれが特異な神格の配置をしていて，ホイサラ寺院には他に類例がない。

モーサレーのナーゲーシュヴァラ寺院（H．227）とチェーンナケーシャヴァ寺院[注30]（H．228），マラレーのチェーンナケーシャヴァ寺院（H．229）とシッデーシュヴァラ寺院（H．230）は[注31]，それぞれ，リンガ，ケーシャヴァをまつる並置して建てられた寺院である。それぞれ東面して建てられたシヴァ寺院とヴィシュヌ寺院は，構造的には独立しているが，同時に，ほぼ同じ規模で近接して建てられているため，シヴァ神とヴィシュヌ神は対等であると信じていた人物によって建立されたものであると考えられている[注32]。

重層信仰寺院では，ケーレーサンテーのシャンブリンゲーシュヴァラ寺院[注33]（H. 219），アグラハーラベルグディのベッテーシュヴァラ寺院[注34]（H. 224）のようにナヴァランガの西側に主ガルバグリハが，南側に入口が位置する非対称の寺院が多い（表Ⅲ－4）。そのような寺院では，ナヴァランガの西側に位置する主ガルバグリハにはリンガをまつり，北側にはヴィシュヌ神をまつるものが多い。そこでは西側の主ガルバグリハに正対して東側に入口が取られた例よりも，北側ヴィシュヌ神をまつるガルバグリハに正対して南側に入口が取られた例が多く見られる[注35]。シェッターは，このようなシヴァ神とヴィシュヌ神をまつる重層信仰寺院について，「このタイプを発想した動機は，明らかにシヴァ神，ヴィシュヌ神の同格性を確立し，この原理をかれらの守護神の優位を信じていた，または信じ込まされていた人々に浸透させることであった」[注36]と述べている。このことはモーサレーのような並置された寺院でシヴァ神とヴィシュヌ神が同等に扱われていることから裏付けられよう。しかし，非対称平面の重層信仰寺院ではシヴァ神とヴィシュヌ神のまつられた位置と入口の関係が同等とはいえず，この両神の間にヒエラルキーが考えられる。第Ⅰ章で触れたように，シヴァ信仰が盛んであったこの地方に，ラーマーヌジャがタミール地方から逃れてきたことを契機にヴィシュヌ信仰が台頭してきた当時の社会背景を考えると，重層信仰寺院はヴィシュヌ神を入口正面におくことでまつりあげた形でヴィシュヌ信仰をシヴァ寺院に取込んだシヴァ派による共存共栄の一形式であるとみなすことができよう。このように考えると，寺院の名称がシヴァ神にちなんだものがほとんどであること[注37]（表Ⅲ－9），最も吉兆とされるナヴァランガ西側の主ガルバグリハに依然としてシヴァ神がまつられることが理解できる。また前述のシヴァ神のみをまつる非対称平面の寺院では，ナヴァランガの南側に入口，西側に主ガルバグリハが位置している寺院が多く，これと重層信仰寺院との関連性がうかがえる。

一方，ホイサラ朝のもとではアグラハーラと呼ばれるバラモン居留地が建設されている。例えばソーマナータプラ[注38]では，村の中央部にヴィシュヌ寺院，村の周縁の南東，東北東にシヴァ寺院が建立されており，アグラハーラではそれぞれにシヴァ神，ヴィシュヌ神をまつる二つ以上の寺院が建立されることが多い。このことから重層信仰寺院の成立理由の一つとして，おそらく経済的理由で複数の寺院を建てることができずに一つの寺院に複数の異なる宗派の神格をまつるようになったことも考慮に入れ

表Ⅲ－5．ジャイナ教寺院の平面類型

一軸対称平面		並置平面		二軸対称平面		非対称平面		計
	4				1			
	4				1			
	1				1			
	2				1			
	8							
	3							
	1							
	1	24		—		4		— 28

1－4．ジャイナ教寺院（表Ⅲ－5）

ジャイナ教寺院は一軸対称平面か，二軸対称平面の寺院で，非対称平面の寺院はない（表Ⅲ－5）。シュラヴァナベーラゴーラのアッカナ寺院（H．45）のようにナヴァランガの東側に入口が，西側にガルバグリハが位置する一軸対称の寺院が最も多いが，ジャイナ教寺院の場合，ハレービードのパールシュヴァナータ寺院（H．64）のようにナヴァランガの北側に入口があり，南側にガルバグリハが位置する寺院がヒンドゥー

教寺院に比べて多い。これらの寺院には24人のティールタンカナ（祖師），及び最初のティールタンカナであるアディナータの息子，パーフバリを加えた25祖師のうちのいずれかがまつられるが，ホイサラ寺院ではパールシュヴァナータ，アディナータ，シャーンティナータ，パーフバリがまつられることが多い。またヒンドゥー教の神格と同じ寺院にまつられることはない。

第２節　考察

以上，宗派別に整理してきたが，ここで以下の二点について考察する。

２－１．寺院にまつられた神格

ホイサラ寺院ではひとつの神格をまつることが多いが，他のヒンドゥー寺院では例外的にみられる複数の神格をまつる寺院もについてその組合わせをみると，ジャイナ教寺院ではティールタンカナという比較的単純な神格がまつられているが，ヒンドゥー教寺院ではこれより複雑な組合わせが見られる。シヴァ寺院ではリンガがまつられるのみで変化に乏しいが，ヴィシュヌ寺院では，ヴィシュヌ神の中でもケーシャヴァ，ナーラーヤナといったヴィシュヌの最高神格や，クリシュナ（ヴェーヌゴーパーラ），ナラシンハなどのアヴァターラが多くまつられている。第Ｉ章で簡単にふれたようにラーマーヌジャの哲学では最高神としてナーラーヤナが特に重要で[注39]，ホイサラ寺院でまつられることが多かったものと考えられる。また重層信仰寺院ではリンガを主としてまつり，その他にヴィシュヌ，スーリヤ等，パンチャヤターナを構成する神格がまつられることが多い（表Ⅲ－８，９）。多くはナヴァランガの西側にシヴァ神，北側にヴィシュヌ神，東側にスーリヤ神をまつっており，これが一般的であった様子がうかがえる。

２－２．宗派・神格別分類と平面類型の相関

次にホイサラ寺院について，一軸対称，二軸対称等の平面類型と宗派別に寺院の建立数をまとめてみると（表Ⅲ－６），他の王朝の寺院と同様に，ガルバグリハが一つあり，それに正対して入口が取られる一軸対称平面の寺院がそれぞれの宗派で大多数

表Ⅲ－6．宗派別，平面類型別寺院建立数

宗教・宗派	平面類型	一軸対称平面	並置平面	二軸対称平面	二軸対称平面（神格非対称）	非対称平面	計
ヒンドゥー教	シヴァ派	48	8	9	-	17	82
	ヴィシュヌ派	56	-	21	-	6	83
	重層信仰	-	4	11	11	15	41
	その他	4	-	-	-	-	4
ジャイナ教		24	-	4	-	-	28
計		132	12	45	11	38	238

注）二軸対称平面（神格非対称）は，各室の配置は二軸対称であるが，神格の配置が非対称であるものを指す。

を占めている。ナヴァランガの東側に本殿入口が位置する寺院が一般的であるが，北側に位置するものがジャイナ教寺院に比較的多くみられる。二軸対称平面をみると，シヴァ寺院では入口が三つのものとガルバグリハが三つのものに分けられるが，ヴィシュヌ寺院，重層信仰寺院，ジャイナ教寺院ではガルバグリハが三つのものが多い。一軸対称平面が並置される寺院は，シヴァ寺院，重層信仰寺院にみられるが，重層信仰寺院は個々の寺院が別棟であるのに対し，シヴァ寺院ではナヴァランガを共有し並置されている。非対称平面はヴィシュヌ寺院にもみられるが，ガルバグリハが一つのシヴァ寺院，複数の神格をまつる重層信仰寺院に多い。非対称平面のヴィシュヌ寺院では主ガルバグリハに正対して入口があり，主ガルバグリハと入口の関係は一軸対称平面に準ずるものと考えられる。これに対し，シヴァ寺院，重層信仰寺院ではナヴァランガの西側に主ガルバグリハが位置し，南側に入口があることが多く，ヴィシュヌ寺院とは性格が異なる。

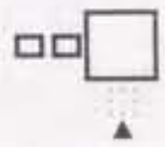
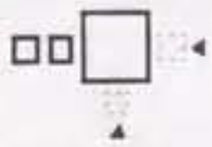
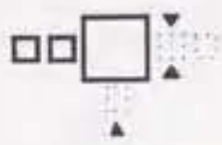
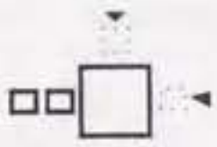
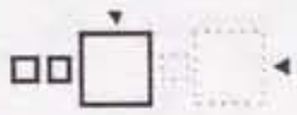
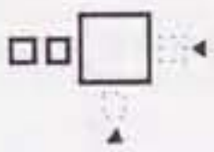
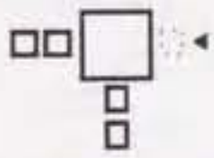
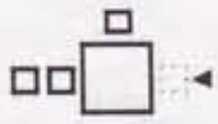
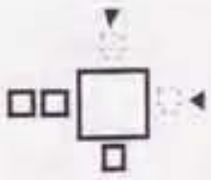
ここでホイサラ寺院の特徴のひとつに挙げられる複数のガルバグリハがある場合を考える。同宗派の神格をまつる場合，シヴァ寺院では一軸対称平面が並置されるものが特徴的に見られ，ヴィシュヌ寺院，ジャイナ教寺院では二軸対称平面が多く用いられる。これに対し，異宗派の神格をまつる重層信仰寺院では非対称平面が多く用いられる傾向にある。平面の対称性に着目してみると，同宗派の神格をまつる場合に寺院の平面は対称に，異宗派の神格をまつる重層信仰寺院の場合に非対称になる傾向があり，同種の神格をまつる場合と異種の神格をまつる場合の建築表現の違いであると考えることができよう。

そこで異種の神格をまつる重層信仰寺院に比較的多く用いられる非対称平面がシヴァ寺院にもみられることに着目してみると，両者ともナヴァランガ西側の主ガルバグリハにリンガをまつり，南側に入口がある寺院が多い（表Ⅲ－２，４）。ひるがえって，これらの寺院の建立年代を経年的にみると（表Ⅲ－７），重層信仰寺院は，11世紀から13世紀にかけて建立されているのに対し，シヴァ寺院は，12世紀から14世紀にかけて建立されている。シヴァ寺院，重層信仰寺院とも12世紀から13世紀にかけて建立された寺院が多いので一概にはいえないが（表Ⅲ－１），11世紀から建立が認められる重層信仰寺院の方がシヴァ寺院より早くから建立されていたとみることができる。以上を勘案すると，重層信仰寺院では入口の正面にヴィシュヌ神をまつり，入口から向って左側に主神であるシヴァ神をまつることにより，神格のヒエラルキーを表現する非対称平面が発展し，それがシヴァ神のみをまつる非対称平面に影響を与えたと考えることができる。つまり，ホイサラ寺院で特異な非対称平面は，シヴァ信仰とヴィシュヌ信仰のヒエラルキカルな建築表現の追求の中から生み出されたものではないかと考えられるのである。

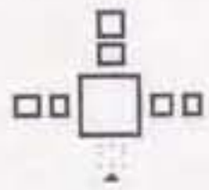
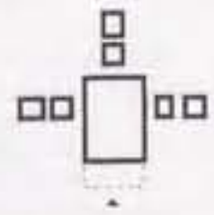
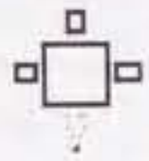
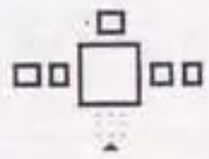
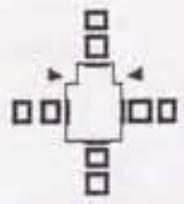
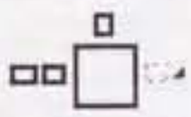
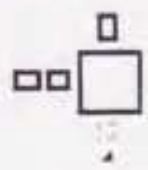
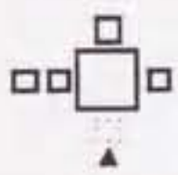
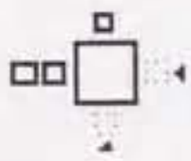
２－３．まとめ

以上，ホイサラ寺院の平面類型について，まつられた神格と入口位置から考察してきた。ホイサラ寺院に限ってみると，複数の神格をまつる寺院では同宗派の神格をまつる場合に寺院の平面類型は対称に，異宗派の神格をまつる重層信仰寺院の場合に非対称になる傾向が認められる。シヴァ派の優位を確立しながらヴィシュヌ信仰を取込んだ非対称の重層信仰寺院はシヴァ派による両派の共存共栄の一形式であり，これに対して，二軸対称平面の寺院はこのような思惑に反発するセクト主義のあらわれであるとみなすこともできよう。一方，ダンバルのドーッダバサッパー寺院[注40]，ガダッグのソーメーシュヴァラ寺院[注41]など11世紀後半以降，後期チャールキヤ朝のもとで中カルナータカに非対称平面の寺院が建立されている。ホイサラ寺院との影響関係についてはさらに第Ⅴ章で考察する。

表Ⅲ－7［1］．非対称平面の宗派別・年代別建立数[シヴァ派，ヴィシュヌ派]

宗派	平面類型	11世紀	12世紀	13世紀	14世紀	不明	計
シヴァ派	 非対称-1	-	6	5	-	-	11
	 非対称-2	-	2	1	-	-	3
	 非対称-2n	-	-	1	-	-	1
	 非対称-21	-	1	-	-	-	1
	 非対称-21m	-	-	1	-	-	1
	計	-	9	8	-	-	17
ヴィシュヌ派	 非対称-2	-	1	1	1	-	3
	 非対称-3	-	-	1	-	-	1
	 非対称-31	-	-	1	-	-	1
	 非対称-51	-	1	-	-	-	1
	計	-	2	3	1	-	6

表Ⅲ－7［2］．非対称平面の宗派別・年代別建立数[重層信仰]

宗派	平面類型	11世紀	12世紀	13世紀	14世紀	不明	計
重層信仰	 二軸対称-3（神格非対称）	2	3	1	-	-	6
	 二軸対称-32（神格非対称）	-	-	1	-	-	1
	 二軸対称-4（神格非対称）	-	1	-	-	1	2
	 二軸対称-5（神格非対称）	-	-	1	-	-	1
	 二軸対称-8（神格非対称）	-	1	-	-	-	1
	 非対称-21	-	2	2	-	-	4
	 非対称-22	-	1	2	-	-	3
	 非対称-4	1	3	2	-	-	6
	 非対称-5	-	1	1	-	-	2
	計	3	12	10	-	1	26

注）二軸対称平面（神格非対称）は，各室の配置は二軸対称であるが，神格の配置が非対称であるものを指す。

表 III－8．ヴィシュヌ寺院にまつられた神格

平面類型	寺院名	所在地	神格（左）	神格（中央）	神格（右）	資料番号
二軸対称-1	キールティナーラーヤナ	タラカードゥ	-	キールティナーラーヤナ（西）	-	H. 136
	チェーンナケーシャヴァ	ベールール	-	ケーシャヴァ（西）	-	H. 137
二軸対称-11	チェーンナケーシャヴァ	カイダラ	-	ケーシャヴァ（東）	-	H. 138
二軸対称-2	ラクシュミーカンタ	ヘーダタレー	ヴェーヌゴーパーラ（南）	ラクシュミーカンタ（西）	ラクシュミーナラシンハ（北）	H. 142
	ナーラーヤナ**	アーネーカンナンバディ	ヴェーヌゴーパーラ（南）	ケーシャヴァ（西）	ナラシンハ（北）	H. 143
	ラクシュミーナラシンハ**	ヌッギーハッリ	ヴェーヌゴーパーラ（南）	ケーシャヴァ（西）	ラクシュミーナラシンハ（北）	H. 144
	ヨーガマハーデーヴァ	セーッティケーレー	ヴェーヌゴーパーラ（南）	ヨーガマーダヴァ（西）	ラクシュミーナラシンハ（北）	H. 145
	マーダヴァラーヤ	ベーッルール（マンドゥヤ）	ヴェーヌゴーパーラ（南）	マーダヴァ（西）	ジャナールダナ（北）	H. 146
	ラクシュミーナーラーヤナ	アダグール	ヴェーヌゴーパーラ（南）	ラクシュミーナーラーヤナ（西）	サラスヴァティ（北）	H. 147
	ラクシュミーナラシンハ**	ジャーヴァガル	ヴェーヌゴーパーラ（南）	シュリダーラ（西）	ラクシュミーナラシンハ（北）	H. 148
	ゴーパーラスワミー**	ノーナヴィナケーレー	ヴェーヌゴーパーラ（南）	ジャナールダナ（西）	ヨーガナラシンハ（北）	H. 149
	ラクシュミーナラシンハ**	ヴィグナサンテー	ヴェーヌゴーパーラ（東）	ケーシャヴァ（南）	ラクシュミーナラシンハ（西）	H. 150
二軸対称-21	ラクシュミーナーラーヤナ	ホーサホーラル	ヴェーヌゴーパーラ（南）	ラクシュミーナーラーヤナ（西）	ラクシュミーナラシンハ（北）	H. 158
	ラクシュミーナラシンハ**	ハールナハッリ	ヴェーヌゴーパーラ（南）	ケーシャヴァ（西）	ラクシュミーナラシンハ（北）	H. 159
二軸対称-22	サウムヤケーシャヴァ	ナーガマンガラ	ヴェーヌゴーパーラ（南）	ケーシャヴァ（西）	ラクシュミーナラシンハ（北）	H. 161
二軸対称-3	ラクシュミーナラシンハ**	ホーレ・ナラシープラ	ヴェーヌゴーパーラ（南）	ナーラーヤナ（西）	ラクシュミーナラシンハ（北）	H. 165
二軸対称-31	ラクシュミーナラシンハ	バドラーヴァティ	ヴェーヌゴーパーラ（南）	ナラシンハ（西）	ヴィシュヌプルショッタマ（北）	H. 176
二軸対称-32	チェーンナケーシャヴァ	ソーマナータプラ	ヴェーヌゴーパーラ（南）	ケーシャヴァ（西）	ジャナールダナ（北）	H. 177
二軸対称-4	チェーンナケーシャヴァ	アラケーレー	ヴェーヌゴーパーラ（南）	ケーシャヴァ（西）	ラクシュミーナラシンハ（北）	H. 180
	ケーシャヴァ	イェーッランバラシ	ヴェーヌゴーパーラ（南）	ケーシャヴァ（西）	ラクシュミーナラシンハ（北）	H. 181
二軸対称-6	ヴィーラナーラーヤナ	ヴェーラヴァーディ	ヴェーヌゴーパーラ（南）	ナーラーヤナ（西）	ラクシュミーナラシンハ（北）	H. 186
非対称-2	ナラシンハ	クニガル	-	ナラシンハ（西）	-	H. 203
	ジャナールダナ	バルヤ	-	ジャナールダナ（西）	-	H. 204
	ラーマナータ	ベーッルール（コーラール）	-	ヴァラダラージャ（西）	-	H. 205
非対称-3	ヨーガナラシンハ	ナラシープラ	-	ヨーガナラシンハ（西）	ヴィシュヌ（南）	H. 209
非対称-5	カッペーチェーンニガラーヤ	ベールール	ラクシュミーナーラーヤナ（南）	カッペーチェーニガラーヤ（西）	-	H. 226

（注）「寺院名」の欄の「＊＊」は，中央のヴィシュヌ・ムールティの名称が寺院の名称になっていないものを示す。

表 III－9．重層信仰寺院にまつられた神格

平面類型	寺院名	所在地	神格（右）	神格（中央）	神格（左）	資料番号
並置-1	シッデーシュヴァラ、チェーンナケーシャヴァ	マラレー	リンガ（シッデーシュヴァラ寺院／南）、ケーシャヴァ（チェーンナケーシャヴァ寺院／北）			H. 230, 231
	ナーゲーシュヴァラ、チェーンナケーシャヴァ	モーサレー	リンガ（ナーゲーシュヴァラ寺院／南）、ケーシャヴァ（チェーンナケーシャヴァ寺院／北）			H. 227, 228
二軸対称-12m	ハリハレーシュヴァラ	ハリハラ	-	ハリハラ（西）	カーラバイラヴァ（北）	H. 139
二軸対称-2	ハリハレーシュヴァラ	ハリハラープラ	サラスヴァティ（南）	ハリハラ（西）	アーナンタパドマナーバ（北）	H. 151
	シッデーシュヴァラ	ニールグンダ	ヴェーヌゴーパーラ（南）	リンガ（西）	チェンナケーシャヴァ（北）	H. 152
	マハーリンゲーシュヴァラ	マーヴタナハッリ	ハリハラ（南）	リンガ（西）	ウグラ・ナラシンハ（北）	H. 153
	ソーメーシュヴァラ	スットゥール	シャンカラ・ナーラーヤナ（南）	リンガ（西）	チャームンダ（北）	H. 154
	チャームンデーシュヴァリー	ウンディゲーナハル	チャームンデーシュヴァリー（南）	リンガ（西）	ケーシャヴァ（北）	H. 155
	カッレーシュヴァラ	バーランギ	ヴィシュヌ（西）	リンガ（北）	スーリヤ（東）	H. 156
二軸対称-21n	マッリカールジュナ	バスラール	ヴェーヌゴーパーラ（南）	リンガ（西）	アマラナーラーヤナ（北）	H. 160
二軸対称-3	ムーレーシンゲーシュヴァラ	ベーッルール（マンドゥヤ）	ヴェーヌゴーパーラ（南）	リンガ（西）	ラクシュミーナーラーヤナ（北）	H. 166
二軸対称-3（神格非対称）	シッデーシュヴァラ	アナゴードゥ	リンガ（西）	ヴィシュヌ（北）	スーリヤ（東）	H. 170
	コーディ・バサヴァンナ	バーダ	リンガ（西）	ケーシャヴァ（北）	スヴァヤンブー（東）	H. 171
	チャッテーシュヴァラ	チャトチャトハッリ	リンガ（西）	ケーシャヴァ（北）	スーリヤ（東）	H. 172
	コーディ・カッレーシュヴァラ	ローキケーレー	リンガ（西）	不明（北）	スーリヤ（東）	H. 173
	カッレーシュヴァラ	マララケーレー	リンガ（西）	ジャナールダナ（北）	スーリヤ（東）	H. 174
	マッリカールジュナ	サーガリ	リンガ（西）	ハリハラ（北）	リンガ（東）	H. 175
二軸対称－32（神格非対称）	ヴェーヌゴーパーラ	マーガラ	リンガ（西）	ブラフマー（北）	ヴィシュヌ（東）	H. 176
二軸対称-3m	トリムールティ	バンダニケー	リンガ（南）	リンガ（西）	ケーシャヴァ（北）	H. 179
二軸対称-4（神格非対称）	ルドレーシュヴァラ	ハレーピード	リンガ（西）	リンガ（北）	ヴィーラバドラ（東）	H. 183
	イーシュヴァラ	ナルクンダ	リンガ（西）	ケーシャヴァ（北）	不明（東）	H. 184
二軸対称-5（神格非対称）	トリムールティ（ヴィーラバドラ）	アーサンディ	リンガ（西）	不明（北）	不明（東）	H. 185
二軸対称-7	ブーチェーシュヴァラ	コーラヴァンガラ	リンガ（西）	-	スーリヤ（東）	H. 187
二軸対称-8（神格非対称）	ラクシュミーデーヴィー	ドーッダガッダヴァッリ	ラクシュミー（東）	ヴィシュヌ（南）、カーリー（北）	リンガ（西）	H. 188
非対称-31	バッレーシュヴァラ	カルケーレー	リンガ（西）	不明（北）	-	H. 211
	カンヴェーシュヴァラ	ベーッルール（コーラール）	リンガ（西）	不明（北）	-	H. 212
	ドヴィクータ	ケーレーサンテー	リンガ（西）	ヴィシュヌ（北）	-	H. 213
	シンゲーシュヴァラ	ムディゲーレー	リンガ（西）	ハリハラ（北）	-	H. 214
非対称-32	ラーメーシュヴァラ	アラケーレー	リンガ（西）	ヴィシュヌ（北）	-	H. 215
	ラーメーシュヴァラ	ベーンデーケーレー	リンガ（西）	ヴィシュヌ（北）	-	H. 216
	カッレーシュヴァラ	カンナガラ	リンガ（西）	女神／散逸（北）	-	H. 217
非対称-4	ソーメーシュヴァラ	カバリ	リンガ（西）	ジャナールダナ（北）	スーリヤ（東）	H. 218
	シャンブリンゲーシュヴァラ	ケーレーサンテー	リンガ（西）	ヴェーヌゴーパーラ／散逸（北）	不明（東）	H. 219
	アムリタリンガ・マニケーシュヴァラ	ナンディターヴァレー	リンガ（西）	ケーシャヴァ（北）	リンガ（東）	H. 220
非対称-4n	ケーテーシュヴァラ	チャンナギリ	リンガ（西）	ケーシャヴァ（北）	ナンディー（東）	H. 221
	カッルーマタ	チャンナギリ	リンガ（西）	ヴィシュヌ（北）	ナンディー（東）	H. 222
	マッリカールジュナ	ホーンナーリ	リンガ（西）	不明（北）	不明（東）	H. 223
非対称-5	ベーッテーシュヴァラ	アグラハーラ・ベルグディ	リンガ（西）	ケーシャヴァ（北）	-	H. 224
	ジャガテーシュヴァラ（イーシュヴァラ）	アーネーコーンダ	リンガ（西）	ヴィシュヌ（北）	-	H. 225

第Ⅳ章
ホイサラ寺院を構成する各室平面と寺院本殿の平面類型との相関

本章ではホイサラ寺院を構成する諸室の平面形態及びそれぞれの壁面の構成，天井，ニッチの配置を検討するとともに，寺院本殿の平面類型との相関を寺院本殿の構造，平面の正面性の観点から考察する。まず，ナヴァランガについて平面形態と壁面の構成，天井，ニッチの配置との相関をおさえ，その他の室について同様に検討し，最後にそれら相互の関連と寺院の平面類型との相関について論じる。

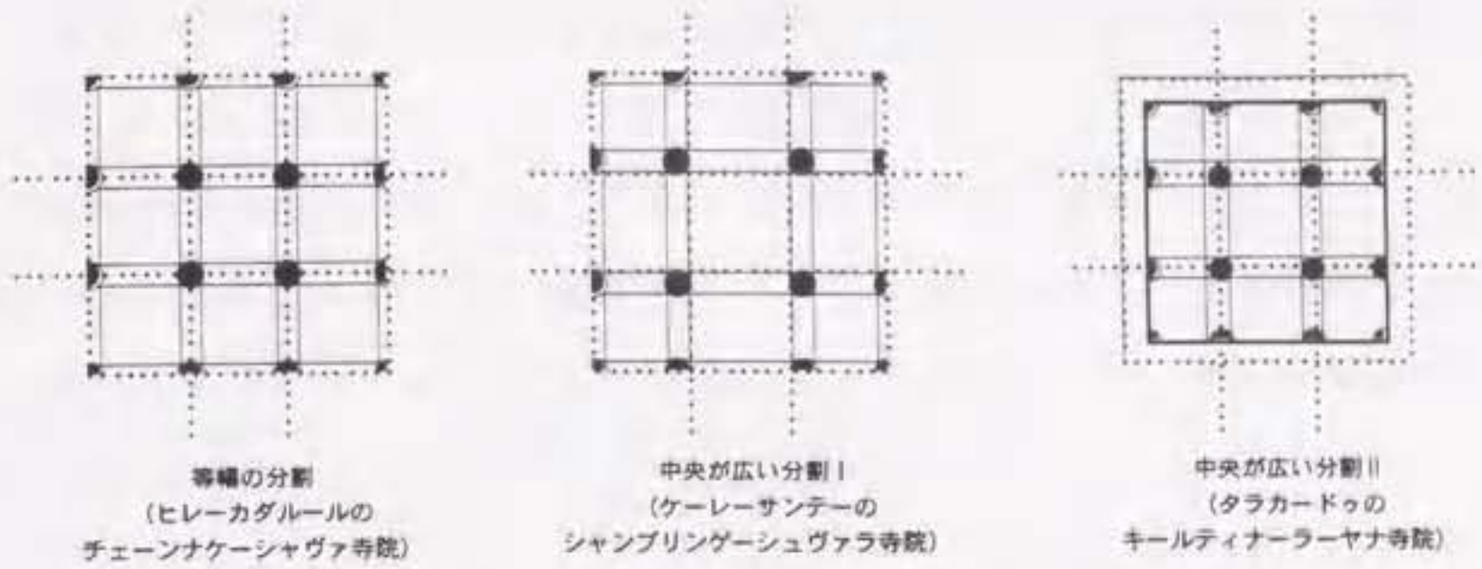
対象としてマイソール考古局年次報告書（以下，MAR）に平面図が掲載されているもの，またはそれに準じて寺院の平面形態が記述されている189基の寺院を扱う[注1]。フォエケマがナヴァランガ，マハーマンダパの平面形態を分類しているが，これは寺院を記述するために便宜上なされたもので，平面形態を論じるには十分ではないと思われる[注2]。ホイサラ寺院の各室について平面形態に着目した研究はほとんどなされていない。

第１節　ナヴァランガの構成

まずナヴァランガについて平面形態，壁面の構成，天井の装飾とその配置，ニッチの配置をおさえる。

１－１．平面形態

ナヴァランガでは，正方形平面が最も多いが，長方形平面，十字形平面もみられる[注3]。正方形平面は，ナヴァランガ中央部の四本柱にかかる梁で九つの正方形または矩形に分割されていることが多い[注4]。この柱と梁で仕切られたひとつの正方形または矩形はアンカナと呼ばれる。このアンカナは，ヒレーカダルールのチェーンナケーシャヴァ寺院[注5]のようにナヴァランガの中央のアンカナとほぼ同じ幅で九つのアンカナが構成される場合と（H．54），ケーレーサンテーのシャンブリンゲーシュヴァラ寺院[注6]や（H．219），タラカードゥのキールティナーラーヤナ寺院（H．136）のよう



図Ⅳ－1．ナヴァランガの平面分割の模式図（筆者作成）

（注）実線はアンカナの天井伏を，点線は正方形の9分割を示す。

に，中央に位置するアンカナより周縁部に位置するアンカナの方が幅が狭い場合がある。ヒレーカダルールの寺院では，ナヴァランガ内周壁のピラスターの柱心のなす正方形を縦横に三等分する線が柱心となっているのに対し，ケーレーサンテーの寺院では，その正方形を縦横三等分する線に外接するように柱が配置されているので，柱心は外側にずれることになる。タラカードゥの寺院ではナヴァランガ外周壁を三等分する線に外接するように柱が配置されていて（図Ⅳ－1），ナヴァランガは大きさのほぼ等しい正方形をもとに構成されているといえる。また，バスラールのマッリカールジュナ寺院[注7] のナヴァランガのように正方形平面にポルティコが付加した形のものがみられる（H．160）。

長方形平面のナヴァランガには，ゴーヴィンダナハッリのバンチャリンゲーシュヴァラ寺院[注8] のようにガルバグリハに対して横列配置されたもの（H．237），ナーガマンガラのサウムヤケーシャヴァ寺院[注9] のように縦列配置されたものがある（H．161）。横列配置されたものは，すべてガルバグリハも複数が横列に配置されており，それぞれのガルバグリハに対応する正方形平面を持つナヴァランガの間に，ナヴァランガ中央部と同一幅をもつアンカナが挿入されてひとつの連続したホールが構成されている[注10]。縦列配置されたものをみると，ナーガマンガラのサウムヤケーシャヴァ寺院や（H．161），マーガラのヴェーヌゴーパーラ寺院[注11] では（H．178），三つのアン

カナが入口側に付加されているが，ソーマナータプラのチェーンナケーシャヴァ寺院（H．177）[注12] では九つのアンカナから成る正方形平面が二つ重合した形をとっている。

十字形平面をみると，ハールナハッリのソーメーシュヴァラ寺院（H．133）のようにナヴァランガ中央部と同じ大きさのアンカナがガルバグリハのある辺を除く三辺に配置されているが，これらはナヴァランガとポルティコが一体化されたものと考えることができる[注13]。

1－2．壁面構成

ナヴァランガの壁面構成をみると[注14]，四辺を壁面に囲われたものが最も多いが，一部を腰壁とやや小型の柱で囲われたものがある。これはジャガティーと呼ばれる構造で[注15]，腰壁の上に二重に柱をまわして梁を支え，外側の柱にはジャーラカと呼ばれる格子窓が入る[注16]。ソーマナータプラのチェーンナケーシャヴァ寺院のように柱の外側に格子窓が取付けられ，内側には腰かけが取付けられることがほとんどだが（H．177），キッケーリのプラフメーシュヴァラ寺院[注17]では内側の柱に格子窓が取付られている（H．65）。ナヴァランガが壁にどの程度囲われているかをみると（表Ⅳ－1），四辺が壁で囲われるもの，本殿入口側の一辺がジャガティーでその他は壁に囲われるもの，本殿入口側の一辺と左右の側壁の中程までがジャガティーで囲われ，その他がコの字形に壁面で囲われるもの，本殿入口反対側の一辺が壁面でその他ジャガティーで囲われるもの，シュカナースィへ.の入口を除いて壁のないものがある。

四辺が壁に囲われたナヴァランガは正方形，長方形平面にみられるが，正方形平面が大多数を占める。長方形平面をみると，ナーガマンガラのサウムヤケーシャヴァ寺院（H．161）のようにガルバグリハに対して縦列配置されたものが多く，横列配置されたものはスィンダガッタのサンガメーシュヴァラ寺院[注18]のみである（H．231）。

三辺が壁に囲われるナヴァランガは正方形平面と長方形平面にみられる。正方形平面はアララグッペのチェーンナケーシャヴァ寺院（H．16）[注19]のようにジャガティーがポルティコと一体の構造のものと，アラシーケーレーのイーシュヴァラ寺院（E）[注20]のようにジャガティーがないものがある（H．52）。ゴーヴィンダナハッリのバンチャリンゲーシュヴァラ寺院のように横列配置の長方形平面を持つナヴァランガで

も，同様に三辺が壁で囲われている（H．237）。コの字形に壁に囲われたナヴァランガは，正方形，十字形，長方形平面にみられる。正方形，長方形平面をみると，ソーマナータプラのチェーンナケーシャヴァ寺院のようにガルバグリハの際からジャガティーが位置するものが多いが（H．177），マーガラのヴェーヌゴーパーラ寺院のようにガルバグリハの脇に壁面が続いてジャガティーが位置するものがある（H．178）。これらの寺院では，ナヴァランガの入口側半分とポルティコがジャガティーを介して一体となったような形をしている。十字形平面をみると，ハールナハッリのソーメーシュヴァラ寺院のように左右入口のガルバグリハ側までは壁で，ポルティコ側はジャガティーとなるものや（H．133），タラカードゥのキールティナーラーヤナ寺院[注21]のように左右入口の両側がジャガティになるものがある（H．136）。ペールールのカッペーチェーンニガラーヤ寺院[注22]（H．226），アーネーコーンダのイーシュヴァラ寺院[注23]（H．225）は，ナヴァランガを中心にしてガルバグリハとポルティコが直交配置されている。

一辺壁のナヴァランガは正方形平面ではみられないが，アラシーケーレーのイーシュヴァラ寺院（D）のようなガルバグリハに対し横列された長方形平面（H．232），ペールールのチェーンナケーシャヴァ寺院[注24]のような十字形平面でみられる（H．137）。

ドーッダガッダヴァッリのラクシュミーデーヴィー寺院[注25]では（H．188），壁のないナヴァランガの周囲にガルバグリハ，シュカナースィが配置され，これらと接する部分をのぞいてジャガティーで囲われる。ナヴァランガのピラスターは中央の四本の柱にかかる梁が壁に接するところに梁を受ける形で設けられるが，このようなナヴァランガはこの寺院を除いてはみられない。

1－3．ニッチの配置

ナヴァランガのニッチはピラスターの間の壁面に穿たれ，シカラ風の上部構造体を模したレリーフで装飾される[注26]。シカラ風の上部構造体は数本のピラスターに支えられ，祠堂入口同様，開口部脇にはドゥヴァーラパーラ（門神）がまつられる。ナヴァランガにニッチが設けられている寺院をみると，ハリハラープラのハリハレーシュヴァラ寺院のように，ガルバグリハ[注27]のある側の壁にシュカナースィの入口をはさんで

左右対称に二つ設けられているものが最も多い（H．151）。複数のガルバグリハがある寺院でもマガラのヴェーヌゴーバーラ寺院（H．178），バンダニケーのソーメーシュヴァラ寺院[注28]のように（H．140），それぞれのガルバグリハについて二つずつニッチが設けられる。シュカナースィ両脇のニッチに加え，ブーラのソーメーシュ ヴァラ寺院[注29] のように（H．2）左右側壁のガルバグリハ寄りに設けられる場合がある。

一方，ジナナータブラのサーンティナータ寺院[注30] のように（H．113），ナヴァランガ側壁中央に向い合って設けられるものもみられる。シャンテバーチャハッリのマハーリンゲーシュヴァラ寺院[注31] では（H．68），シュカナースィ両脇のニッチに加えて，ナヴァランガ側壁の中央に設けられ，コーラヴァンガラのブーチェーシュヴァラ寺院[注32] ではシュカナースィ両脇，ナヴァランガ側壁に二つずつ設けられる（H．187）[注33]。ハレービードのバールシュヴァナータ寺院[注34] ではガルバグリハのある壁をのぞいてニッチが設けられ（H．64），アラシーケーレーのイーシュヴァラ寺院（E）ではナヴァランガが壁面で囲われるところすべてにニッチが設けられている（H．52）。これらの寺院ではナヴァランガ側壁中央に設けられたニッチがその他に比べて大きい。

ニッチが非対称に配置されるものをみると，ニッチが一つの寺院では，シュカナースィ脇のいずれか一方にだけニッチが位置する[注35]。ニッチが三つのチャンナギリのケーテーシュヴァラ寺院[注36] の場合，シュカナースィ入口の両脇に加え，従ガルバグリハの左側に設けられている（H．221）。キッケーリのブラフメーシュヴァラ寺院では五つのニッチが，ガルバグリハ両脇，ナヴァランガ側壁中央に加え，ナヴァランガ右側壁のガルバグリハ寄りに位置している（H．65）。チットールのイーシュヴァラ寺院[注37] ではガルバグリハに向って左側壁のガルバグリハ寄りと中央を除いて八つニッチが設けられる（H．1）。これらの寺院でニッチが非対称に設けられる理由は判明していない。

長方形平面のナヴァランガがガルバグリハに対して横列配置されたゴーヴィンダナハッリのパンチャリンゲーシュヴァラ寺院では，上述のニッチの位置に加え，正方形平面の間に挿入された三つのアンカナにニッチが設けられる（H．237）。

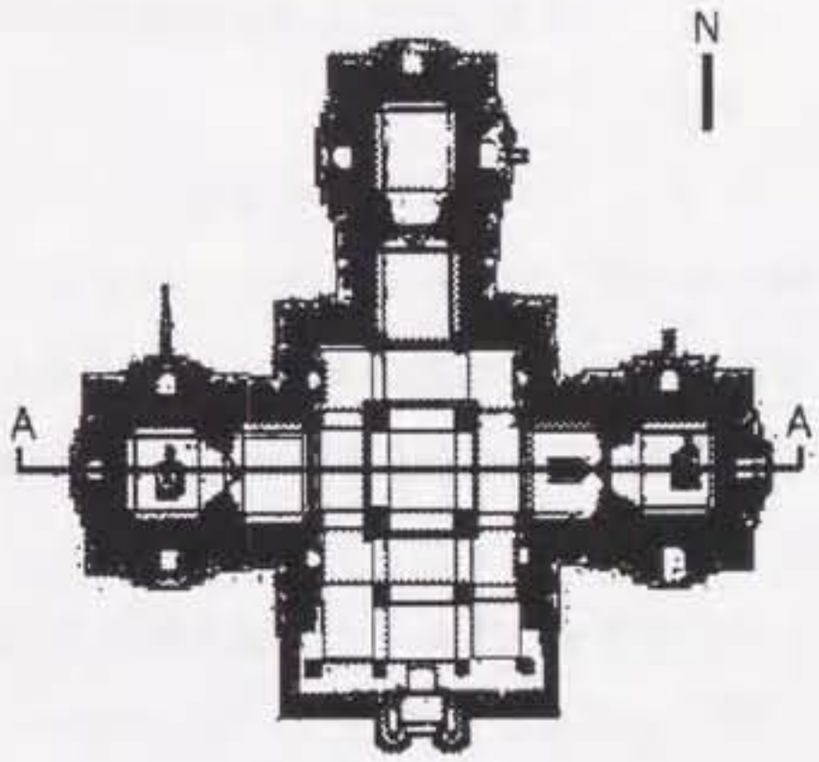
十字形平面のナヴァランガをみると，タラカードゥのキールティナーラーヤナ寺院では（H．136），ガルバグリハの両脇にニッチが設けられており，またハールナハッ

リのソーメーシュヴァラ寺院では（H．133），左右の袖廊にあるニッチを含めて六つ設けられている。

ナヴァランガのニッチの配置をガルバグリハの位置との関連でみると，ガルバグリハの両側のナヴァランガ壁面に一対のニッチを配置し，これに加えて左右側壁のガルバグリハ寄りに一対のニッチを配置するのが基本的な考え方であろう。

1－4．天井装飾

梁で仕切られたアンカナの天井に装飾が施されるが，天井の装飾には，ラテルネンデッケ[注38]を用いているものが最も多い。この他に同心円状に石を積上げてドーム状の構造を作り中央にペンダントを設けるもの，ひとつのアンカナに九つの正方形を彫



A－A断面図

図Ⅳ－2．マーガラのヴェーヌゴーパーラ寺院，

平面図（上），A－A断面図（下）。

（A. Rea, *Chalukyan Architecture* Delhi, Rpt. 1970...pl. IX, Xをもとに筆者作成）

込むデザインがみられる。マーガラのヴェーヌゴーパーラ寺院を例に寺院本殿の断面をみると（図Ⅳ－２／Ｈ．178），天井高，梁高は一様ではなく，ナヴァランガがガルバグリハ，シュカナースィより高くなっている。ナヴァランガの天井高をみると，中央のアンカナの天井装飾がまわりの天井よりも高くなっていて天井高が一様ではない。また天井装飾の配置には対称性を見いだすこともできないことから，ナヴァランガのアンカナはそれぞれ独立していて，そのそれぞれについて異なる装飾がなされたものと考えることができよう。

第２節　他室の構成

続いてナヴァランガ以外の室についても同様に，平面形態，壁面の構成，天井の装飾とその配置，ニッチの配置をみることにしよう。

２－１．ガルバグリハ，シュカナースィ

ガルバグリハ，シュカナースィの平面形態は，幾つかの例外をのぞいて正方形である[注39]。壁面構成をみると，すべて壁に囲われており，四隅にピラスターがあって梁型を受けることが多いが，ナヴァランガのように一部をジャガティーで囲われたものはみられない。

ガルバグリハのニッチをみると，ハールナハッリのソーメーシュヴァラ寺院のように左，右，奥壁にニッチがひとつづつ，計三つあるもの[注40]（Ｈ．133），アララグッペのチェーンナケーシャヴァ寺院のように奥壁に一つある寺院があるが[注41]（Ｈ．16），ほとんどの寺院ではニッチはない[注42]。これらのニッチのある寺院ではそれぞれのニッチの両脇にさらにピラスターが設けられている[注43]。ニッチのないガルバグリハ壁面をみると，四隅にピラスターがあって梁型を受けることが多いが，ニッチがあるものと同じように各壁に二本のピラスターがあるものと，各壁中央にピラスターが一本あるものが見られる。両者は構造体とは無関係である。ひとつの寺院に複数のガルバグリハがあるものは，ソーマナータプラのチェーンナケーシャヴァ寺院（Ｈ．177）のように主ガルバグリハと同じようにピラスター，ニッチが配置される場合があるが，バスラールのマッリカールジュナ寺院 のように主ガルバグリハよりもピラスターの数

が少なくなる場合もある（H．160）。

シュカナースィにニッチが設けられることはなく，ピラスターはガルバグリハ同様，四隅に一本ずつ設けられることが多い。ピラスターの配置をガルバグリハとの関連でみると，ガルバグリハの四隅以外にピラスターがある場合，ゴーヴィンダナハッリのパンチャリンゲーシュヴァラ寺院のようにガルバグリハと同じようにピラスターが配置されることが多いが（H．237），ハレービードのホイサレーシュヴァラ寺院のようにシュカナースィのピラスターの数の方が少ない場合もある[注44]（H．235）。このようにガルバグリハ，シュカナースィのピラスターは構造体とは関連性の弱い装飾的なもので，室内部のアーティキュレーションである。

ガルバグリハ，シュカナースィの天井にはナヴァランガと同様の装飾がみられるがラテルネンデッケが用いられることが多い。

2－2．ポルティコ，マハーマンダパ

マハーマンダパ，ポルティコは壁面で囲われることはなく，ジャガティーもしくは柱で上部の構造を支えている。マハーマンダパは独立していることがあるが，コーラヴァンガラのブーチェーシュヴァラ寺院のように祠堂がつながっているものもみられる（H．187）。

ポルティコの平面形態をみると，正方形平面のアンカナひとつで構成されるのがほとんどで，長方形平面はナーガマンガラのサウムヤケーシャヴァ寺院（H．161）にみられるのみである[注45]。ポルティコは両側にジャガティーがあってナヴァランガ壁面に接していることが多いが，ソーマナータプラのチェーンナケーシャヴァ寺院のようにナヴァランガと一体であるものもみられる（H．177）。しかし，キッケーリのプラフメーシュヴァラ寺院のようにマハーマンダパが前面に位置する場合にはジャガティーは設けられない（H．65）。

マハーマンダパの平面形態には，正方形，長方形，十字形，星形がみられる。正方形平面はヒレーカダルールのチェーンナケーシャヴァ寺院のように中央の本の柱とそのまわりの12本の柱で支えられたもので九分割されたナヴァランガと同じ平面形態のものと（H．54），キッケーリのプラフメーシュヴァラ寺院のようにひとつのアンカナでナンディを安置するものがある（H．65）。十字形平面は，コーラヴァンガラの

ブーチェーシュヴァラ寺院（H．187），ベーラヴァーリのラクシュミーナーラーヤナ寺院（H．186）[注46]，アムリタープラのアムリテーシュヴァラ寺院（H．200）[注47]，ハリハラのハリハレーシュヴァラ寺院（H．200）[注48]にみられる。これらのマハーマンダパの平面形態は，ナヴァランガ同様に中央のアンカナを中心としてその周りにアンカナが付加されたものと考えることができる。星形平面のマハーマンダパは，アラシーケーレーのイーシュヴァラ寺院（E）にのみみられ，正方形を22.5度ずつ回転させた幾何学図形に基づいている（H．52）。

ポルティコ，マハーマンダパにニッチが設けられることはなく，天井はナヴァランガと同様，それぞれのアンカナごとに装飾がなされており，天井装飾の対称性はみられない。

第3節　考察

以上みてきたホイサラ寺院の本殿を構成する室について，以下の二点について考察する。

3－1．各室の平面構成の相関

まず平面形態について整理してみよう。ガルバグリハ，シュカナースィはすべて正方形平面である。ナヴァランガ，ポルティコ，マハーマンダパにみられる長方形，十字形平面は，それぞれのアンカナが独立しているものと考えられることから，ナヴァランガ中央部のコアとなる正方形平面の周囲にさらにアンカナを付加していったものと考えることができる。またアラシーケーレーのイーシュヴァラ寺院（E）のマハーマンダパの星形平面も九つのアンカナに相当する大きさの正方形を回転させたものと考えることができる（H．52）。つまり，ホイサラ寺院の各室は正方形をもとに構成されているといえる。

次に各室の大きさを比較してみると，ガルバグリハ，シュカナースィは2メートルから2.5メートル四方の正方形平面で，ポルティコはほとんどがこれと同じ大きさとなる。正方形以外の平面形態がみられるナヴァランガ，マハーマンダパでは，中央部の本柱で囲われたアンカナとガルバグリハの大きさはほぼ等しい。ナヴァランガ，マハーマ

ンダパはこの中央アンカナの周りにアンカナが付加されたものと考えると，ホイサラ寺院本殿の平面は，大きさの等しい正方形が軸線上に配置されて構成されているといえよう。

一方，寺院各室の壁面構成をみると，ガルバグリハ，シュカナースィはすべて壁で囲われ，ポルティコ，マハーマンダパには壁がなくジャガティーで囲われている。ナヴァランガは壁で囲われることが多いが，一部をジャガティーで囲われたものがみられる。ピラスターは，ガルバグリハ，シュカナースィでは四隅の他にニッチの両脇等に装飾的に設けられることがあるが，ナヴァランガ，ポルティコ，マハーマンダパではすべてのピラスターが梁を受ける位置に設けられており，構造体としての一貫性を表現したものといえる。ガルバグリハ，シュカナースィを構成する壁の構造と，ポルティコ，マハーマンダパを構成する柱，梁の構造の双方がナヴァランガにみられ，これら二つの構造がナヴァランガで混淆しているものと考えることができる。

3－2．ナヴァランガの平面構成と寺院本殿の平面類型との相関

次にナヴァランガの平面形態，壁面の構成と寺院本殿の平面類型との相関についてみることにしよう（表Ⅳ－1）。

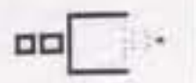
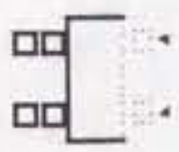
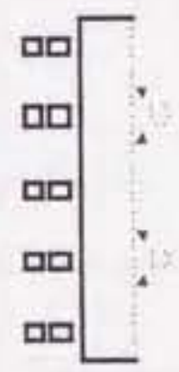
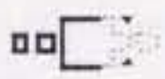
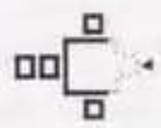
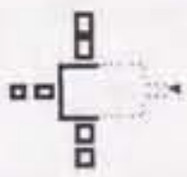
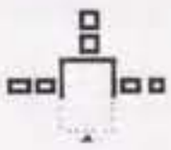
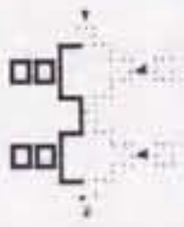
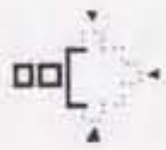
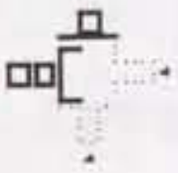
一軸対称平面では正方形または長方形平面で四辺が壁に囲われたナヴァランガが最も多いが，三辺を壁で囲われた正方形平面（アララグッペのチェンナケーシャヴァ寺院，H．16），コの字形に壁に囲われた正方形平面（キッケーリのブラフメーシュヴァラ寺院，H．65）がみられる。ナヴァランガのニッチをみると，シュカナースィの両脇に一つずつ設けられるもの（アララグッペのチェーンナケーシャヴァ寺院／H．16），これに加えてナヴァランガ側壁に設けられるものがみられる（コーラヴァンガラのブーチェーシュヴァラ寺院／H．187）。ナヴァランガ側壁にニッチが設けられる場合には，中央のニッチは他より大きい。これは二軸対称平面でナヴァランガ側壁中央にガルバグリハが配置されたものに準ずるものと考えられる。このようにみるとニッチはガルバグリハまたはそれに準ずるニッチを中央にしてその両脇に設けられたものと考えることができる。本殿平面は，ガルバグリハ側の正面性を重視して構成されていると理解できる。

並置平面をみると，ナヴァランガは長方形平面で四辺が壁に囲われたもの（スィン

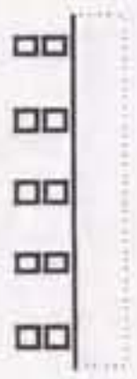
表Ⅳ－1［1］．ナヴァランガの壁面構成と平面形態と寺院本殿の平面類型との相関（四辺壁）

壁面構成	平面形態	寺院本殿平面類型（模式図）												寺院数
		一軸対称			並置		二軸対称			二軸対称（神格非対称）		非対称			
四辺壁	正方形		49	90		－		1	31		6	9	10	31	161	167
			7					1			2		4			
			36					14			1		1			
								9					1			
								1					1			
								3					4			
								1					3			
								1					6			
													1			
	長方形（縦）		4			－		1			－			－		5
	長方形（横）				1			－			－			－		1
	十字形		－			－		－			－			－		－

表Ⅳ－1[2]．ナヴァランガの壁面構成と平面形態と寺院本殿の平面類型との相関（三辺壁，コの字壁）

壁面構成	平面形態	寺院本殿平面類型（構式図）												寺院数
		一軸対称			並置		二軸対称		二軸対称（神格非対称）		非対称			
三辺壁	正方形		1	2		－		－		－			－	2
			1											
	長方形（縦）		－			－		－		－			－	－
	長方形（横）		－			1	3		－		－			－	3
						1								
						1								
	十字形		－			－			－		－		－	－
コの字壁	正方形		1			－		3	4		－		－	5
								1						
	長方形（縦）		－			－		1			1		－	2
	長方形（横）		－			－		－			－		－	－
	十字形		－			1		2		－			1	2	5
													1		

表Ⅳ－1［3］．ナヴァランガの壁面構成と平面形態と寺院本殿の平面類型との相関（一辺壁，四辺壁なし）

壁面構成	平面形態	寺院本殿平面タイプ（模式図）										寺院数	
		一軸対称		並置		二軸対称		二軸対称（神格非対称）		非対称			
一辺壁	正方形		－		－		－		－		－	－	4
	長方形（縦）		－		1	2	－		－		－	2	
	長方形（横）				1								
	十字形		－				2		－		－	2	
四辺壁なし	正方形		－		－		－		1		－	1	1
	長方形（縦）		－		－		－		－		－	－	
	長方形（横）		－		－		－		－		－	－	
	十字形		－		－		－		－		－	－	

ダガッタのサンガメーシュヴァラ寺院，H．231），三辺が壁に囲われたもの（ゴーヴィンダナハッリのバンチャリンゲーシュヴァラ寺院，H．237），一辺が壁に囲われたもの（アラシーケーレーのイーシュヴァラ寺院（D），H．232）がある。ハレービードのホイサレーシュヴァラ寺院では十字形平面のナヴァランガが並置されている（H．235）。ナヴァランガのニッチをみるとシュカナースィの両脇に一軸対称平面と同様に設けられるが，これに加えて九つのアンカナから成る正方形平面の間に挿入された三つのアンカナのガルバグリハと同じ側に位置する（H．237）。ここでもガルバグリハ側の正面性が強調されていることがわかる。

二軸対称平面では，ナヴァランガの平面形態を正方形・長方形平面と十字形平面に

分けて考える。前者は，ナヴァランガの三方にガルバグリハが，一方に入口が位置している。四辺が壁に囲われたものでは，ガルバグリハ，ニッチの配されたナヴァランガのガルバグリハ側の壁がひとまとまりで，これがナヴァランガ中央のアンカナの周りに配置されていると考えられる。コの字形の壁に囲われたものでは，ナヴァランガのニッチはシュカナースィの両脇に設けられるか，これに加えてナヴァランガの左右側壁のガルバグリハ寄りに設けられるかしている（H．160）。本殿全体ではガルバグリハ側の壁面と入口側のジャガティーに分かれていて，三つのガルバグリハとその間をつなぐ壁面がひとまとまりであると考えられる。四辺に壁のないナヴァランガはドーッダガッダヴァッリのラクシュミーデーヴィー寺院以外にはみられない（H．188）。

十字形平面のナヴァランガは，一辺が壁に囲われたもの（H．137），コの字形に壁に囲われたもの（H．133，136）にみられる。前者の正面には，ガルバグリハ，シュカナースィと，ナヴァランガの一辺から成るまとまりが，その他の三辺にはポルティコとナヴァランガの一辺から成るまとまりが配置されているものと考えることができる。後者のうち，タラカードゥのキールティナーラーヤナ寺院は（H．136），ガルバグリハ，シュカナースィ，ナヴァランガの壁面がひとまとまりで，この反対側にジャガティーでつながったポルティコと，ナヴァランガの一部から成るひとまとまりが配され，さらに左右にポルティコが配置されているものと考えられる。他方ハールナハッリのソーメーシュヴァラ寺院は（H．133），ガルバグリハ側には正面性が強調された壁面があり，それと対を成すようにジャガティーが配置されている。ハレービードのホイサレーシュヴァラ寺院は，この平面類型が並置されたものと理解できる（H．235）。

非対称平面をみると，ナヴァランガは四辺を壁で囲われた正方形平面が多いが，この他にコの字形に壁に囲われた長方形平面のマーガラのヴェーヌゴーパーラ寺院（H．178），コの字形の壁に囲われた十字形平面のベールールのカッベーチェンニガラーヤ寺院（H．226），アーネーコーンダのイーシュヴァラ寺院（H．225）がある。マーガラの寺院では，ナヴァランガ中央のアンカナの周囲にガルバグリハ，シュカナースィ，ナヴァランガの一辺から成るひとまとまりが配置されているものと考えられるが，主ガルバグリハは入口の左側に位置する[注49]。ナヴァランガのニッチの位置をみ

ると，この主ガルバグリハにつながるシュカナースィの両脇にニッチが設けられ，入口からみて左右対称になるように，右側にもニッチを設けたものと考えられる。ペールールのカッペーチェーンニガラーヤ寺院は，コの字形の壁に囲われた一軸対称平面と，一辺が壁に囲われた一軸対称平面が十字に複合しており，ナヴァランガのニッチの配置も，それぞれのシュカナースィの両脇にあるものが複合していると考えることができる。ガルバグリハ，シュカナースィ，ナヴァランガのガルバグリハ側の壁がひとまとまりで，それらがナヴァランガ中央のアンカナの周囲に配置されているものと考えることができるのである。

3－3．まとめ

以上の考察をまとめると，ホイサラ寺院本殿の平面はナヴァランガ中央のアンカナと同じ大きさの室をその周囲に配置しているものと考えることができる。それらがガルバグリハ，シュカナースィの場合，ナヴァランガのシュカナースィに接する壁面にニッチが設けられ，ポルティコの場合には，ジャガティーが設けられることがある。ガルバグリハ，シュカナースィ，ナヴァランガのガルバグリハ側の壁面をひとまとまりであると考えると，これは壁面で囲われた閉鎖的なものであるのに対し，ポルティコ，マハーマンダパ，ナヴァランガの入口側のジャガティーから成るひとまとまりは，柱，梁による開放的なものであると考えることができる。ホイサラ寺院本殿では，これら二つのまとまりがナヴァランガ中央のアンカナの周りに配置されることによって，閉鎖的なガルバグリハ側の壁面と開放的な入口側のジャガティーが対になってガルバグリハ側の正面性が強調され，これら二つの構造がナヴァランガで混淆しているものと考えることができるのである。

第Ⅴ章
平面構成からみたホイサラ寺院と後期チャールキヤ寺院との相関

後期チャールキヤ朝はタイラⅡ世が973/4年頃に興し，11世紀後半から12世紀前半のヴィクラマーディティヤⅥ世の時代に最盛期を迎え，北中部カルナータカを中心にアーンドラ地方まで勢力があったが，12世紀末までには，カーカティーヤ朝，ヤーダヴァ朝，ホイサラ朝によって分割された[注1]。

後期チャールキヤ朝の建築様式は今世紀初頭以来，ホイサラ寺院と同類であると考えられており，ブラウンによると，北インドのインド・アーリアン様式と，南インドのドラヴィディアン様式の中間型と位置づけられ，チャールキヤ・ホイサラ様式と呼ばれている[注2]。刻文の研究も進み，王朝の名を冠して建築様式をあらわす傾向にあり，最近の研究では，特にヴィマーナ外壁の壁面装飾の違いに着目して，ホイサラ様式と，後期チャールキヤ様式はそれぞれ独自の様式であると認められるようになってきている。

本章では，Encyclopaedia of Indian Temple Architecture（以下，EITA）に平面図が記載された62基の寺院を対象とし[注3]，これらを後期チャールキヤ寺院と呼び[注4]，この後期チャールキヤ寺院について，ホイサラ寺院と同様に，（1）本殿の平面類型，（2）まつられた神格と位置，（3）本殿を構成する各室の平面形態，ニッチ，壁面の構成の三点を分析し，後期チャールキヤ寺院の平面構成を分析する。その結果と前述してきたホイサラ寺院の平面構成とを比較し，両者の相関を考察するものとする。

第1節　平面類型

後期チャールキヤ寺院は，ガルバグリハ（祠堂），シュカナースィ（前室），ナヴァランガ（拝殿），ポルティコ，マハーマンダパ（前殿）の諸室で構成されている。これをホイサラ寺院と同様にガルバグリハに至る軸線に対する対称性に着目し，一軸対称平面，二軸対称平面，非対称平面，並置平面に分類することができる[注5]（表Ⅴ－1）。ここでは後期チャールキヤ寺院に特異な平面類型，ホイサラ寺院と同様の平面類型に

ついて整理する。

1－1．一軸対称平面

一軸対称平面についてみると，ホイサラ寺院同様，各室が東西軸上に配置される寺院が多数を占めるが，南北軸上に配置される寺院も1基みられる。以下の2基の寺院の平面類型はホイサラ寺院にはみられない。ひとつはシルヴァールのムニーシュヴァラ寺院で，ナヴァランガとシュカナースィの間に廊下があってその両側にも入口が設けられている。もうひとつは，ローンのローカナータ寺院で，一軸線上に配置されたガルバグリハ，シュカナースィ，ナヴァランガの前面にポルティコがなく，ナンディーまたはアーディトゥヤのための小祠堂が位置している[注6]。

1－2．並置平面

ガルバグリハ，シュカナースィ，ナヴァランガが一まとまりとなって，それが並置された寺院は，アイホーレのチャランティ・グディの他にはみられない[注7]。この寺院では，ホイサラ寺院の並置平面のようにナヴァランガが共通のホールを形成するのではなく，それぞれのガルバグリハに対応するナヴァランガの間には壁があって入口に位置するポルティコを共有している[注8]。

1－3．二軸対称平面

二軸対称平面は，以下の四つに分けて考えることができる。すなわち，（1）ナヴァランガの一方にガルバグリハ，三方に本殿入口が位置する場合，（2）ナヴァランガの二方にガルバグリハが位置する場合，（3）ナヴァランガの三方にガルバグリハが位置する場合，（4）ガルバグリハの四方に入口が位置する場合である。（1）ではホイサラ寺院同様の構成を示すものがある一方で，クッパトゥールのカイタベーシュヴァラ寺院は[注9]，ナヴァランガの平面形態が異なるがナヴァランガの三方に入口が位置している（図Ⅴ－1）。（2）の寺院のうち，ラクシュメーシュヴァラのシャンカ・バサディは，ナヴァランガの南，西，北側にガルバグリハが位置し，東側にマハーマンダパが位置しているが[注10]，ナヴァランガとマハーマンダパの間にもう一室が配置されている（図Ⅴ－2）。ホイサラ寺院ではポルティコが配置される位置にナヴァランガ

とほぼ同規模の室が設けられ，マハーマンダパとの間の緩衝空間として機能しているものと考えられる。ラクシュメーシュヴァラのアナンタナータ・バサディでは，マハーマンダパの両側にもガルバグリハが配置され，全体で五つのガルバグリハが配置されている[注11]。56基の二軸対称平面のホイサラ寺院のうち50基がこのようにナヴァランガの三方にガルバグリハを配置するものであったが（第Ⅱ章表Ⅱ－2［2］），後期チャールキヤ寺院では30基中13基で，その割合は少ない。（3）の寺院は，スーディのジョードゥ・カラサダ・グディ[注12]（図Ⅴ－3），フーリのアンダケーシュヴァラ寺院[注13]で，ナヴァランガをはさんで東西にガルバグリハが配置されている。前者では残る南，北側に，後者では南側に入口が配置される。ホイサラ寺院ではコーラヴァンガラのブーチェーシュヴァラ寺院がこれと類似した平面類型を示している（H．187）。（4）の寺院はウンカルのチャンドラマウリーシュヴァラ寺院[注14]（図Ⅴ－4），カールギのダッタートレーヤ寺院で[注15]，本殿平面の中央に位置するガルバグリハの四方に入口が開いている。前者はプラダクシナ（遶道）があってそのまわりに入口が位置しているが，両者は基本的には同じ平面類型であると理解でき，ホイサラ寺院でナヴァランガの周りに室が配置されるものとは異なっている。

1－4．非対称平面

非対称平面では，ナヴァランガの一方にガルバグリハ，シュカナースィ，ガルバグリハに向ってナヴァランガの左右いずれかにポルティコが位置するものがある。ダンバルのドーッダバサッパー寺院（図Ⅴ－5）ではナヴァランガの西側にガルバグリハ，シュカナースィ，東，南側にポルティコが位置している[注16]。さらにナヴァランガの東側にガルバグリハ，シュカナースィが位置する寺院もみられる（図Ⅴ－9，16）。またアマラゴールのバナサンカーリ寺院では（図Ⅴ－6），ナヴァランガの西，北側にガルバグリハ，シュカナースィがあって東，南側に入口があって全体で十字形を呈する。これらの寺院の平面類型はホイサラ寺院でもみられ（第Ⅱ章表Ⅱ－2［3］），その影響関係がうかがえるが，以下の二例はホイサラ寺院にはみられない。

ハルティのウマ・マヘーシュヴァラ寺院では，ガルバグリハ，シュカナースィ，ナヴァランガ，マハーマンダパが東西軸上に位置し，マハーマンダパの東，北側にもガルバグリハ，シュカナースィが位置している[注17]。

アイホーレのチャランティ・マタ近くのジャイナ寺院はナヴァランガの南側にシュカナースィ，ガルバグリハが位置し，西側に別棟でガルバグリハ，シュカナースィが，東側にもポルティコをはさんでもう一つのガルバグリハ，シュカナースィが位置している。ナヴァランガの北側にはさらに別棟でポルティコが位置し，単一の構造ではない[注18]。

1－5．考察

以上の分類を整理すると，一軸対称，二軸対称平面では，遶道が配置される寺院を除き，ほぼ同様の平面類型を示していると考えることができよう。ただし，二軸対称平面で，ホイサラ寺院にナヴァランガの三方にガルバグリハが配置される寺院の割合が高い点はさらに考察する必要がある。ホイサラ寺院では，ガルバグリハの周りに遶道が配置される寺院（H．130-132）は，ジャイナ教寺院，ヴィシュヌ寺院に限られる。ジャイナ教寺院はガンガ朝以来のジャイナ教の中心地，シュラヴァナベーラゴーラに，ヴィシュヌ寺院はタミールナードゥ州との州境に近いマイソール県南部に限られ，ガンガ朝，チョーラ朝寺院の影響を考慮すべきであろう。後期チャールキヤ寺院では，ガルバグリハのまわりに遶道が配置されるものは，ウンカルの一例のみで（図V－4），このようなガルバグリハの四方に入口が位置する平面類型は現在のところこれ以外に例がなく，ホイサラ寺院との相関も考え難い。

並置平面は，後期チャールキヤ寺院では一例のみであるが，ナヴァランガの中央に壁があってそれぞれのナヴァランガは分離されていて[注19]，横長のナヴァランガを共有しているホイサラ寺院とは異なる。

非対称平面では，ガルバグリハの正面とナヴァランガ側壁に入口が設けられる平面類型（非対称－2），が，ホイサラ，後期チャールキヤ寺院双方にみられ，第Ⅱ章でも触れたようにる。入口がナヴァランガ側壁にしか位置しない非対称平面の寺院は，ホイサラ寺院ではナヴァランガ南側に入口が位置しているのに対し（非対称－1），後期チャールキヤ寺院では北側に位置している。ガルバグリハが二つ配置される非対称平面では，入口がひとつで，主ガルバグリハに向って左右いずれかの側壁にもう一つのガルバグリハが設けられるものはホイサラ寺院にしかみられない（H．209-224）。

これらの非対称，並置平面でのホイサラ，後期チャールキヤ寺院の相違については

表Ⅴ－1［1］．宗派別にみた平面類型と建立数（ヒンドゥー教シヴァ派，ヴィシュヌ派）

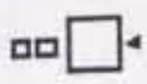
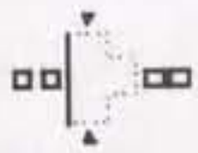
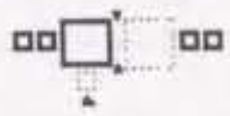
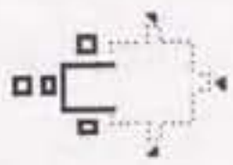
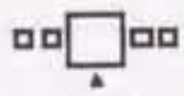
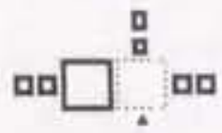
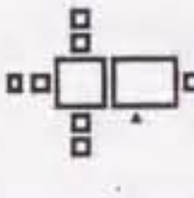
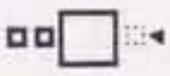
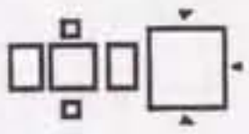
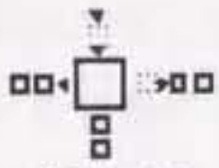
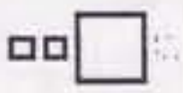
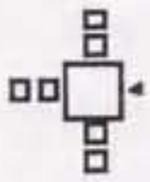
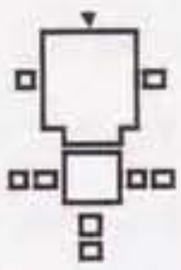
宗教・宗派	平面類型（模式図）														寺院数
	一軸対称			並置		二軸対称					二軸対称（神格非対称）		非対称			
シヴァ派		4	12		－	(クッパトゥール)	1		2	19		－		1	7	36
		5					6		1					4		
	(ローン)	1					3		2					2		
		1					1	(ラクシュメーシュヴァラ)	1							
	(シルヴァール)	1					1	(フーリ)	1							
ヴィシュヌ派		1			－				1			－		1		3

さらに，まつられた神格との相関について考察する。

第２節　宗派・神格別分類と平面類型との相関

まず62基の後期チャールキヤ寺院にまつられた神格を宗教・宗派別にみると，シヴァ神をまつる寺院が38基と最も多く，次いで，シヴァ神，ヴィシュヌ神，スーリヤ神等を重層してまつる重層信仰寺院が11基，ジャイナ教寺院が8基で，ヴィシュヌ神が単

表Ⅴ－1［2］．宗派別にみた平面類型と建立数（重層信仰，その他のヒンドゥー教，ジャイナ教）

宗教・宗派	平面類型（模式図）												寺院数
	一軸対称			並置		二軸対称			二軸対称（神格非対称）		非対称			
重層信仰		1	1		－	 （スーディ）	1	2		3		2	4	11
						 （バッリガンヴェー）	1		 （フーリ）	1	 （ハルティ）	1		
											 （アマラゴール）	1		
その他のヒンドゥー教		1			－		－			1		－		－
ジャイナ教		1	2	（アイホーレ）	1	1		1	3		－	 （アイホーレ）	1	2	8
		1						1					1		
								1							

独でまつられる寺院は3基のみである。またシヴァ，ヴィシュヌ以外に，イェーッランマ，サラスヴァティのいずれも女神をまつる寺院がそれぞれ1基ずつみられる。年代別にみると（表Ⅴ－2），11世紀にそれぞれの宗派で最も多くの寺院が建立されている。まず宗教・宗派別におさえた後，ホイサラ寺院，後期チャールキヤ寺院で平面類型が異なる並置平面，非対称平面について考察する。

表Ⅴ－2．宗派別寺院建立数

宗教・宗派		10世紀	11世紀	12世紀	13世紀	寺院数
ヒンドゥー教寺院	シヴァ寺院	8	23	6	1	38
	ヴィシュヌ寺院	-	3	-	-	3
	重層信仰寺院	-	9	2	-	11
	その他	-	1	1	-	2
ジャイナ教寺院		1	4	3	-	8
寺院数		9	40	12	1	62

2－1．シヴァ寺院（表Ⅴ－1［1］）

一軸対称平面についてみると，ホイサラ寺院と同様に室が配置されるものが多数を占めるが，シルヴァールのムニーシュヴァラ寺院とローンのローカナータ寺院がホイサラ寺院と異なる。シルヴァールの寺院はヴィマーナ脇に入口があるもので，このような構成はこの寺院以外にはみられない[注20]。ローンのローカナータ寺院はキッケーリのブリハデーシュヴァラ寺院と非常によく似た構成を示すが，ローンの寺院では，ナヴァランガとナンディー堂の間にポルティコがなく別構造である点が異なっている。

二軸対称平面では，ガルバグリハの四方に入口が位置するウンカルような平面類型を除き，ホイサラ寺院と同様の平面類型がみられる。ホイサラ寺院で，ナヴァランガの三方にガルバグリハが位置するものが多いのに対し，後期チャールキヤ寺院ではナヴァランガの三方に入口が位置する寺院の方が多い。

非対称平面をみると，ナヴァランガの北側にのみ入口がある寺院と，東，南側に入口がある寺院に分けて考えることができる。北側に入口が位置するアイホーレのヴェニヤヴァール郡第5寺院がナヴァランガの東側にガルバグリハが位置していてこれも他の寺院と異なる。また壁面の様式も後期チャールキヤ朝以前のラーシュトラクータ朝との関連が指摘されるなど[注21]，この寺院については，他の王朝の寺院との関連を考慮に入れる必要があろう。この寺院を除く六基の寺院はナヴァランガの西側にガルバグリハ，東，南側に入口がある点が共通している。これは，西にガルバグリハが位置する一軸対称平面にさらに南側に入口が設けられたものと考えることができる。こ

のような非対称に配置される南側の入口について，シヴァ神が南の方位を統治する神であることとの関連が指摘されている[注22]。一方，ホイサラ寺院では，上述のナヴァランガの西側にガルバグリハが位置し，南，東側に入口が位置する平面類型に加え，南側にのみ入口が位置する寺院がみられる。

ホイサラ寺院でシヴァ寺院に特徴的にみられた並置平面はみられないが，フーリのパンチャリンゲーシュヴァラ寺院では（図Ⅴ－7），主ガルバグリハに三つのシヴァリンガを並置して安置している[注23]。

2－2．ヴィシュヌ寺院（表Ⅴ－1［1］）

ヴィシュヌ神のみがまつられる寺院は，以下の3基である。ハーヴェーリのヴィシュヌ寺院はナヴァランガ北側に入口が位置する一軸対称平面[注24]，フーヴィナハッダガッリのケーシャヴァスヴァミー寺院はナヴァランガの南側にガルバグリハが位置し，西，北，東側にポルティコが位置する二軸対称平面[注25]，ローンのアナンタサーイ・グディ（図Ⅴ－8）はナヴァランガの西側にガルバグリハ，北側に入口が位置する非対称平面である[注26]。

2－3．重層信仰寺院（表Ⅴ－1［2］）

重層信仰寺院にまつられた神格をみると，ホイサラ寺院同様，ナヴァランガ西側のガルバグリハには主神としてシヴァリンガがまつられており，北側にはヴィシュヌ神，東側にはスーリヤ神がまつられる傾向にある。

サヴァディのトリブルシャ寺院は一軸対称平面であるが，ひとつのガルバグリハ内にシヴァ神，ヴィシュヌ神，ブラフマー神のヒンドゥー教の三大神がまつられている[注27]。

二軸対称平面をみると，ホイサラ寺院同様，ナヴァランガの西側にシヴァ神をまつる主ガルバグリハが位置し，南北にそれぞれ，シヴァ神，ヴィシュヌ神をまつるガルバグリハが位置するバッリガンヴェーのケーダレーシュヴァラ寺院がある一方で[注28]，スーディのジョーグ・カラサダ・グディでは，南北に入口のあるナヴァランガの西側にシヴァ神をまつり，東側にはスーリヤ神をまつる[注29]。また，平面の対称性に着目すると左右対称であるが，非対称に神格が配置されている寺院がみられる。ナヴァラ

ンガの西側にシヴァ神，東側にスーリヤ神をまつるガルバグリハが位置し，南側にのみ入口があるもの（フーリのアンダケーシュヴァラ寺院），南側の入口を除いて三方にガルバグリハが位置する平面類型がみられる（ラックンディのクンベーシュヴァラ寺院[注30]）。

非対称平面の寺院には以下の三つの平面類型がみられる。まず，ラックンディのカーシーヴィシュヴェーシュヴァラ寺院のように[注31]，ナヴァランガの南に入口があり，シヴァリンガをまつる主ガルバグリハが西側に，スーリヤ神をまつるもう一つのガルバグリハが東側に位置するものが挙げられる。この平面類型は，シヴァ寺院で，ナヴァランガの西側にガルバグリハが位置し，東，南側に入口が位置している寺院の東側にスーリヤをまつるガルバグリハが配置されたものと考えることができる。カーシーヴィシュヴェーシュヴァラ寺院（図Ⅴ－9）では，スーリヤ神をまつるガルバグリハとナヴァランガの間にマハーマンダパに位置している。ナヴァランガの南側の入口は建立者であるチャールキヤ王のための特別の入口であると考えられている[注32]。この平面類型はホイサラ寺院ではみられない。

次に，ハルティのウマ・マヘーシュヴァラ寺院ではマハーマンダパの周りに室が配置され，西，北側にシヴァ神，東側にスーリヤ神が位置し，マハーマンダパの南側に入口が設けられている。ホイサラ寺院で，このように室を配置するものはないが，入口とガルバグリハの位置に着目すると，非対称－4（H．218-223）と同様であるとみなすことができる。最後に，アマラゴールのバナサンカーリ寺院では，ナヴァランガの西，北側にシヴァ神，ヴィシュヌ神をまつるガルバグリハがあってそれに正対する位置に入口が設けられ，ナヴァランガ中央でそれぞれのガルバグリハに至る軸線が交差している（図Ⅴ－6）。

一方，ホイサラ寺院では，上述の平面類型に加え，ナヴァランガの一方に入口があって，入口の正面と，左右いずれかにガルバグリハが配置されるもの（H．209-224）がみられる。

2－4．ヒンドゥー教の他の神をまつる寺院（表Ⅴ－1［2］）

バーダーミのイェーッランマ寺院は，ガルバグリハがナヴァランガの西側に配置される一軸対称平面，ガダッグのサラスヴァティ寺院はトリクテーシュヴァラ寺院の南

に位置し，ガルバグリハがナヴァランガの南側に配置され，ナヴァランガの西，北，南側に入口が配置される二軸対称平面である。

2－5．ジャイナ教寺院（表V－1［2］）

一軸対称平面ではホイサラ寺院と同様，ナヴァランガの西側にガルバグリハが位置するものがみられる。二軸対称平面では，ナヴァランガの一方に入口があって残る三方に三神をまつるもの，これに加えマハーマンダパの左右にもそれぞれひとつずつの神格をまつるものがみられる。これらのジャイナ教寺院は，ホイサラ寺院同様，左右対称に神格が配置されるものと理解できよう。

一方，アイホーレのチャランティ・グディは，一軸対称平面が並置されたものと考えられるが，ホイサラ寺院とは構成が異なる（本章1－2参照）。アイホーレのヴィルーパークシャ寺院近くのジャイナ寺院で，もともとナヴァランガとその西側，北側のガルバグリハで構成されていたものに，南側のガルバグリハ，東側のガルバグリハとその間のマハーマンダパが増築され，現在非対称となっている[注33]。

2－6．考察

以上，宗教，宗派別に概観したが，ヒンドゥー教のシヴァ派，重層信仰寺院以外については事例が少なく，同様に論じるわけにはいかない。ジャイナ教寺院については上述のように，並置平面などいくつかの例外をのぞきホイサラ寺院とほぼ同様の平面類型に分類できる。ここでホイサラ寺院との相関について問題となるのがシヴァ寺院と重層信仰寺院である。一軸，二軸対称平面はホイサラ寺院とほぼ同様とみなすことができるが，並置，非対称平面については考察する必要がある。

まず並置平面について，ホイサラ，後期チャールキヤ寺院で異なる宗派にみられる点について若干の考察を加える。前者では，ナヴァランガを共有して並置されたものがシヴァ寺院にのみみられ（H．231-238），別棟で近接して建立されたものが，それぞれシヴァ神，ヴィシュヌ神をまつる重層信仰寺院であったのに対し（H．227-230），後期チャールキヤ寺院ではナヴァランガが壁で仕切られているものがジャイナ教寺院にみられる。建立年代をみると，ホイサラ寺院の並置平面の場合，建立年代の判明している最初の遺構，ハレービードのホイサレーシュヴァラ寺院は1120年前

後に建立されているが，後期チャールキヤ寺院の並置平面，アイホーレのチャランティ・グディは1119年に建立されている。ほぼ同年に建立されたこれら二つの寺院の影響関係は判明しておらず，同様の平面類型の寺院が周辺の王朝によって建立された寺院に見られることからこれらをさらに考察する必要があろう[注54]。

次に非対称平面についてガルバグリハの数にしたがってみることにする。ガルバグリハが一つの場合，後期チャールキヤ寺院では，南，東側に入口が設けられ，西側にガルバグリハが位置している平面類型がシヴァ寺院に特徴的に見られる。ホイサラ寺院では，南側にのみ入口が配置されるものが非対称平面の半数を越え，その他は後期チャールキヤ寺院のように二方向に入口が配置されている（第Ⅲ章表Ⅲ－3）。

ガルバグリハが二つの場合，後期チャールキヤ寺院では重層信仰寺院に限られる。ナヴァランガの一方二種ガルバグリハが位置し，その反対側にもう一つのガルバグリハが配置されるものは，西側にシヴァ神，東側にスーリヤ神がまつられる。このような寺院は11世紀に3基の寺院が建立されているが，ホイサラ寺院では，1173年に建立されたコーラヴァンガラのブーチェーシュヴァラ寺院（H．193）にしか見られない。また，アマラゴールのバナサンカーリ寺院では（図Ⅴ－6），二つのガルバグリハに至る軸線が交差するように室が配置され，シヴァ神を西側に，ヴィシュヌ神を北側にまつる。このような平面類型は，ホイサラ寺院ではベールールのカッペーチェーンニガラーヤ寺院をはじめ数例がみられた。建立年代をみると，アマラゴールでは1119年でベールールの1117年よりも遅い。このような軸線が交差する平面類型には，ホイサラ寺院の影響を考慮に入れる必要があろう。一方ホイサラ寺院では，一方に入口が位置し，残る二方にガルバグリハが位置している非対称平面がみられる。これらは，シヴァ，ヴィシュヌをまつる寺院か，ヴィシュヌ神のみをまつる寺院に見られ，ともに12世紀以降の建立である。後期チャールキヤ寺院ではヴィシュヌ神をまつる寺院がほとんどなく，シヴァ神，ヴィシュヌ神をまつる寺院にもホイサラ寺院の影響が考えられることから，第Ⅰ章で触れたように，12世紀以降盛んになったヴィシュヌ信仰にともない現出するようになった平面類型と位置付けることができよう。しかし，ホイサラ寺院では，このような平面類型のヴィシュヌ寺院は少数で，本章1－3で指摘したように，ナヴァランガの三方にガルバグリハが位置する二軸対称平面がほとんどである。これはシヴァ・リンガで表現されることが多いシヴァ神とは異なり，ヴィシュヌ

神はアヴァターラ等の様々な図像的表現が可能で，その幾つかをひとつの寺院にまとめてまつることの合理性を考えることにより理解できる。

ガルバグリハが三つの場合は重層信仰寺院に限られる。シヴァ神，ヴィシュヌ神，スーリヤ神の三神をまつる寺院は，後期チャールキヤ，ホイサラ寺院とも，ナヴァランガの南側に入口が配置され，西側にシヴァ神をまつる主ガルバグリハが位置している。このような寺院の建立年代をみると，後期チャールキヤ寺院では11世紀に，ホイサラ寺院では11世紀から13世紀にかけて建立されており，11世紀にはこのような平面類型が確立していたものと考えられる。

さて第Ⅲ章では，入口と主神をまつるガルバグリハの位置に着目して，12世紀以降に建立されるようになった，南側に入口が位置し，西側にガルバグリハが位置する非対称平面のシヴァ寺院には，シヴァ，ヴィシュヌ，スーリヤの三神をまつる重層信仰寺院の影響がうかがえる点を指摘した。後期チャールキヤ寺院をみると，西側にガルバグリハが位置し，東，南側に入口が位置するシヴァ寺院が，11世紀以降建立されていることから，これとの相関を考慮に入れる必要がある。つまり，東側の入口がなくなり，南側のみになったとも考えることができるのである。

第3節　各室の平面構成と平面類型との相関

次に寺院本殿を構成する各室の平面形態，壁面の構成，ニッチの配置についてみた後，平面類型との相関について考察する。

3－1．ナヴァランガ

ナヴァランガの平面形態をみると，正方形平面が最も多いが，長方形平面，十字形平面もみられる。正方形平面のナヴァランガは，中央に四本の柱があって全体が九つに分割されているものがある一方で，ベーヴールのラーメーシュヴァラ寺院のように[注35]（図Ⅴ－10），さらにそれを囲うように16本の柱があって全体で25に分割されるものがみられる。

長方形平面のナヴァランガはフーリのパンチャリンゲーシュヴァラ寺院（図Ⅴ－7）と，ローンのアナンタサーイ・グディ（図Ⅴ－8）にみられる。フーリの寺院の場合，

九分割された正方形の左右にアンカナ三つ分が付加されていて，全体で長方形となっている。これは長方形の主ガルバグリハに三つのリンガをまつり，ナヴァランガの左右にさらにガルバグリハが位置する神格の配置によるものと考えられる。ローンでは長方形平面のガルバグリハとナヴァランガ中央のアンカナ，ナヴァランガがほぼ相似形を示している。

十字形平面は，アイホーレのヴィルーパークシャ寺院のように（図Ⅴ－11），九つに分割されたナヴァランガにポルティコが付加したものと考えることができるが，スーディのジョーグ・カラサダ・グディはナヴァランガ中央のアンカナが柱ごと東，南，北側に付加したものと考えることができ（図Ⅴ－3），他の寺院とは異なる。またアイホーレのヴィルーパークシャ寺院と比べて，フーリのマダネーシュヴァラ寺院は[注56]，ジャガティーが十字形のナヴァランガの外形よりもひとまわり外側に位置しているなど（図Ⅴ－11），ホイサラ寺院で，ナヴァランガ中央のアンカナを中心として正方形をもとに平面形態が展開しているのとは異なっている。

また，ナヴァランガと十字形のマハーマンダパとが複合したものがみられる。クッバトゥールのカイタベーシュヴァラ寺院は九つのアンカナからなる正方形平面のナヴァランガと25のアンカナからなるマハーマンダパが複合しているものと考えることができる（図Ⅴ－1）。バッリガンヴェーのケーダレーシュヴァラ寺院も同様にナヴァランガとマハーマンダパが複合しているものと考えられるが，ナヴァランガに相当する部分の平面形態が長方形である（図Ⅴ－13）。

次に，ナヴァランガが壁にどの程度囲われているかをみると，四辺が壁で囲われるもの，本殿入口側の一辺がジャガティーでその他は壁に囲われるもの，本殿入口側の一辺と左右の側壁の中程までがジャガティーで囲われ，その他がコの字形に壁面で囲われるもの，本殿入口反対側の一辺が壁面でその他ジャガティーで囲われるもの，シュカナースィへの入口を除いて壁のないものがある。壁面の構成と平面類型の関係をみると（表Ⅴ－3），四辺を壁で囲われた正方形平面が最も多く，各平面類型にみられるが，三辺または一辺が壁に囲われたものは，一軸対称平面と二軸対称平面にみられる。コの字に壁に囲われたものは，二軸対称平面と非対称平面に，壁で囲われないものが二軸対称平面にみられる。並置平面を除くと，壁面の構成と平面類型の関係はホイサラ寺院とほぼ同様で，ガルバグリハの正面性を強調するように壁面が構成されて

表Ⅴ−3［1］．ナヴァランガの壁面構成と寺院本殿の平面類型との相関（四辺壁）

ナヴァランガ		寺院本殿の平面類型（模式図）												計
壁面	平面形態	一軸対称			並置		二軸対称			二軸対称（神格非対称）		非対称		
四辺壁	正方形		5	14		1		3	12		2	3	1	12
			6					3			1		4	
			1					1					2	
			1					1					2	
			1					2					1	
								1					1	
								1					1	
	長方形		−		−			1			−		1	
	十字形		−		−			−			−		−	44

いるものとみなすことができよう。

ニッチの配置をみると，シュカナースィ脇に左右対称に配置されるものと，これに加えて，ナヴァランガ側壁のガルバグリハ寄りにも一つずつ計四つ設けられているものが多くみられるが，ラクシュメーシュヴァラのラクシュミーリンゲーシュヴァラ寺院では（図Ⅴ−14），三つのシュカナースィの脇に二つずつ，計六つ，イッタギーのマハーデーヴァ寺院ではシュカナースィと三つのポルティコの両脇に二つずつ，計八つ設けられている（図Ⅴ−15）。これらは主ガルバグリハに対して左右対称に，ガルバグリハのある側に設けられており，ホイサラ寺院同様，主ガルバグリハの正面性を強調するようにニッチが配置されているものと理解できる[注37]。

一方，ナヴァランガ側壁にニッチがひとつ非対称に配置されているものがみられる

表Ⅴ−3［2］．ナヴァランガの壁面構成と寺院本殿の平面類型との相関（三辺壁，コの字壁，一辺壁，四辺壁なし）

ナヴァランガ		寺院本殿の平面類型（模式図）										計
壁面	平面形態	一軸対称		並置		二軸対称		二軸（神格非対称）		非対称		
三辺壁	正方形		1		−		1		−		−	
	長方形		−		−		−		−		−	
	十字形		−		−		−		−		−	
	複合		−		−		1		−		−	3
コの字壁	正方形		−		−		1		−		−	
	長方形		−		−		−		−		−	
	十字形		−		−		4		−		1	
	複合		−		−		1		−		−	7
一辺壁	正方形		1		−		2		−		−	
	長方形		−		−		−		−		−	
	十字形		−		−		1		−		−	
	複合		−		−		−		−		−	4
四辺壁なし	正方形		−		−		−		1		−	
	長方形		−		−		−		−		−	
	十字形		−		−		−		−		−	
	複合		−		−		−		−		−	1

が，このようなニッチがある寺院は，ガルバグリハ，シュカナースィ，ナヴァランガ，ボルティコが東西軸上にこの順にあって，さらにナヴァランガの南側にボルティコが配置され，ニッチは入口正面に設けられている。

3−2．ガルバグリハ，シュカナースィ

後期チャールキヤ寺院のガルバグリハの平面形態には，ホイサラ寺院のような正方形に加え長方形平面のものがみられる。正方形平面については，四辺を壁で囲われたひとつのアンカナからなる閉鎖空間で，ホイサラ寺院と同様であるとみなすことができよう。長方形平面は，ひとつのアンカナのものと，複数のアンカナに分割されているものがあるが，複数に分割されているものの方が規模が大きい。前者は，ローンのアナンタサーイ・グディ（図Ⅴ－8）のように奥行が短い長方形である。後者は，ラクシュメーシュヴァラのシャンカ・バサディ（図Ⅴ－2）のナヴァランガ西側のガルバグリハのように，ナヴァランガとほぼ同じ幅の変則的な六つのアンカナからなる長方形となる。主神を安置する奥のガルバグリハは正方形の三つのアンカナが横に並んでいるが，手前にそのほぼ半分の奥行で三つのアンカナがある 。このような複数のアンカナに分割されているガルバグリハには，フーリのパンチャリンゲーシュヴァラ寺院（図Ⅴ－7）のように三つのリンガがまつられるなど，複数の神格が安置されることがある。長方形平面のガルバグリハがある後期チャールキヤ寺院の建立年代についてみると，11世紀から12世紀にかけて11世紀後半に最も多く建立されている。ホイサラ寺院ではシュラヴァナベーラゴーラのバンダリ寺院（H．63）の一例を除き[注38]，ガルバグリハはひとつのアンカナからなるほぼ正方形平面である。

複数の神格がひとつのガルバグリハに安置される寺院をみると，サヴァディのトリブルシャ寺院ではガルバグリハが長方形であるが，ガダッグのトリクテーシュヴァラ寺院ではほぼ正方形である。複数の神格を並置してまつる寺院はホイサラ寺院にもみられるが，ひとつのガルバグリハに複数の神格を安置するのではなく，神格それぞれにガルバグリハを当て，そのガルバグリハを並置している。

表Ⅴ－4．ガルバグリハとシュカナースィの平面形態の相関

ガルバグリハ＼シュカナースィ	正方形	長方形（縦）	長方形（横）	なし	正方形，長方形（横）	計
正方形	24	6	18	3	1	52
長方形（横）	1	1	4	3	－	9
正方形，長方形（横）	－	－	1	－	－	1
計	25	7	23	6	1	62

注）正方形，長方形は，両者の平面形態が混在するアイホーレのヴィールバークシャ寺院近くのジャイナ寺院を指す。

ガルバグリハとシュカナースィの平面形態の相関をみると（表Ⅴ－4），長方形のガルバグリハに対して長方形のシュカナースィが設けられる傾向にあるが，ナヴァランガの平面形態の相関はみられない。ガルバグリハ，シュカナースィの壁面についてみると，ホイサラ寺院同様，四辺が壁に囲われているが，シュカナースィの側壁に小窓が設けられる寺院が数例みられる[注39]。

ニッチは，ガルバグリハ奥壁にひとつ，左右壁にひとつづつ計二つ，そして左右奥壁に計三つ設けられる場合があるが，ガルバグリハの平面形態，寺院本殿の平面類型，まつられた神格との相関は認められない。

3－3．ポルティコ，マハーマンダパ

ポルティコは，平面形態には正方形または長方形がみられるが，壁面で囲われることはない。ポルティコの平面形態と寺院の平面類型，まつられた神格との相関は認められない。

マハーマンダパの平面形態をみると，ホイサラ寺院同様に正方形と十字形を呈するものがみられる。正方形平面では，ラックンディのナンネーシュヴァラ寺院[注40]のように（図Ⅴ－16），マハーマンダパ中央に四本の柱があって九つに分割されているものがあるが，一方で，ラクシュメーシュヴァラのアナンタナータ寺院のようにガルバグリハに至る軸線に沿って長方形の身廊を構成しているものもある。十字形平面をみると，イッタギーのマハーデーヴァ寺院[注41]のようにマハーマンダパ中央部の正方形の各辺にそれぞれ矩形のアンカナが付加しているものと（図Ⅴ－15），ラクシュメーシュヴァラのラクシュミーリンゲーシュヴァラ寺院（図Ⅴ－14），バンカプールのアルヴァットゥカンバラ寺院のように（図Ⅴ－17），十字形平面が身廊，側廊に分割されているものがみられる。ラクシュメーシュヴァラのラクシュミーリンゲーシュヴァラ寺院では，同地のシャンカ・バサディーのように中央部の五つのアンカナが東西軸に沿って一段高くなっているが，バンカプールのアルヴァットゥカンバラ寺院では東西軸に沿ってに七本の側廊があるように分割されている。また前述のようにクッパトゥール，バッリガンヴェーでは，ホイサラ寺院には例のないナヴァランガとマハーマンダパが複合したものもみられる（図Ⅴ－1，13）。

マハーマンダパの壁面構成をみると，ホイサラ寺院のように壁で囲われないものが

あるが，四辺を壁に囲われたものがみられる。四辺を壁で囲われたものは正方形，十字形平面にみられ，マハーマンダパ内部も正方形に分割されたものと身廊，側廊に分割されたものがみられ，壁面構成と平面形態の相関はみられない。

ホイサラ寺院では，ポルティコ，マハーマンダパには壁で囲われたものはみられず，マハーマンダパの平面形態は正方形と十字形がみられるが複合されたものはみられない。十字形のマハーマンダパが身廊側廊に分割されたものがハリハラのハリハレーシュヴァラ寺院にのみみられるが（H．139），その他は正方形に分割されている。

3－4．考察

以上，後期チャールキヤ寺院の各室の平面形態についてホイサラ寺院との相関についてみてきたが，主な相違点は以下の三点にまとめることができる。

まず，各室の平面形態，室相互の相関についてであるが，ホイサラ寺院では，第Ⅳ章で考察したようにほぼ大きさの等しい正方形平面，ガルバグリハ，シュカナースィ，ナヴァランガ中央のアンカナが規範となって寺院平面が構成されているものと理解できる。十字形，長方形平面についても，中央のアンカナとほぼ同じ大きさの正方形，またはその組合わせをそのまわりに付加することによって全体形が構成されているものと考えることができるのである。一方，後期チャールキヤ寺院ではガルバグリハ，シュカナースィに長方形平面のものが比較的多くみられるが，各室の平面形態の相関はほとんど認められない。マハーマンダパに主ガルバグリハに至る軸線に沿って身廊，側廊に分割されているものがみられるなど，ホイサラ寺院に見られる正方形平面のアンカナような規範となるものが見いだせないのである。また後期チャールキヤ寺院にはナヴァランガとマハーマンダパが融合したものがみられるが，ホイサラ寺院ではナヴァランガとマハーマンダパはそれぞれ独立していて，ひとつの機能にひとつの室を当てている。

次に，各室の壁面構成についてみると，後期チャールキヤ寺院ではガルバグリハ，シュカナースィ，ナヴァランガの壁面は，ガルバグリハの正面性を強調するようにナヴァランガの壁面が構成されているものと考えられ，ホイサラ寺院とほぼ同様に構成されているとみなすことができる。しかし，マハーマンダパには壁面で囲われたものがあって，このような寺院では全体が壁で囲われている。第Ⅳ章で指摘したように，

ホイサラ寺院がガルバグリハ，シュカナースィに見られる壁の構造と，ポルティコ，マハーマンダパに見られる柱，梁の構造が，ナヴァランガで混淆しているものと考えることができるのとは異なっている。ホイサラ寺院では，ナヴァランガで構造が混淆している様相が鮮明に表現されるようになったものと捉えることができる。

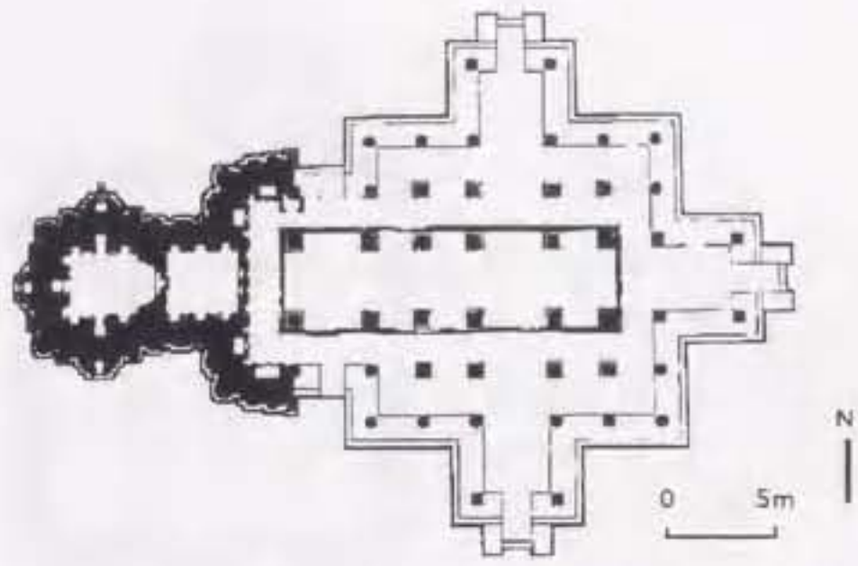
最後に，ガルバグリハにまつられる神格の数の相違が挙げられる。後期チャールキヤ寺院で複数の神格をひとつのガルバグリハに安置する寺院がみられるのに対し，ホイサラ寺院では，ひとつのガルバグリハにひとつの神格を安置し，複数のガルバグリハを設けているのである。

3－5．まとめ

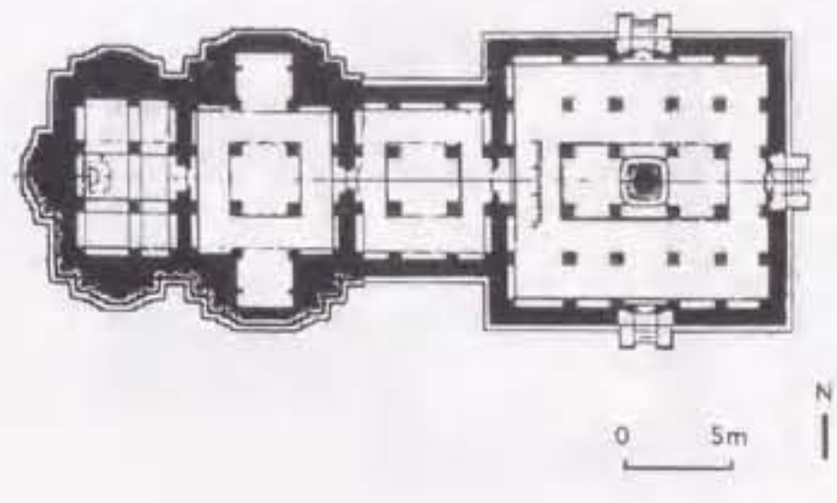
ホイサラ寺院と後期チャールキヤ寺院は類似したヴィマーナ外壁の分割が指摘されてきた。平面構成の分析を通してみると，双方の平面類型はほぼ同様の構成であると考えることができ，相互に影響関係が認められる。またナヴァランガの壁面はホイサラ寺院と同様に，ガルバグリハを強調するように配置されている様子がうかがえる。これらはホイサラ寺院と後期チャールキヤ寺院にのみ共通する特徴であるのか，他の王朝によって建立された寺院についてさらに検討が必要である。

一方，平面形態についてみると，ホイサラ寺院では正方形を規範としてひとつの機能にひとつの室を当てるなど，画一化した平面構成になっており，後期チャールキヤ寺院との比較を通してみたホイサラ寺院の平面構成の特徴であろう。

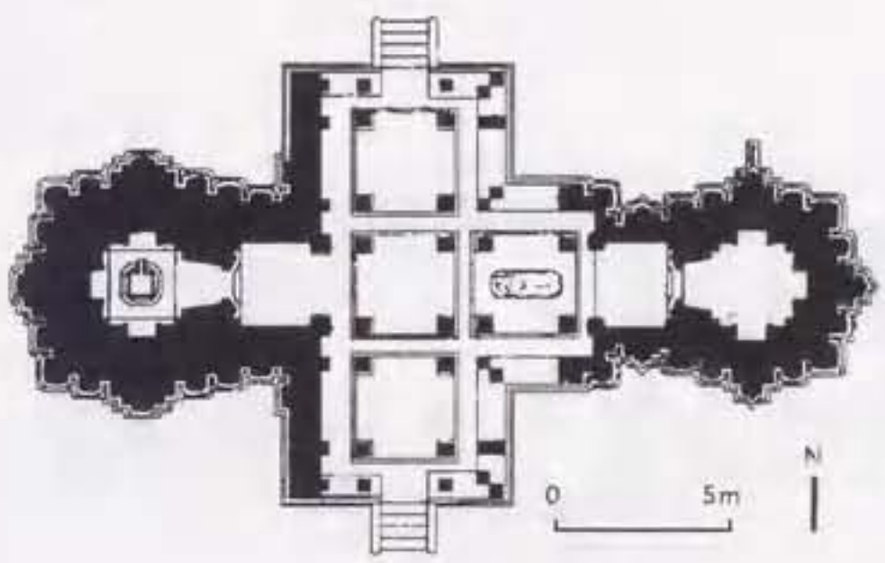
本章2－6で，ホイサラ寺院に特徴的にみられた南側に入口が位置し，西側にガルバグリハが位置する非対称平面のシヴァ寺院には重層信仰寺院の影響が認められる一方で，後期チャールキヤ寺院に特徴的にみられた入口が東，南側に位置するシヴァ寺院との関連も考慮に入れる必要があることを指摘した。第1章でふれたシヴァ派，ヴィシュヌ派の関係からみると，前者はシヴァ派，ヴィシュヌ派の共存というよりも，それに反したセクト主義に基づくものであると考えることができる。このようにみると，後者もシヴァ寺院からシヴァ寺院への影響関係である点に注目すると，シヴァ派，ヴィシュヌ派の共栄を図ったものではなく，ヴィシュヌ寺院の影響を受けずにセクト主義に基づいているものと捉えることもできよう。



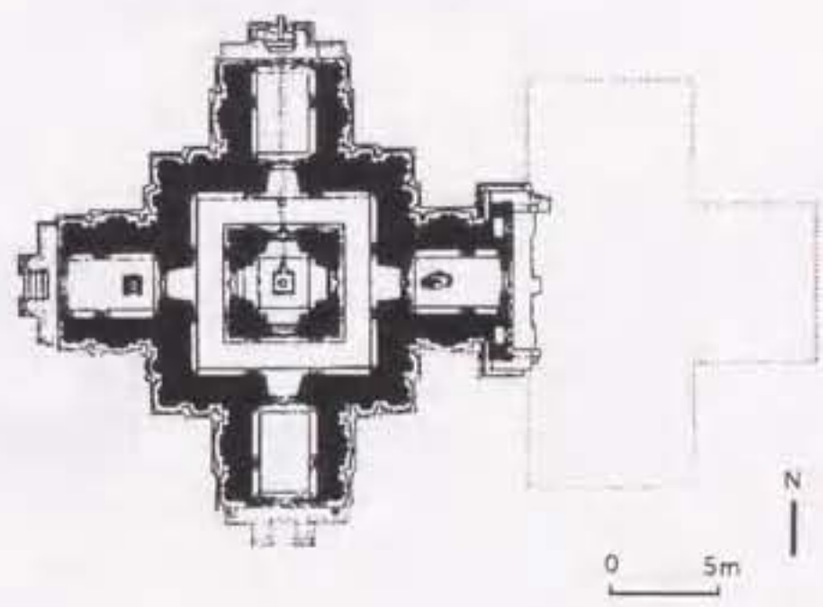
図V−1. クッバトゥールのカイタベーシュヴァラ寺院，平面図。（EITA p.162-164, fig.103をもとに筆者作成，以下同様）



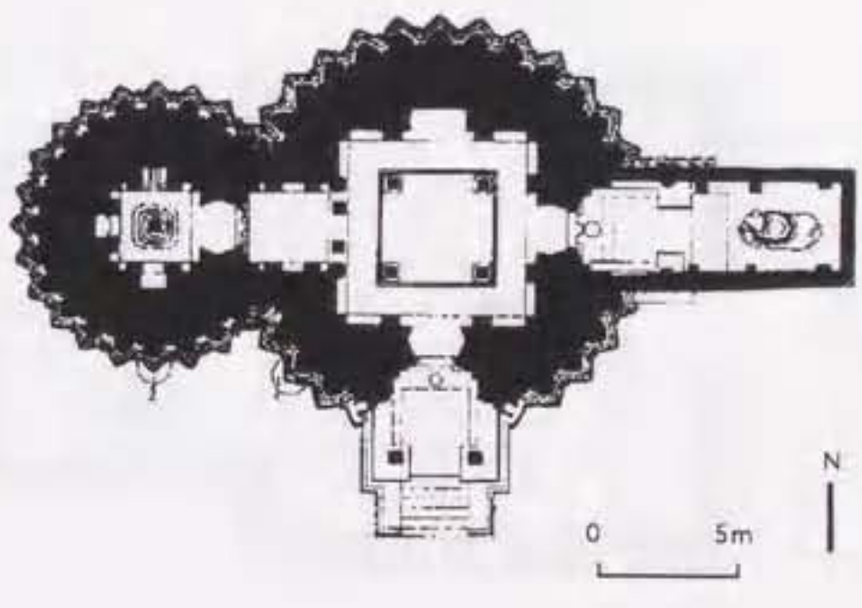
図V−2. ラクシュメーシュヴァラのシャンカ・バサディ，平面図。EITA pp.175-177, fig.113.



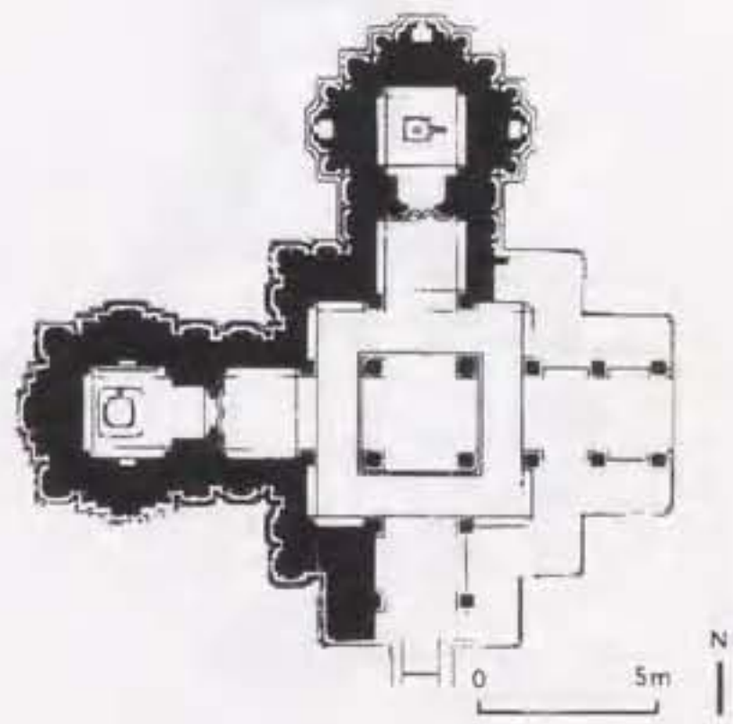
図V−3. スーディのジョーグカラサ・グディ，平面図。EITA pp.50-53. fig. 37.



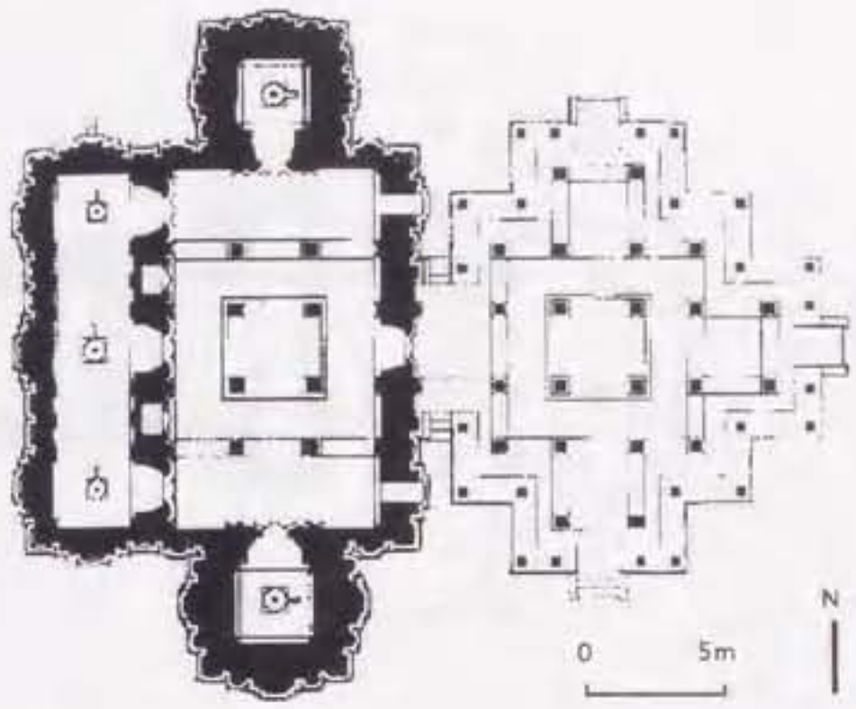
図V−4. ウンカルのチャンドラムーレーシュヴァラ寺院，平面図。Cousens, pl. CXXV.



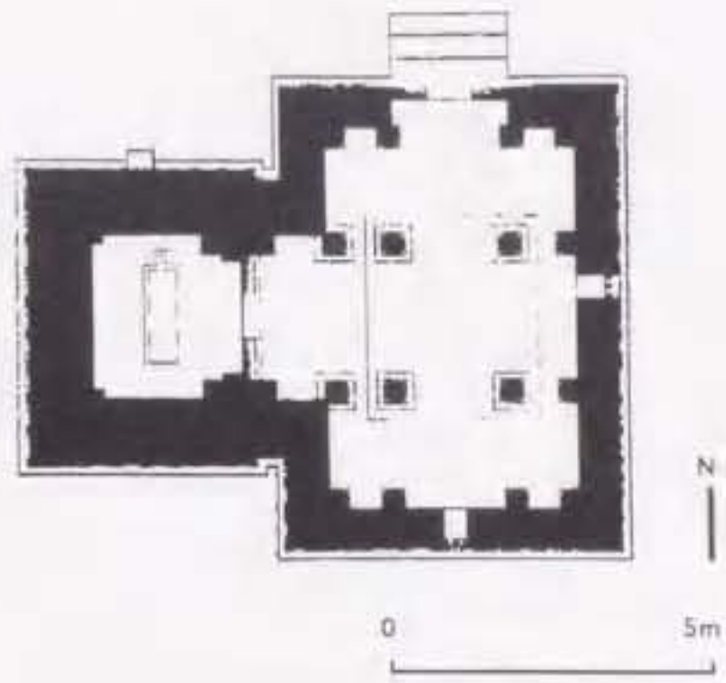
図V−5. ダンバルのドーッダバサッパー寺院，平面図。EITA pp. 191-195, fig. 125.



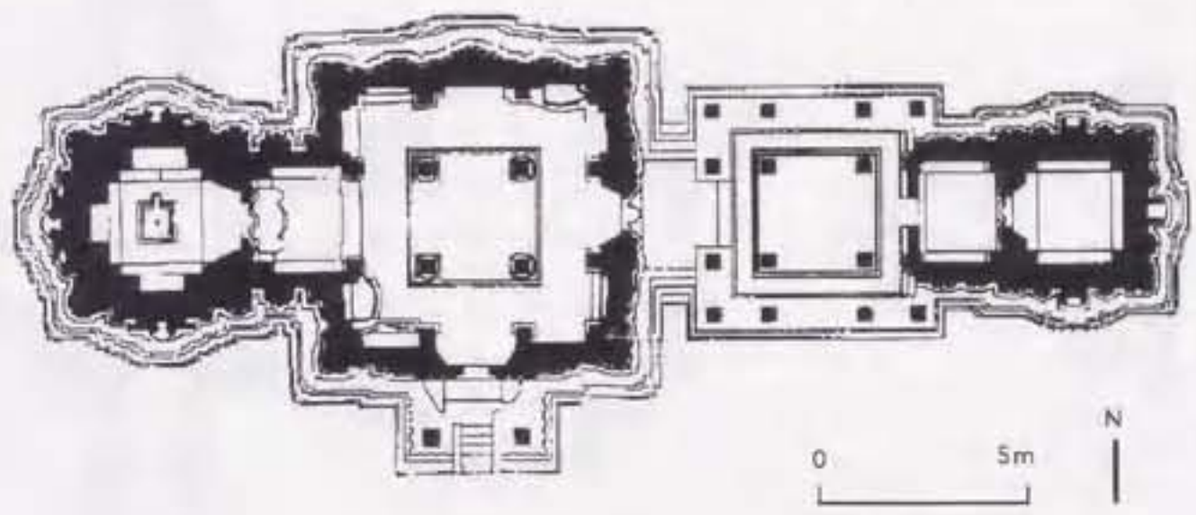
図V−6. アマラゴールのバナサンカーリ寺院，平面図。EITA p.211-212. Fig.137.



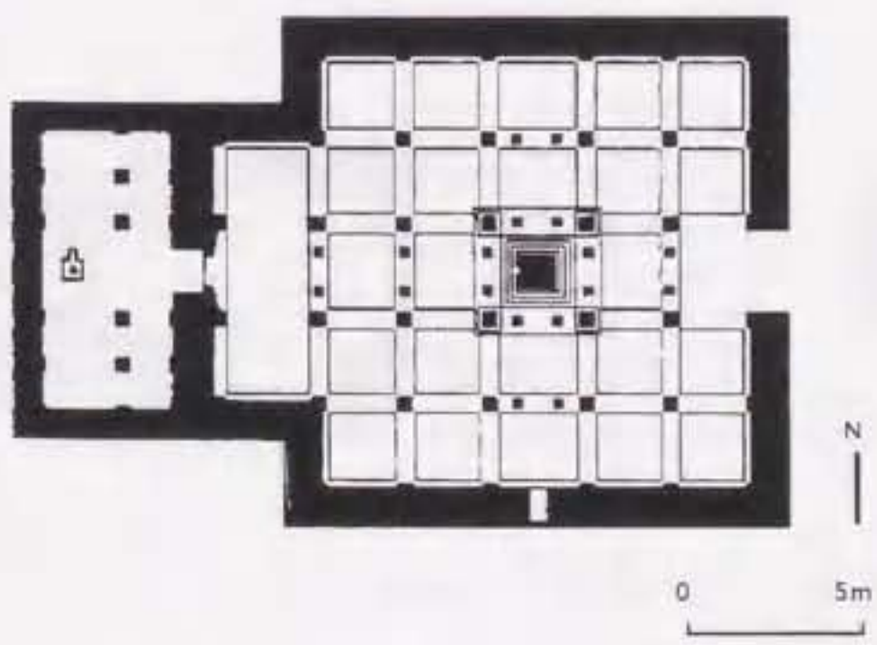
図V－7．フーリのパンチャリンゲーシュヴァラ寺院，平面図。
EITA p.209-211. Fig.135.



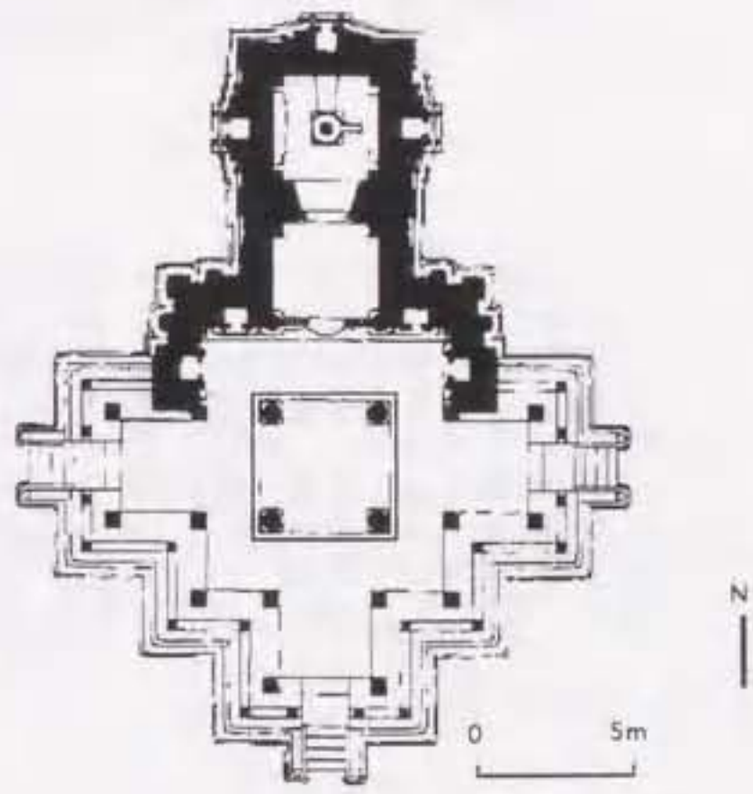
図V－8．アイホーレのアナンテサーイ・グディ，
平面図。EITA pp.36-37, fig. 24.



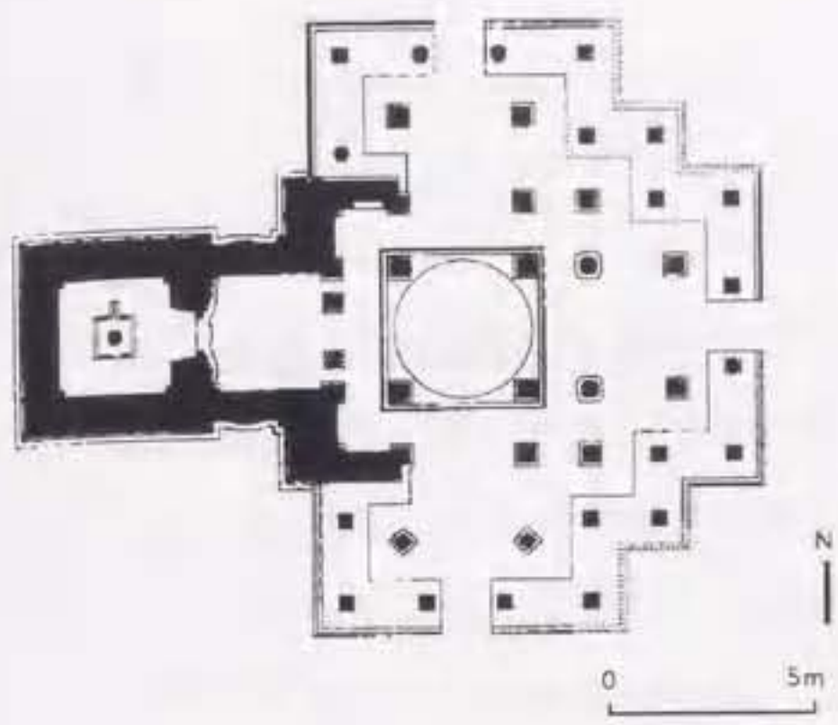
図V－9．ラックンディのカーシヴィシュヴェーシュヴァラ寺院，平面図。
EITA pp. 95-100, fig. 66.



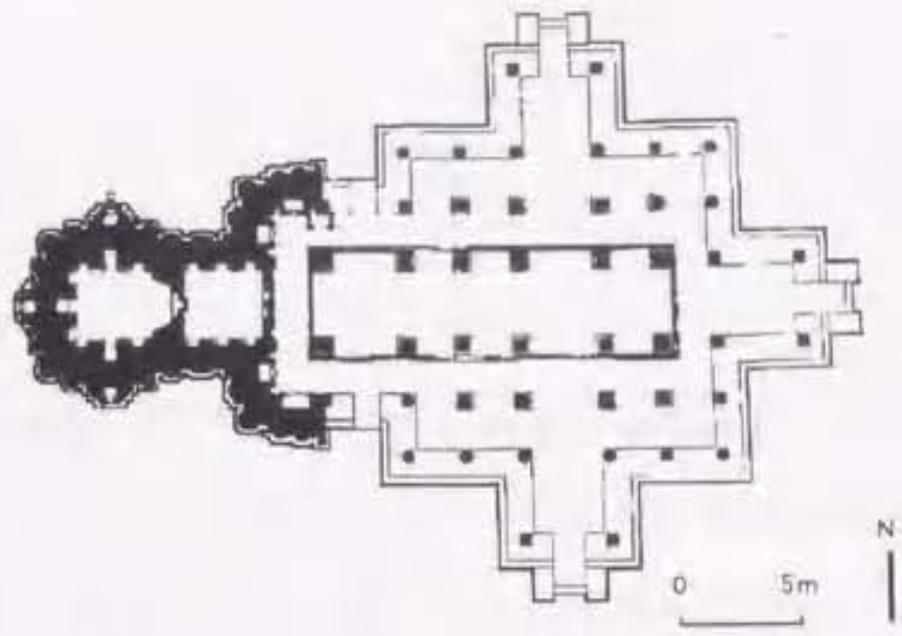
図V－10．ベーヴールのラーメーシュヴァラ寺院，平面図。
EITA pp.65-66, fig. 47.



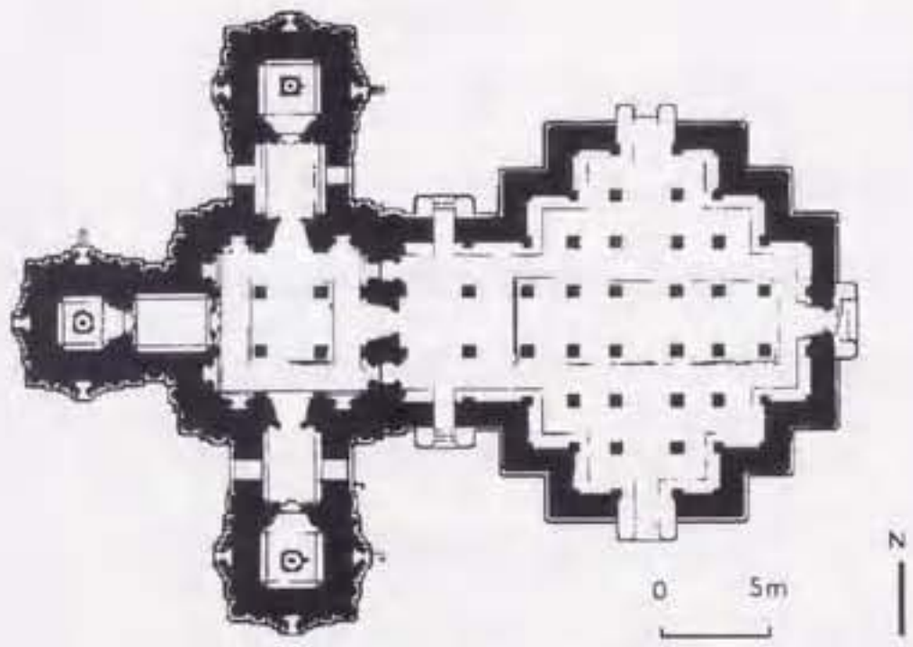
図V－11．アイホーレのヴィルーパーシャ寺院，平面図。
EITA pp. 58-60, fig.42.



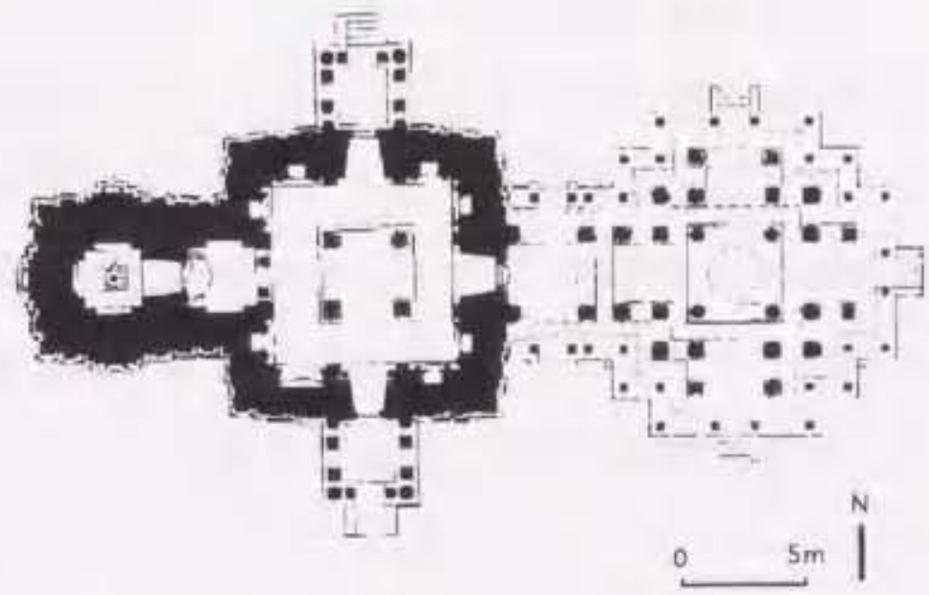
図V－12．フーリのマダネーシュヴァラ寺院，平面図。
EITA p.191.fig.123



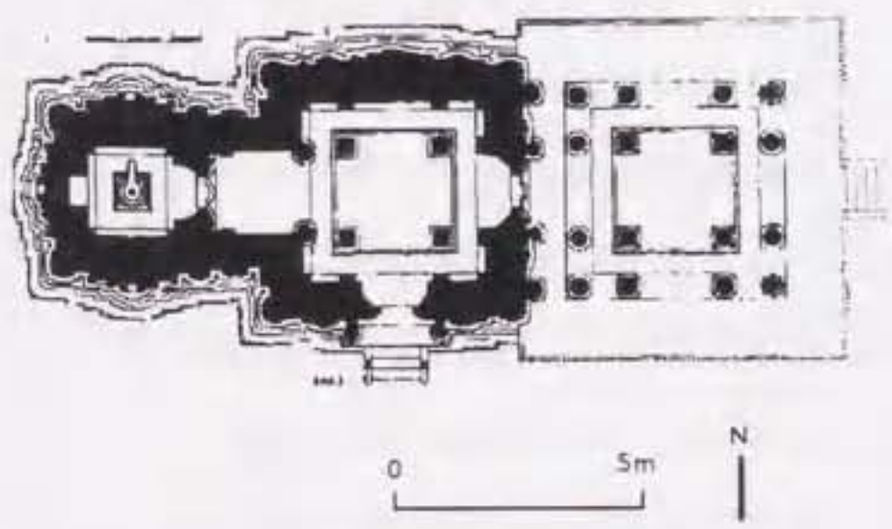
図V－13．クッパトゥールのカイタベーシュヴァラ寺院，平面図。EITA p.162-164, fig.103.



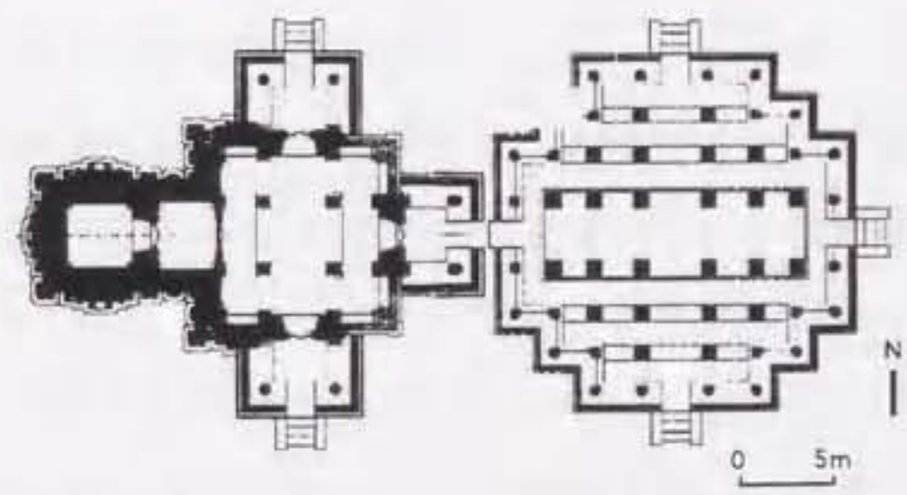
図V－14．ラクシュメーシュヴァラのラクシュミーリンゲーシュヴァラ寺院，平面図。EITA p.173. fig.110.



図V－15．イッタギーのマハーデーヴァ寺院，平面図。
EITA pp. 195-200, fig. 127.



図V－16．ラックンディのナンネーシュヴァラ寺院，平面図。
EITA pp. 92-94, fig. 64



図V－17．パンカプールのアルヴァットゥカンパラ寺院，平面図。
EITA pp.154-155, Fig.99.

結

1．本論文の成果と意義

本論文では，従来のホイサラ寺院の研究でヴィマーナ外壁の壁面分割に着目した研究とは異なり，ホイサラ寺院本殿を構成する室を対象としてガルバグリハに至る軸線についての対称性に着目して平面類型を分類し，それに基づいて，寺院にまつられた神格の方位と入口位置との相関，寺院本殿を構成する各室の平面形態との相関について考察し，最後に壁面分割に関する研究で類似点が指摘されている後期チャールキヤ寺院の平面構成との比較を通して，ホイサラ寺院の平面構成における特徴を考察した。

本論文の成果として以下の三点が挙げられる。（1）ホイサラ寺院本殿の平面は，平面類型に分類して考察できることを指摘した点，（2）ホイサラ寺院を宗教・宗派別に分類し，平面類型との相関を考察することにより，ホイサラ寺院の特徴として挙げられる複数の神格をまつる寺院を宗教的背景から理解し，宗教・宗派別の平面類型の特徴を指摘した点，（3）寺院本殿を構成する室の分析を通して，ホイサラ寺院本殿の平面形態が正方形を規範とし，ナヴァランガを中心として本殿平面が構成されている点を指摘した点である。

まず第一点についてみると，第Ⅱ章でふれたように，一軸対称平面では，ナヴァランガの一方にガルバグリハ，シュカナースィが，その反対側に，ポルティコ，マハーマンダパ等が位置している。二軸対称平面では，ナヴァランガの一方にガルバグリハ，シュカナースィが配置され，残る三方にポルティコが配置されるか，またはナヴァランガの一方にポルティコが，残る三方にガルバグリハ，シュカナースィが配置されている。非対称平面では，各平面類型でそれぞれ非対称に室が配置されているが，いずれもナヴァランガの周りに配置され，並置平面でもナヴァランガを共有し，一軸対称または二軸対称平面が並置されているのである。このようにホイサラ寺院本殿は大きく四つの平面類型に分けて考えることができる。

一軸対称平面は，ホイサラ寺院でも最も数が多く，中世インド寺院を通して共通した平面類型であると考えることができ，ホイサラ寺院の平面類型の特徴は二軸対称，非対称，並置平面にあるとみなすことができる。ヴィマーナ外壁の水平分割について

の分類を通して，ホイサラ独自の建築様式とされる寺院は，二軸対称平面で神格がナヴァランガの三方にまつられる平面類型にある。並置平面についてみると，ホイサラ寺院と類似した平面類型の寺院がカダンバ朝，ガンガ朝の寺院にみられることから，寺院を並置して神格をまつることは以前から為されていたが，ナヴァランガを共有し，横長のホールを形成している点がホイサラ寺院独自であるということができよう。非対称平面は10世紀以降の後期チャールキヤ寺院にもみられ，カルナータカの伝統的な平面類型であると考えることもできるが，これについてはさらにラーシュトラクータ朝，初期チャルキヤ朝の寺院を考察する必要がある。

次に，第二点目について，多神格をまつる二軸対称または非対称平面の寺院を改めて宗教的背景から追ってみたい。

第Ⅰ章では，12世紀以降の宗教的背景について，ジャイナ教，ヒンドゥー教シヴァ派が広く信仰されていたところに，ラーマーヌジャによって，ヒンドゥー教ヴィシュヌ派が新たに信仰を集めるようになった点を確認した。これらの宗教，宗派は，支配階層からは同村に異宗派の寺院を建立するなど，共存共栄するように図られていたが，中にはセクト主義に基づいて，シヴァ派，ヴィシュヌ派の間で，対立する構図も指摘した。建立された寺院については，寺院の建立に携った芸術家が，ほとんどシヴァ派で，宗教宗派にかかわらず寺院を建立していることから，寺院の建立は施主の意向を反映したもので，異宗派の共存共栄，または対立の構図の中で考えることができるとした。

このような宗教的背景をふまえて，ホイサラ寺院の平面構成を見直してみると，第Ⅱ章で指摘したように，壁面の分割に着目してホイサラ独自の建築様式であるとされる，デル・ボンタのハレービード・タイプ，ダーキーのトレンドBに分類される寺院は，二軸対称平面で，ヴィシュヌ寺院である傾向にあることを考えると，ホイサラ朝のもとで隆盛になったヴィシュヌ寺院は新たなホイサラ独自の建築様式で建立される傾向にあったものと考えることができよう。

第Ⅲ章では，ホイサラ寺院に限ってみると，複数の神格をまつる寺院では同宗派の神格をまつる場合に寺院の平面類型は対称に，異宗派の神格をまつる重層信仰寺院の場合に非対称になる傾向が認められる点を指摘した。同宗派の神格をまつる寺院をみると，シヴァ寺院に並置平面が，ヴィシュヌ寺院，ジャイナ教寺院に二軸対称平面

が特徴的にみられる。シヴァ寺院ではシヴァリンガをまつることが多く，同じ図像を並置していると考えられる。これに対し，ヴィシュヌ寺院，ジャイナ教寺院では，それぞれアヴァターラ，ティールタンカナ等の様々な図像的表現が可能で，その幾つかをひとつの寺院にまとめてまつることの合理性を考えることにより理解できる。

また非対称平面のシヴァ寺院と，重層信仰寺院には，入口の位置と主ガルバグリハの位置に共通点が認められる。両者ともナヴァランガの西側に主ガルバグリハを，南側に入口を配しているのである。これはシヴァ派の優位を確立しながらヴィシュヌ信仰を取込んだ非対称の重層信仰寺院はシヴァ派による両派の共存共栄の一形式であり，これに対して，同種の神格のみをまつる二軸対称平面の寺院はこのような思惑に反発するセクト主義のあらわれであるとみなすことができると推論した。

しかし，第Ⅴ章ででみたように，後期チャールキヤ寺院を考慮に入れると，に特徴的にみられた入口が東，南側に位置するシヴァ寺院との関連も考慮に入れる必要があることを指摘した。これはシヴァ寺院からシヴァ寺院への影響関係である点に注目すると，シヴァ派，ヴィシュヌ派の共栄を図ったものではなく，ヴィシュヌ寺院の影響を受けずにセクト主義に基づいているものと捉えることができよう。

このように平面構成を理解する上で，軸線の概念を取込むことにより，一般に平面の対称性が重視されるインド宗教建築において，非対称平面の寺院がクローズアップされ，それについて，宗教的背景から考察することにより，ホイサラ寺院の一面が理解されたものと考える。

第三点についてみると，第Ⅳ章で指摘したように，ガルバグリハ，シュカナースィ，ナヴァランガの壁面から成る一まとまりがナヴァランガ中央のアンカナの周りに配置されることによって，様々な平面類型が用意されていた。そこでは，主ガルバグリハ側の正面性を強調したように室が配置され，ガルバグリハの壁構造と，マハーマンダパ，ポルティコの柱，梁構造がナヴァランガで混淆しているのである。ナヴァランガ中央のアンカナはガルバグリハ，シュカナースィと大きさのほぼ等しい正方形平面で，第Ⅴ章で指摘したように，後期チャールキヤ寺院に比べ，ホイサラ寺院では正方形を規範としてひとつの機能にひとつの室を当て，画一化した平面構成になっているのである。

2．今後の研究の展望について

最後に，本研究の今後の展望について簡単に述べる。

ホイサラ朝はカルナータカ南部を中心として栄えたが，王朝の後半にはタミール地方に勢力を伸し，タミール地方でも寺院を建立している。例えば，タミール地方でホイサラ勢力の中心であった，カンナヌールにはホイサレーシュヴァラ寺院があって，1235年の建立であることが分っている[注1]。後期チャールキヤ朝と同様に，ホイサラ朝と密接な関係にあったチョーラ朝の寺院との比較検討も必要である。カルナータカ州に留学したこともあって，タミールナードゥ州での調査，文献収集が十分であるとはいえず，今後の課題である。

ホイサラ寺院では，プラダクシナ・パタが配置される寺院はごく少数で，本論文では例外として扱った。しかし，序でふれたようにプラダクシナ・パタの有無で平面の分類がなされるなど，インド寺院建築ではプラダクシナ・パタは寺院平面を構成する重要な室である。今後対象を広げる際に，プラダクシナ・パタを含めて平面類型を考察することが必要となろう。

また本論の最後で，ホイサラ寺院と後期チャールキヤ寺院について比較し，ホイサラ寺院との相違点について考察したが，カダンバ朝，ヤーダヴァ朝，カーカティーヤ朝など，ホイサラ朝と同時代の周辺の王朝の寺院についての研究が進むことによって，イスラム勢力が侵攻する間際のヒンドゥー王朝最後の建築的繁栄ともいうべきこれらの寺院群の平面構成が明らかとなろう。

一方，後期チャールキヤ寺院の分析を通して，カルナータカ地方独自の平面構成に対する展望が見えつつあるが，さらにラーシュトラクータ朝，初期チャルキヤ朝の寺院の平面構成を分析することによって，カルナータカの地域的特徴が明らかになるものと期待できる。

あとがき

インド政府給費留学生としてカルナータカ州マイソール大学古代史・考古学部に在籍した1992年1月より1995年2月までの3年間には，A．V．ナラシマムルティ教授をはじめ，M．S．クリシュナムルティ博士，R．H．クルカルニ博士には調査研究にかかわるご助言，ご配慮を多数いただき，また家族ぐるみの交際を許していただいた。オスマニア大学のアナンタナーラーヤナ名誉教授にはサンスクリット語の個人教授を通して，インド中世から現代に至る文化についての幅広い示唆を与えられた。インド考古局，マイソール支部のM．N．カッティ所長をはじめスタッフの方々には現地調査にかかわる情報を提供していただくとともに，図書館の使用を快諾され，多くの貴重な文献の閲覧させていただいた。カルナータカ州考古局のデーヴァラージ博士，C．S．パティル博士にはインド考古学調査に関する貴重なご意見をいただいた。また，慣れない家族でのインド生活をマイソール大学のA．S．ジャナールダン博士，P．プラカーシュ博士をはじめ多くの人々に親切に支援していただいた。ミシガン大学美術史学部のW．スピンク教授にはアジャンターでの調査をはじめ，広くインド美術に対する研究態度について影響を受けた。

小寺武久教授のご指導のもとインド建築に興味を持ち，研究のきっかけを得た名古屋大学在学中のみならず，マイソール留学中においても変らぬご指導と励ましを賜った。片木篤教授には公私にわたり親身に接していただき，本論文作成についても懇切丁寧にご指導いただいた。野々垣篤博士には身近なお立場からいつも素朴な疑問にお答いただいた。堀田典裕博士，丹羽和彦博士，佐藤彰博士，溝口正人博士には研究や論文作成に関してアドバイスをいただいた。名古屋大学文学部の宮治昭教授をはじめ，インド美術仏教美術研究会に係わる多くの方々には，インド美術研究の様々な見方を提供していただいた。博士論文の審査にあたり，片木篤教授，谷口元教授，野々垣篤博士には貴重な助言をいただいた。

記して，深謝の意を表すものである。

付記

本論文の第2章，第3章は以下の既発表論文を加筆修正したものである。

第2章　インド・ホイサラ朝寺院の平面についての類型学的考察，『日本建築学会計画系論文集』　第506号，1998.04.

第3章　まつられた神格とそれらの位置からみたインド・ホイサラ朝寺院の類型学的考察，『日本建築学会計画系論文集』　第511号，1998.09.

脚注

序

注1 本論文で用いる年号は特記のない場合はすべて西暦で，刻文等にも西暦に換算した年号を用いる。

注2 以下に示す寺院は資料によってホイサラ寺院と分類される場合とそうでない場合がある。ここで本論文での分類とその根拠を示す。

1．ハリハラのハリハレーシュヴァラ寺院

（MAR 1937 p.71-72, MAR 1932 p.50-53, pl. XV, Cousens p.93, A. Rea, *Chalukyan Architecture*, pp.32-35,pls.CIX - CVIII. EITA pp. 184-185, fig. 104.）

シェッター，デル・ボンタはホイサラ寺院としているが，ダーキーは後期チャールキヤ寺院としている。この寺院は，11世紀に建立されたがバッラーラⅡ世によって1220年頃，全面的に改築されたものであるので，この時期に建立されたホイサラ寺院として考える。

2．バッリガンベーのケーダレーシュヴァラ寺院

（ASMAR 1911 pp. 112-114, MAR1931 pp.62-64, MAR 1941 pp. 78-9, pls. IX, X, MAR 1928 pl.13, MAR1911 pp.15-18）

シュカナーサ前面にホイサラ朝の徽章があること，この寺院に関する1131年の刻文はホイサラ王バッラーラⅠ世の王妃に言及していることから，ホイサラ寺院とされることが多い。MAR，ダーキーが指摘するように，壁面の装飾は後期チャールキヤ様式であること，1131年以前に刻文があってこの寺院に言及していること，またホイサラ朝の徽章はナラシンマチャールが指摘するように（ASMAR 1911, p.113），この地域でホイサラ朝が勢力を持つようになってからつけ加えられたものと考えられることから，本論では後期チャールキヤ寺院として扱う。

3．クッパトゥールのカイタベーシュヴァラ寺院

（ASMAR 1911 pp. 120, MAR1931 pp.49-51, pl.XIX, EITA p.162-164, fig. 103.）

MARでは，ヴィナーヤディトヤ（在位／1047-98）の時代に後期チャールキヤ朝のもとで建立された寺院としているが（MAR1931 p.49, ASMAR 1911 pp.

120），ダーキーは，1231年，この地が後期チャールキヤ朝の支配下から離れ一時的にセーウナ朝の支配下にあった時に，後期チャールキヤ様式で建立されたものとし，大きく異なっている。本論では，MARをふまえて13世紀の建立であるとするダーキーにしたがって，後期チャールキヤ寺院として扱う。

4．ナドゥカラシのマッリカールジュナ寺院，ラーメーシュヴァラ寺院

（MAR 1928, pp. 4-5, pl. VIII, EITA p. 288, fig. 165）

シェッターはホイサラ寺院とし，ダーキーはホイサラ，後期チャールキヤ以外の未知の王朝によって建立されたものとして扱っている。この寺院は1218/9年にバレーッヤンナ・ヴェールガデーという藩候によって建立された。この時期，この地域はホイサラ朝の支配下にあったが，藩候による建立であるため本論ではホイサラ，後期チャールキヤのいずれにも含めない。

5．クッパガッデのラーメーシュヴァラ寺院

（MAR 1931 pp.56-57, pl. XVI, EITA pp. 249, fig. 155）

1189年に建立されたこの寺院は，MARではラーマというブラーフミンが施主であるとし，ホイサラ寺院との記述は見られない。EITAはカダンバ朝（バナヴァーシ）のカーマデーヴァ（在位1180-1217 A.D.）とその妃カーララデーヴィーに関する記述が見られることからカダンバ朝寺院に分類している。シェッターはホイサラ寺院としているが，必ずしも根拠が明らかではないため，EITAにしたがってカダンバ朝寺院であると考えるのが妥当であろうと考えられるため本論では取扱わない。

6．マーガラのヴェーヌゴーパーラ寺院

（A. Rea, *Chalukyan Architecture*, pp.10-14, pls. IX-XXI., EITA pp. 179-181, fig. 116.）

この寺院は，シェッター，デル・ボンタはホイサラ寺院としているが，EITAでは，ホイサラ朝のもとで建立された後期チャールキヤ様式の寺院として扱っている。1209年にバッラーラII世のもとでマルマルサ（同地のブラーフミン，スヴァーミの息子）によって建立された旨の刻文が残るため（*South Indian Inscription* Vol. IX, No. 329），本論ではホイサラ寺院として取扱う。

注3 M. A. Dhaky, *Encyclopaedia of the Indian Temple Architecture, Upper Dravidadesa, Later Phase*, New Delhi, 1996, pp. 3-217.

注4 アネーケーレーのケーシャヴァ寺院（H. 22），ソーマナータプラのチェーンナ

ケーシャヴァ寺院（H．177），ヌッギーハッリのサダーシヴァ寺院（H．208）はブラーカーラ，マハードヴァーラをもつ寺院であるが，それぞれ，一軸対称平面，二軸対称平面，非対称平面で，マハードヴァーラの有無と，平面類型の相関は認められない。ヌッギーハッリの寺院ではマハードヴァーラ，ブラーカーラは増築されたものである。

注5 H．137は巻末の資料番号を示す。以下同様。

注6 *Epigraphia Carnatica*, Bangalore, 1886-1934．また，新たに発見された刻文を加え，新版が刊行されつつある。*Epigraphia Carnatica*, vol. I-IX, 1972-90.

注7 J. Duncan Derrett, *The Hoysalas, A Mediaeval Indian Royal Family*, Madras, 1958.

注8 *Annual Report of the Mysore Archaeological Department*, Bangalore, 1906-1947-56.

注9 R. Narasimhachar, *The Lakshmi-devi Temple at Dodda-gaddavalli*, New Delhi, 1919, Rpt.1982.

注10 R. Narasimhachar, *The Kesava Temple at Belur, New Delhi*, 1911, Rpt.1982.

注11 R. Narasimhachar, *The Kesava Temple at Somnathepura*, New Delhi, 1919, Rpt.1982.

注12 Henry Cousens, *The Chalukyan Architecture of the Kanarese Districts*, (Archaeological Survey of India, New Imperial Series Vol. XLII) Calcutta, 1926.

注13 A. Rea, *Chalukyan Architecture, Includinag Examples from the Ballari District, Madras Presidency* (Archaeological Survey of India, New Imperial Series, Volume XXI.), Delhi, Rpt. 1970.

注14 Percy Brown, *Indian Architecture (Bhuddhist and Hindu Period)*, Bombay, 1956.

注15 ヒンドゥー教寺院では一般に，後述のガルバグリハ（祠堂）を内包する厚い壁体と，その上にあるシカラ（塔状構造物，上部構造と訳されることが多い）を含めてヴィマーナ（Vimana），またはムーラプラーサーダ（Mulapurasada）とよばれる。ヴィマーナの方が古い用語で現在でも南インドでは用いられるが，北インドでは，ムーラプラーサーダが一般的である。これら二つの用語は同義に用いられることが多いが，プラーサーダという用語は寺院の建物全体を指す用語として

用いられるため，本論では混乱を避けるためヴィマーナを用いることとする。

注16 祠堂のまわりを右回りにまわるために設けられた空間で，ヒンドゥー寺院一般に見られる建築上の特徴の一つである。ソーマナータプラのチェーンナケーシャヴァ寺院のような典型的なホイサラ寺院では（H．177）このプラダクシナ・パタのかわりにヴィマーナの外壁面形に従った平面形態の高い基壇を設け，祠堂のまわりをまわることができるようになっている。Susan L. Huntington, *The Art of Ancient India, Buddhist, Hindu, Jain*, New York, 1985, pp.566-567.

注17 インド建築史では，シカラの形態について，垂直の緩やかに内側に傾斜する曲線が印象的な北インドのナーガラ様式，一段ずつ階段のように高さを増していくピラミッドにも似た南インドのドラーヴィダ様式について述べられることが多い。これに加えてドラーヴィダとナーガラの混淆様式としてヴェーサラ様式が挙げられ，ホイサラ様式の寺院が好例とされることがあるが，ヴェーサラ様式のシカラは定義がまちまちであり，議論の余地が大いにある。またホイサラ様式のシカラは，小型のシカラを繰返す点がブーミジャ様式のシカラとも類似している点も指摘できる。シカラの形態については， M A. Dhaky, *The Indian Temple Forms, in Karnata inscriptions and architecture*, Delhi, 1977. を参照。

注18 「旋盤で削ったような」という表現はもともと，ファーガッソンによって「旋盤の上で削ったように正確な柱」と記述されたものであって(J. Fergusson, [and Taylor], *Architecture in Dharwar and Mysore*, London, 1866)，決して「旋盤を用いた柱」ではない。Del Bonta, *op. cit.*, p. 121.

注19 例えば，アラシーケレのイーシュヴァラ寺院のナヴァランガの右手奥の柱に残る。

注20 円柱は，インド建築全般に共通したモチーフで，西インドの石窟寺院にも多数見られる。またパッタダカルのジャイナ寺院のムカマンダパの柱は，ラーシュトラ朝のクリシュナ二世の時代に建設されたものと考えられているが，ホイサラ朝の寺院に典型的に見られる円柱に極めて類似しており，ホイサラ朝の円柱の起源を考える上で興味深い。Micael W. Meister, M. A. Dhaky (Ed.), *Encycropaedia of Indian Temple Architecture, South India, Upper Dravidadesa, Earlu Phase, A. D. 550-1075*, Delhi, 1986, plate.461.

注21 S. Setter, *The Hoysala Temples*, Bangalore, 1992. pp. 177-205.

注22 Setter, *ibid*, pp.351-367.

注23 Del Bonta, Robert John, *The Hoysala Style : Architectural Development and*

Artists, 12th and 13th Centuries, A.D., Ph.D. Dissertation, The University of Michigan, 1978.

注24 ハレービード，コーラヴァンガラはそれぞれのタイプのもっとも典型的な寺院のある村の名で，ともにハッサン県にある。第II章図II－3参照。

注25 ベールールのヴィーラナーラーヤナ寺院が唯一基壇に載る例として挙げられているが，コーラヴァンガラのブーチェーシュヴァラ寺院にも，基壇があった可能性も指摘されている。Del Bonta, *op. cit.*, p.85.

注26 Del Bonta, *op. cit.*, p. 7.

注27 Adam Hardy, *Indian Temple Architecture : Form and Transformation, The Karnata Dravida Tradition 7th to 13th Centuries*, New Delhi, 1995, pp.243-265, pp.287-290, pp.303-304.

注28 Gerard Foekema, *Hoysala Architecture, Mediaeval temples of southern Karnataka built during Hoysala rule*, New Delhi, 1994.

注29 Kelleson Collyer, *The Hoysala Artists, Their Identity and Styles*, Mysore, 1990.

第Ⅰ章

注1 ソーセユールを首都とした記述がこれ以降もみられる。S. Setter, *The Hoysala Temples*, Bangalore, 1992,p. 9.

注2 M. A. Dhaky, *Encyclopaedia of Indian Temple Architecture,South India, Upper Dravidadesa, Later Phase*, New Delhi, 1996, pp. 129-130.

注3 ただしこの年号は1190年を起源としている。J. Dunkan M. Derrett, *The Hoysalas, A Mediaeval Indian Royal Family*, London, 1957, pp. 89, 225.

注4 デル・ボンタはホイサラ朝衰退の一因として，バッラーラⅡ世のタミール地方への関与を挙げる。Robert John Del Bonta, *The Hoysala Style: Architectural Development and Artists, 12th and 13th Centuries, A. D., 1978*, The University of Michigan., 1978, p. 30.

注5 Kelleson Collyer, *The Hoysala Artists, Their Identity and Styles*, Mysore, 1990, p. 19.

注6 Setter, *op. cit.*, pp. 48-49.

注7 upanayana, 入門式と呼ばれ，ヒンドゥー教再生族にのみ許された，アーリヤ社会の一員としてヴェーダの祭式に参加する資格が与えられる儀式。

注8 *Epigraphia Carnatica* (New Edition), vol. IX, p. 763, (Bl)391.

注9 Setter, *op. cit.*, p. 50.

注10 K. T. Ramaswamy, "*Sri Vaisnavism in Hoysala Period*", A Sheik Ali (Ed.), *The Hoysala Dynasty*, Mysore, 1972, pp.307－308.

注11 バンダルカールは1098A.D.にビッティ・デーヴァが改宗したとしているのに対し（R. G. Bhandarkar, *Vaisnavism, Saivism and Minor Religious Systems*, 1965, Delhi, p. 52.），ラーマーヌジャがホイサラ領に逃れてきた時期を，ラーマスワミーは1096A.D.（Ramaswamy, *op cit.*, p. 306.），コッリヤーは1104または1108A.D.から1117A.D.の間であるとしており（Collyer, *op cit.*, p. 21.），年代については定説がない。

注12 ラーマーヌジャについては，Bhandarkar, *op. cit.*, Delhi, 1965, pp.50－57. を

参照。

注13 伝説にある寺院はベールールのチェーンナケーシャヴァ寺院，タラカードゥのキールティナーラーヤナ寺院，トーンヌールのナーラーヤナ寺院，ガダッグのヴィーラナーラーヤナ寺院，メールコーテーのラクシュミーナーラーヤナ寺院の5寺院であるが，メールコーテー，ガダッグの寺院についてのヴィシュヌヴァルダナの関与は今のところ確立された定説ではない。Setter, *op. cit.*, pp.50-51.

注14 Collyer, *op. cit.*, pp. 19－20.

注15 バンダンカル，R．G．，島岩　他訳，「ヒンドゥー教　ヴィシュヌとシヴァの宗教」，せりか書房，1984，pp. 381-405.

注16 Collyer, *op cit.*, p. 23.

注17 Setter, *op cit.*, pp. 47, 50, 59.

注18 S. Setter, *Hoysala Sculptures in the National Museum*, Copenhagen, Copenhagen, 1975, pp. 15-16.

注19 例えば，アラシーケーレーのイーシュヴァラ寺院では，ガルバグリハにシヴァリンガをまつるが，寺院外壁には，シヴァ神とその妃パールヴァティーの像，サプタマートリカーと呼ばれるシヴァ派のシャクティの神々をはじめ，ヴィシュヌ神の24種のヴィシュヌ・ムールティ，ヴィシュヌとその妃ラクシュミーの像が見られる。MAR 1930 pp.62-64.

注20 "obeisance to the Universal spirit Jina, who is Siva, Dhari(Brahma), Sugata(Buddha), and Visnu", *Epigraphia Carnatica* (old eddition), vol. XII, Tm. 9.

注21 Setter, S. *Hoysala Sculptures.....*, pp.24-26.

注22 "whoso consorts with the dancing-girls who are not dancing-girls that go to Hari(Visnu)bevomes an outcaste." Collyer, op cit., p. 24. ここで，以下の刻文を指摘しているが，確認がとれていない。*Epigraphia Carnatica* (old Eddition), vol V, Bl. 241.

注23 Collyer, *op cit.*, pp. 59－64.

注24 Collyer,*op cit.*, p. 63.

注1 ソーセユールを首都とした記述がこれ以降もみられる。S. Setter, *The Hoysala Temples*, Bangalore, 1992,p. 9.

注2 M. A. Dhaky, *Encyclopaedia of Indian Temple Architecture,South India, Upper Dravidadesa, Later Phase*, New Delhi, 1996, pp. 129-130.

注3 ただしこの年号は1190年を起源としている。J. Dunkan M. Derrett, *The Hoysalas, A Mediaeval Indian Royal Family*, London, 1957, pp. 89, 225.

注4 デル・ボンタはホイサラ朝衰退の一因として，バッラーラII世のタミール地方への関与を挙げる。Robert John Del Bonta, *The Hoysala Style: Architectural Development and Artists, 12th and 13th Centuries, A. D., 1978*, The University of Michigan., 1978, p. 30.

注5 Kelleson Collyer, *The Hoysala Artists, Their Identity and Styles*, Mysore, 1990, p. 19.

注6 Setter, *op. cit.*, pp. 48-49.

注7 upanayana, 入門式と呼ばれ，ヒンドゥー教再生族にのみ許された，アーリヤ社会の一員としてヴェーダの祭式に参加する資格が与えられる儀式。

注8 *Epigraphia Carnatica* (New Edition), vol. IX, p. 763, (Bl)391.

注9 Setter, *op. cit.*, p. 50.

注10 K. T. Ramaswamy, "*Sri Vaisnavism in Hoysala Period*", A Sheik Ali (Ed.), *The Hoysala Dynasty*, Mysore, 1972, pp.307－308.

注11 バンダルカールは1098A.D.にビッティ・デーヴァが改宗したとしているのに対し（R. G. Bhandarkar, *Vaisnavism, Saivism and Minor Religious Systems*, 1965, Delhi, p. 52.），ラーマーヌジャがホイサラ領に逃れてきた時期を，ラーマスワミーは1096A.D.（Ramaswamy, *op cit.*, p. 306.），コッリヤーは1104または1108A.D.から1117A.D.の間であるとしており（Collyer, *op cit.*, p. 21.），年代については定説がない。

注12 ラーマーヌジャについては，Bhandarkar, *op. cit.*, Delhi, 1965, pp.50－57. を参照。

注13 伝説にある寺院はベールールのチェーンナケーシャヴァ寺院，タラカードゥのキールティナーラーヤナ寺院，トーンヌールのナーラーヤナ寺院，ガダッグのヴィーラナーラーヤナ寺院，メールコーテーのラクシュミーナーラーヤナ寺院の5寺院であるが，メールコーテー，ガダッグの寺院についてのヴィシュヌヴァルダナの関与は今のところ確立された定説ではない。Setter, *op. cit.*, pp.50-51.

注14 Collyer, *op. cit.*, pp. 19－20.

注15 バンダンカル，R．G．，島岩　他訳，「ヒンドゥー教　ヴィシュヌとシヴァの宗教」，せりか書房，1984，pp. 381-405.

注16 Collyer, *op cit.*, p. 23.

注17 Setter, *op cit.*, pp. 47, 50, 59.

注18 S. Setter, *Hoysala Sculptures in the National Museum*, Copenhagen, Copenhagen, 1975, pp. 15-16.

注19 例えば，アラシーケーレーのイーシュヴァラ寺院では，ガルバグリハにシヴァリンガをまつるが，寺院外壁には，シヴァ神とその妃パールヴァティーの像，サプタマートリカーと呼ばれるシヴァ派のシャクティの神々をはじめ，ヴィシュヌ神の24種のヴィシュヌ・ムールティ，ヴィシュヌとその妃ラクシュミーの像が見られる。MAR 1930 pp.62-64.

注20 "obeisance to the Universal spirit Jina, who is Siva, Dhari(Brahma), Sugata(Buddha), and Visnu", *Epigraphia Carnatica* (old eddition), vol. XII, Tm. 9.

注21 Setter, S. *Hoysala Sculptures.....*, pp.24-26.

注22 "whoso consorts with the dancing-girls who are not dancing-girls that go to Hari(Visnu)bevomes an outcaste." Collyer, op cit., p. 24. ここで，以下の刻文を指摘しているが，確認がとれていない。*Epigraphia Carnatica* (old Eddition), vol V, Bl. 241.

注23 Collyer, *op cit.*, pp. 59－64.

注24 Collyer,*op cit.*, p. 63.

注1 G．ミッチェル，神谷武夫訳，「ヒンドゥ教の建築，ヒンドゥ寺院の意味と形態」鹿島出版会，1993，pp. 73-94.

注2 ナヴァランガは9分割されるものの他に，キッケーリのブラフメーシュヴァラ寺院のようにナヴァランガのポルティコ側半分がジャーラカ（後述）で仕切られている場合もある（H．65）。またベールールのチェンナケーシャヴァ寺院のようにナヴァランガが9分割でなく十字形を示すものや（H．137），ソーマナータプラのチェンナケーシャ ヴァ寺院のように長方形の場合もある（H．177）。これらの寺院のナヴァランガの平面形態 については第Ⅳ章で考察する。

注3 S. Setter, *The Hoysala Temples*, Bangalore, 1992, p. 178.

注4 刻文の記述についてはSetter, *ibid*, p. 178による。なお，訳語は，M. M. Williams, *A Sanscrit English Dictionary*, Delhi, 1899, Rpt.1995を参照した。

注5 筆者がインド建築についてこれまで確認した範囲では，一軸対称平面は汎インド的に見られるが，二軸対称平面はカルナータカからグジャラート地方にかけて，非対 称平面，一軸対称の並置された平面はカルナータカ地方に見られるものである。これらについては第Ⅴ章第2節で考察する。。

注6 ヘッゲーレーのパールシュヴァナータ寺院（H．48）とハレービードのパールシュヴァナータ寺院（H．64）がこれにあたる。

注7 H．59は巻末の資料番号を示す。以下同様。

注8 MAR 1934, p.16., Del Bonta, *ibid.*, pp.55-56.

注9 これらの異なるナヴァランガの平面形態については第Ⅳ章で考察する。

注10 もとのポルティコ部分は壁に彫刻もなく不自然である。MARによると，時期は定 かではないが増築はホイサラ朝の時代に行われたものと推測される。MAR 1931 p.5.

注11 刻文が倒壊しているため，いつ誰が増築を行ったものかは明らかではないが，マハー マンダパの東に位置する列柱廊の痕跡は，プラカーラと呼ばれる回廊の一部であることが 充分想定され，その外側にある部分は増築である可能性が非常に高

い。MAR 1933 p.81.

注12 ドージェートカのヘーメーシュヴァラ寺院はポルティコがなく直接ナヴァランガにはいるが（H．193），ナーガラー ブラのケーダレーシュヴァラ寺院は（H．189），ナヴァランガの南側にあったポルティコが倒壊し，現状はドージェートカ の寺院と同様にポルティコがない。MAR 1940 p.51, MAR 1939 p.53.

注13 本章では，まつられた神格については考察しないため，同列に論じているが，平面類型の記号[非対称－4ｎ]は，非対称－4に似た平面類型で，ナヴァランガの東側にガルバグリハではなくナンディー堂が位置するものを指す。

注14 この寺院に見られるような長方形のガルバグリハは，後期チャールキヤ寺院に類似したものがあって両者の関連性が考えられるが，これについては第Ｖ章で触れる。

注15 Henry Cousens, *The Chalukyan Architecture of the Kanarese Districts*, Calcutta, 1926, pp. 114-115., plate. CXXV.

注16 Cousens, *ibid*, pp.112-113, plate CXXI.

注1 ホイサラ寺院では，寺院外壁やナヴァランガ内部に設けられたニッチ内に神像をまつることがあるが，本章ではガルバグリハにまつられた神格について論じ，ナヴァランガ内のニッチについては第Ⅳ章でふれる。

注2 syncretic templeのことで多神格をまつる寺院をいうが，本論ではシヴァ神，ヴィシュヌ神，スーリヤ神等の宗派の異なる神格がまつられた寺院を指し，寺院にまつられた複数の神格がヴィシュヌ神のアヴァターラ（後述）のみの場合や，ジャイナ教のティールタンカナ（後述）のみの場合は含めない。

注3 Robert John Del Bonta, *The Hoysala Style: Architectural Development and Artists, 12th and 13th Centuries A.D.*, The University of Michigan, Ph D. Dissertation 1978, pp. 237－247.

注4 S. Setter, *The Hoysala Temples*, Bangalore, 1992, pp. 184－197.

注5 *Annual Reports of the Mysore Archaeological Department*, 1906 － 1947-56., Bangalore.

注6 Setter, *op cit.*, pp. 351 － 367.

注7 ポルティコの手前にマハーマンダパ（広間），ナンディー堂（シヴァ神の乗物である牡牛をまつる小祠堂でガルバグリハとは区別して考えられている）が配置されることがあるが，本章では特に本殿入口とガルバグリハの位置に着目するため，これらのすべてについては触れない。

注8 拙稿"南インド・ホイサラ朝の建築空間－寺院空間の構成と変遷"，上野邦一，片木篤編，「建築史の想像力」，学芸出版社，1996，pp. 194－ 212.

注9 バイラヴァをまつる，バイラヴァナグッダのバイラヴァ寺院（MAR 1947 - 56 p. 39.）と，ヴィーラバドラをまつる，ハレービードのヴィーラバドラ寺院（Gerard Foekema, *Hoysala Architecture, medieval temples of southern Karnataka built during the Hoysala rule*, New Delhi, 1994, pp. 141－142.），ケーレーサンテーのヴィーラバドラ寺院（MAR 1945 pp. 69－70.）の合計3基。

注10 例えば，アラシーケーレーのイーシュヴァラ寺院にまつられるリンガは「イーシュ

ヴァラ・リンガ」とよばれるが，図像的に他のリンガと大差はない。（MAR 1930 pp. 61－67.）

注11 MAR 1928 p.4.

注12 MAR 1933 pp. 61－66.

注13 MAR 1934 pp. 24－28.

注14 MAR 1917 pp. 11－12.

注15 MAR 1920 pp. 17－18.

注16 ゴーパーラハッリのゴーパーラクリシュナ寺院（MAR 1947-56 pp. 43－44.）と，テーラカナンビのゴーパーラスワミー寺院（MAR 1937 pp. 24－25.）の2基。

注17 表Ⅲ－8の「寺院名」欄で＊＊で示した寺院は，入口右側のヴィシュヌ・ムールティの名前，もしくはノーナミナケーレーのゴーパーラスワミー寺院（MAR 1939 pp.58－59.）のように本殿入口左側のゴーパーラの名前で呼ばれる寺院であるが，その理由は分っていない。

注18 MAR 1942 pp. 37－39.

注19 表Ⅲ－8に示すようにヴィシュヌ寺院にまつられた神格はすべて異なることが多いが，本論では主神が中央の主ガルバグリハにまつられているため，それ以外のガルバグリハにまつられる神格は副神として対称性を論じる。

注20 MAR 1947 - 56 pp. 37－38.

注21 この寺院ではナヴァランガの西側に本尊であるヨーガナラシンハをまつる。南側のガルバグリハは破損が激しく偶像は現存しないが，寺院内に残る彫像がヴィシュヌ神に関するものばかりであるので，ここにまつられた神格はヴィシュヌ神であろうと考えられる。（MAR 1947-56 pp. 37－38.）

注22 MAR 1933 pp. 80－90.

注23 刻文が崩壊しているため建立年代は明らかではないが，ナヴァランガの西側に位置するガルバグリハ上方のシカラ（塔状構造物）と，マハーマンダパの南，北側に位置するガルバグリハ上のシカラとではデザインが異なっており，二期にわたって建立されたものであると考えられる。

注24 この寺院ではナヴァランガの西側の壁に格子窓が設けられており，この窓のすぐ西側にヴィシュヌ神の乗物であるガルーダをまつる小祠堂が位置している。MAR

1925 p. 5.

注25 ハリハラのハリハレーシュヴァラ寺院（MAR 1937 pp. 71－72.），ハリハラープラのハリハレーシュヴァラ寺院（MAR 1942 pp. 25－26.）では，主ガルバグリハにハリハラ神をまつる。ハリハラ神は，シヴァ神，ヴィシュヌ神が一体化した神格であり，これ自体重層信仰を具現化したものである。

注26 パンチャヤターナとはヒンドゥー教の儀式の時に用いられる神格のパンテオンを指し，ガネーシャ神，マヒシャースラマルディニ神，シヴァ神，ヴィシュヌ神，スーリヤ神の五つの神格で構成される。

注27 MAR 1933 pp. 45－52.

注28 MAR 1937 pp. 71－72.

注29 MAR 1933 pp. 93－97. この寺院には，シヴァ神，ヴィシュヌ神以外の神格，ラクシュミー神が主神としてまつられる。さらにラクシュミー神をまつるガルバグリハも入口の方からみて正面に位置するわけではなく極めて例外的である。

注30 MAR 1933 pp. 36－45.

注31 MAR 1936 pp. 19－23.

注32 MAR 1933 p. 37.

注33 MAR 1945 pp. 72－74.

注34 ナヴァランガ東側のマハーマンダパはその他の建物よりも遅れて建設された。ガルバグリハ上のシカラがヴィジャヤナガラ朝の時代に再建されていることは明らかであるが，マハーマンダパの建立された時期は明らかではない。MAR 1929 pp. 9－10. MAR 1939 pp. 68－71.

注35 チャンナギリのカッルーマタ寺院（H. 221），ケーテーシュヴァラ寺院（H. 222）では，ナヴァランガの東側の祠堂にナンディーがまつられる。ナンディーはシヴァ神の乗物の牡牛で，シヴァ神，ヴィシュヌ神等の神格とは区別されるが，寺院の平面は三つの異なる神格をまつるケーレーサンテーのシャンブリンゲーシュヴァラ寺院（H. 219）と大差ない。

注36 Setter, S., *op cit.*, p. 186.

注37 寺院の名称は，本尊または寺院を建立したパトロンにちなんで命名されるが（Channabasappa S. Patil, *Temples of Raichur and Bellary Districts*,

Karnataka, 1000 - 1325 A.D., Mysore, 1992, pp.21-23参照），シヴァ神を意味するイーシュヴァラ（Isvara）が語尾につく名称はシヴァ寺院と見てさしつかえない。

注38 MAR 1932 pp. 16－17.

注39 R．G．バンダンカル，島岩，池田健太郎訳，「ヒンドゥー教，シヴァとヴィシュヌの宗教」，1984，せりか書房，pp. 162-164.

注40 Henry Cousens, *The Chalukyan Architecture of the Kanarese Districts*, Calcutta, 1926, pp.114－115, pl. CXXV.），

注41 Cousens, *ibid.*, pp. 112－113, pl. CXXI..

第Ⅳ章

注1 ホイサラ朝の時代に建立され後の時代に増改築がなされた寺院は，建立当時のものを対象とし増築部分は扱わない。

注2 Gerard Foekema, *Hoysala Architecture, Mediaeval temples of southern Karnataka built during Hoysala rule*, New Delhi, 1994, pp.49-51.

注3 ベーラゴーラのバクタヴァトゥサラ寺院（MAR 1944 p.33, pl. VIII, IX.／H. 133）ではガルバグリハが円形であるが，これ以外に円形のガルバグリハはみられず，例外とみなすことができる。

注4 このようにナヴァランガは9分割されることが一般的であるが，コーラール県には，クルドゥマレーのソーメーシュヴァラ寺院（ MAR 1935 pp. 46-49, pl. XV.／H. ），ベッールールのカンヴェーシュヴァラ寺院（MAR 1941 pp. 67-69.／H. 216），マディヴァラのスヴァヤンブヴェーシュヴァラ寺院（MAR 1941 pp. 49-53, pl. VI.／H. 75)のようにナヴァランガが中央の正方形と周囲の四つの長方形の五つに分割されている寺院が数例みられる。これらの寺院はすべてドラーヴィダ様式で建てられていて，地域的特徴であるといえる。

注5 MAR 1926 pp.3-4, pl.III.

注6 MAR 1945 pp.72-74, pl.XIII.

注7 MAR 1934 pp. 36-47, pl. XI.

注8 MAR 1933 pp.15-20, pl. IV.

注9 MAR 1934 pp.31-36, MAR 1925pl. IV.

注10 ゴーヴィンダナハッリのパンチャリンゲーシュヴァラ寺院は最も北側のナヴァランガが増築されている。この増築によって入口位置，ニッチの配置など，プランの対称性が失われている。

注11 Alexander Rea, *Chalukyan Architecture, Includinag Examples from the Ballari District, Madras Presidency* (Archaeological Survey of India, New Imperial Series, Volume XXI.), Delhi, Rpt. 1970, pp.10-14, pls. IX-XXI.

注12 MAR 1932 pp.16-39, pl. VI.

注13 MAR 1933 pp.61-66, pl. XV.

注14 後述するように各室の構造が壁構造か，柱，梁の構造であるかに着目するので，シュカナースィ入口のように周りが壁で囲われたものは壁面に穿たれた開口部であると考え，周りがジャガティー（後述）であるようなポルティコからナヴァランガへの入口とは区別して考える。

注15 ジャガティは北インドでは寺院本殿が載る基壇（Platform）を指す場合もあるが，本論では腰壁と半柱で天井を支える半開放構造を指す南インドでの用語定義にしたがう。

注16 1117年の建立当時は格子窓がなかったベールールのチェーンナケーシャヴァ寺院は，1173年の増築時に格子窓が取付けられている。（MAR 1931 pp. 26-28.），

注17 MAR. 1915 pp. 21-22, pl. X.

注18 MAR 1920 pp. 17-18, pl. XIV.

注19 MAR 1935 pp.3-10, MAR 1918 pp.19-20, pl.VII.

注20 この寺院は，一軸対称の寺院（南側）と一軸対称の並置された寺院（北側）が，同じ敷地に建立されている。本論では南側の寺院をイーシュヴァラ寺院（E），北側の寺院をイーシュヴァラ寺院（D）として区別する。 MAR 1930 pp.61-67, pl. XIV.

注21 MAR 1932 pp.3-7, pl. III.

注22 R. Narasimhachar, *The Kesava Temple at Belur*, Delhi, 1911, Rpt. 1982, pp.15-16, pl. II.

注23 MAR 1932 p.54-56.

注24 Narasumhachar, *op.cit.*, pl. II.

注25 MAR 1933 pp.93-97.

注26 ナヴァランガのニッチにまつられる神格は，ガネーシャ，マヒシャースラマルディが多く，ニッチの数が増えるにしたがって，スーリヤ，サラスヴァティ，サプタマトリカと呼ばれる地母神がまつられる。彫像が紛失していることが多く，また現在まつられる神格が必ずしも建立当時のものとは限らないため，ガルバグリハにまつられた神格との厳密な関係性は見いだせない。

注27 複数の神格をまつる寺院では主神を安置するガルバグリハを主ガルバグリハ，

その他の神格を安置するガルバグリハを従ガルバグリハと呼んで区別する。

注28 この寺院では，ナヴァランガの西側にガルバグリハ，シュカナースィ，南北にガルバグリハが位置するが，そのそれぞれに一対のニッチが設けられて計6つのニッチがある。MAR 1931 pp.66-67, MAR 1941 pp.90-93.

注29 MAR 1931 p.57, pl.XVII.

注30 R. Narasimhachar, *Epigraphia Carnatica*, vol.II.(reviced and edited) Bangalore, 1923, pp.32-33, pl. ILIX.

注31 MAR 1939 pp.41-43 pl.IV.

注32 MAR 1933 pp.45-52, pl. X.

注33 ナヴァランガ側壁中央部のニッチにも神像が現存していないものが多いが，シャンテーバーチャナハッリのマハーリンゲーシュヴァラ寺院では，シヴァ神がガルバグリハに，ヴィシュヌ神とブラフマー神がニッチにまつられる（MAR 1939 p. 42.）。これらの神格はシュカナースィ脇のニッチにまつられるガネーシャ，マヒシャースラマルディニ神とは異なり，ガルバグリハにまつられることが多いヒンドゥー教の三大神である。

注34 S.Setter, (Ed), *Archaeological Survey of Mysore, Annual Reports, vol. III*, Dharwar, 1976,pp. 101-102.

注35 ローキケーレーのイーシュヴァラ寺院（MAR 1926 pp.2-3.）ではシュカナースィ入口の左側，カンナガラのカッレーシュヴァラ寺院（MAR 1939 p.91.）のでは右側に設けられている。

注36 MAR 1937, pp.54-55.

注37 MAR 1928 p.4, pl. V.

注38 Laternendecke。正方形の四隅に三角形の石版を配置し，中央に正方形の孔を作り，次にその孔の四隅と中央に同じ手法を繰返す。これを2，3回繰返した後に中央の孔を一枚の石版で覆った天井装飾。

注39 ソーマナータプラのチェーンナケーシャヴァ寺院のガルバグリハの平面形は，長方形に見えるが，これはガルバグリハ奥にある二本のピラスターと対応する前面にあるはずのピラスターがないためで，天井は正方形である。またゴーヴィンダナハッリのバンチャリンゲーシュヴァラ寺院のガルバグリハは奥行7 feet 6

inch 幅 6 feet 6 inch であるが（MAR1933 p.15），それぞれ梁型とピラスターによって区分されたひとつのアンカナで，アンカナが複数まとまって矩形を呈しているわけではない。本論で取扱う寺院すべてが実測されたわけではないので定かではないが，このような例外が数例みられるものと推測される。またベーラゴーラのバクタヴァトサナ寺院（H．129）はガルバグリハとポルティコのみで寺院本殿を構成しているが，ガルバグリハが円形である。円形のガルバグリハはホイサラ寺院には他に類例がないが，ケーララ州には数例見受けられる。H. Sarkar, *An Architectural Survey of Temples of Kerala*, New Delhi, 1978, pp.252-262.

注40 このようにガルバグリハ内部の三方にニッチが位置する寺院は，ガルバグリハの周りが局部的に二軸対称になっているものと考えることができ，これらの寺院は寺院本殿も二軸対称平面を呈している。

注41 ヴィグナサンテーのラクシュミーナラシンハ寺院（MAR 1939 pp.64-66, pl.19）の主ガルバグリハには，ガルバグリハ入口からみて右側にニッチが1つある。ガルバグリハに非対称にニッチが設けられるのはこの寺院だけであるが，その理由は判明していない。

注42 ガルバグリハにニッチがある寺院はガルバグリハのまわりの外壁面が星形を呈する傾向にある。

注43 ヌッギーハッリのサダーシヴァ寺院のガルバグリハには入口正面にニッチが1つあるが，ピラスターは四隅にしかない（MAR 1917 pp.11-12, pl.6）。

注44 MAR 1930 pp. 33-50, pl. X.

注45 ヴィジャヤナガラ朝時代には，ホイサラ寺院に長方形のポルティコが増築されたものがみられる。ベーッルール（マンドゥヤ県）のマダガラーヤ寺院ではもともとあったポルティコが長方形の6アンカナに増築されている（MAR 1939 pp.32-33, pl. Ⅱ）。

注46 MAR 1933 pp. 80-90, 1923 pp.3-6, pl. IV.

注47 MAR 1931 pp. 6-12, pl. V.

注48 MAR 1937 pp. 71-72, pl. XIX.

注49 この寺院では入口からみて左側にシヴァ神，正面にブラフマー神，右側にヴィシュヌ神がまつられる。

注1 K. A. Nilakanta Sastri, *A History of South India, from Prehistoric Times to the Fall of Vijayanagar*, Madras, 1955, pp. 173-206.

注2 Percy Brawn, *Indian Architecture, Buddist and Hindu, Bombay*, Rpt.1956, pp. 138-143.

注3 M. A. Dhaky, *Encyclopaedia of Indian Temple Architecture, Upper Dravidadesa, Later Phase*, New Delhi, 1996, pp. 3-217.

注4 後期チャールキヤ時代に増築された寺院，後のヴィジャヤナガラ時代に大幅な増築がなされた寺院は含めない。

注5 寺院を構成する各室の位置関係に着目するため，寺院外壁の細かな凹凸は省略して考える。また各室の平面形態についても後述することとし，各室の配置について論じる。また第Ⅱ章同様，寺院平面を模式的に示す。

注6 EITA p. 15, fig. 4

注7 後期チャールキヤ寺院以外では，ほぼ同時期のカダンバ朝の寺院に，二つの一軸対称寺院が並置されたデーガンヴェのカッラ・グディがある。ホイサラ寺院では三つのアンカナを介して並置していたのに対し，この寺院では二つの一軸対称寺院の間に9つのアンカナを介して並置されている。EITA pp. 244-246, fig. 153.

注8 EITA p. 202, fig. 130.

注9 *Annual Report of the Mysore Archaeological Department*（以下MAR），Bangalore, 1931, pp. 49-51, pl. 19, EITA pp. 162-164, fig. 103.

注10 EITA pp. 175-177, fig. 113.

注11 EITA p. 177, fig.115.

注12 EITA pp. 43-48, fig. 34.

注13 EITA pp. 116-118, fig. 80.

注14 EITA pp. 155-160, fig. 101, Henry Cousens, *The Chalukyan Architecture of the Kanarese Districts, 1926*, Calcutta, pp. 116-117, pls.CXVI-CXXII.

注15 EITA p. 70, fig. 51.

注16 EITA p. 63, fig. 46

注17 この寺院はマハーマンダパのまわりに室が配置されているものと考えることができるが，このようにマハーマンダパのまわりにガルバグリハが位置している例は，ホイサラ寺院ではベーラヴァーリのヴィーラナーラーヤナ寺院（H．186）と類似している。しかしヴィーラナーラーヤナ寺院はマハーマンダパとそれに続くガルバグリハ，シュカナースィは増築されたもので，建設当初は一軸対称平面であった。ウマ・マヘーシュヴァラ寺院は，現在資料がなく，増築されたものかどうかは判明しない。

注18 EITA pp. 30-32, fig. 20.

注19 ホイサラ寺院でもアーサンディのチャンディケーレーシュヴァラ寺院では二つのガルバグリハが並置され，ナヴァランガを共有していたが，後に横長のナヴァランガの間に壁が設けられ現在ではそれぞれ独立している。MAR 1942 p. 69

注20 ヴィマーナ脇に入口が設けられている寺院は，筆者の知る限りではタンジャヴールのブリハデーシュヴァラ寺院，ガンガイコーンダチョーラプラムのブリハデーシュヴァラ寺院があるが，これらは規模が大きく後期チャールキヤ寺院と同列に比較する枠にはいかない。これらの寺院はそれぞれ11世紀にチョーラ王が首都建設に際して建立した大伽藍である。

注21 EITA pp. 25-27, fig. 13.

注22 A. Sundara, "*Two Temples in Dharwad Didtrict and the Impact of the Lakula and Kalamukha Saiva Sects*", M. S. Nagaraja Rao(Ed.), The Chalukyas of Kalyana (Seminar Papers), 1983, Bangalore, pp. 171-174.

注23 EITA pp. 209-211, fig. 135.

注24 Cousens, *op. cit.*, pp. 85-87, plate LXXVI.

注25 EITA pp. 207-208, fig. 133.

注26 EITA pp.36-37, fig. 24.

注27 EITA pp. 114-116, fig. 77.

注28 EITA pp. 160-162, fig.102

注29 EITA pp. 50-53, fig. 37.

注30 EITA pp. 100-102, fig.68.

注31 EITA pp. 95-100, fig. 66, Cousens, *op. cit.*, pp. 79-82, pl. 112.

注32 EITA p. 96. ここではヴァーストゥシャーストラに根拠を求めているが，ヴァーストゥシャーストラにこの記述があるかどうかの確認はとれていない。

注33 EITA pp. 30-32, fig. 20.

注34 ホイサラ寺院同様の平面類型を示す並置寺院は後期チャールキヤ寺院にはみられないが，1175年にカダンバ朝のもとで建立された，デーガンヴェーのカッラーグディは，二つのガルバグリハが並置され，ナヴァランガでつながっている。この寺院ではホイサラ寺院とはナヴァランガのアンカナの分節が異なり，9分割された正方形が三つ並置され，重なる部分がない。EITA pp. 244-247, fig. 153. また800 A. D. 頃の建立の後，17世紀まで増築が繰返されたナンディーのボーガナンディーシュヴァラ寺院は，東西軸に沿ってそれぞれシヴァリンガをまつる寺院が南北に別棟で並置されている。MAR 1932 pp. 65-68.

注35 この寺院では，ナヴァランガの中央に沐浴池が位置している。

注36 EITA p. 191, fig. 123.

注37 以下の2基の寺院では非対称にニッチが配置されている。クッパトゥールのカイタヴェーシュヴァラ寺院ではナヴァランガ西側に左右対称に4つあるニッチに加え北側にもう一つニッチが設けられている。ガダッグのラーマリンゲーシュヴァラ寺院ではナヴァランガの西に位置する主ガルバグリハの両脇と，南側のガルバグリハの両脇，さらに東側の入口の両脇にあって，北側のガルバグリハの脇には設けられていない。カイタヴェーシュヴァラ寺院は非対称となるニッチが増築されたものであることがわかっているが（MAR 1931 pp. 49-51, pl.XIX.），ラーマリンゲーシュヴァラ寺院の場合，非対称にニッチが配置されている理由は判明していない。

注38 この寺院では，ガルバグリハは21のアンカナからなり，極めて例外的である。*Epigraphia Carnatica* vol II, 1923, intro pp. 26-27, pl. XXXIV.

注39 例えば，ラックンディのクンベーシュヴァラ寺院では三つのシュカナースィそれぞれに小窓が二つずつ設けられている。EITA pp.100-102, fig. 68.

注40 EITA pp. 92-94, fig. 64. Cousens, *op. cit.*, p. 82, pl. CXII.

注41 EITA pp. 195-200, fig. 127, Cousens, *op. cit.*, p100-102, pl.101-107.

結

注1 Venkataraman, K. R., *Hoysalas in the Tamil Country, 12th - 14th Century*, Annamalainagar, 1950, pp.16-17.

主要参考文献

Acharya, P. K., *A Dictionary of Hindu Architecture* - Manasara Series vol. I, London, New Delhi, 1934, 1981.

Acharya, P. K.: *Hindu Architecture in India and Abroad* - Manasala series vol. VI, Bhopal, 1979.

Acharya, P. K.: *Indian Architecture* - According to Manasara-Sirpasastra - Manasara Series vol. II, London, 1934, 1981.

Acharya, P. K.: *Manasara on Architecture and Sculupture* - Sanskrit text with Critical notes - Manasara Series Vol. III, London, 1934, 1979.

Annual Reports of the Mysore Archaeological Department for the year 1929 - 1947-56, Bangalore.

Brown, Percy: *Indian Architecture (Buddhist and Hindu Period)*, Bombay, Rpt. 1956.

Chandra Vasu, Srisa: *The Daily Practice of the Hindus*, New Delhi, 1991.

Champakalakshmi: *Vaisnava Iconography in the Tamil Country*, New Delhi, 1981.

Collyer, Kelleson: *The Hoysala Artists - Their Identity and Styles*, Mysore, 1990.

Coomaraswamy, Annanda K.: *Symbolism of Indian Architecture (the Skambha and the Stupa)*, Jaipur, 1983.

Coomaraswamy, Annanda K.: *History of Indian and Indonesian Art*, 1927, 1972, Cousens, Henry: *The Chalukyan Architecture of the Kanarese Districts*, Archaeological Survey of India, New Inperial Series, vol. XLII., Calcutta, 1926.

Cousens, Henly: *Mediaeval Temples of The Dekhan*, New Delhi, Rpt. 1985.

Devaraj, D. V. & Patil, Channabasappa S. Ed.: *Vijayanagara - Progress and report 1987 - 88*, Mysore, 1991.

Devaraj, D. V. & Patil, Channabasappa S. Ed.: *Vijayanagara - Progress of resarch 1984 - 87*, Mysore, 1991.

Dhaky, M. A.: *Encychlopaedia of Indian Architecture South India, Upper Dravidadesa, Later Phase*, New Delhi, 1996.

Dhaky, M. A.: *The Temple Forms in Karnata Inscriptions and Architecture*, New Delhi, 1977.

Dubreuil, G. Jouveau (Edited by Aiyangar, S. Krishnaswami): *Dravidian Architecture*, New Delhi, Rpt. 1987.

Epigraphia Carnatica (vol.VII,VIII,XVI,XVII), Mysore.

Fergusson, James: *History of Indian and Eastern Architecture*, London, 1876, Delhi, Rpt, 1972.

Foekema, Gerardus Maria Majella: *Hoysala Architecture, Medieval temples of Southern Karnataka built during Hoysala rule*, New Delhi, 1994.

Ghosh, A. Ed.: *Jaina art and Architecture* (3 vols.), New Delhi, 1974.

Gonda, J.: *Aspects of Early Visnuism*, London, 1954.

Gopal, B. R: *Kannada Dynasty outside Karnataka*, Bangalore, 1967-68.

Gopal, B. R.: *The Chalukyans of Karyana and the Kalachuris*, Dharwad, 1981.

Gopal, B. R. Ed.: *The Rastrakutas of Malkhed - Studies in their History and Culture*, Mysore, 1994.

Gururajachar, S.: *Some Aspects of Economic and Social Life in Karnataka*, Mysore, 1974.

Harle, J. C.: *The Art and Architecture of Indian Subcontinent*, London, 1985.

Hardy, Adam: *Indian Temple Architecture, Form and Transformation, The Karnata Dravida Tradition, 7th to 13th Centuries*, New Delhi, 1995.

Huntington, Susan L.: *The Art of Ancient India*, New York, 1985.

Jagadisa Ayyar, P. V.: *South Indian Shrines*, New Delhi, Rpt. 1982.

Jouveau Dubreuil, G.: *Ancient History of Dekhan*, New Delhi, Rpt 1981.

Kramrisch, Stella: *The Hindu Temple* (2 Vols.), Delhi, 1946, Rpt, 1991.

Kramrisch, Stella: *The Presence of Siva*, Delhi, 1988.

Krishna Murty, M. S.: *The Nolambas*, Mysore, 1980.

Longhust, A. H.: *Hampi Ruines - Described and Illustrated*, New Delhi, Rpt. 1993.

Mahalingam, T. V.: *The South Indian Temple Complex*, Dharwad, 1970.

Manickam, V.: *Hoysala Ballala III and Kongu*, Bangalore, 1987.

Mardia, K. V.: *The Scientific Foundation of Jainism*, Delhi, 1990.

Meister, Michael W. and Dhaky, M. A. Ed.: *Encychlopaedia of Indian Architecture South India, Upper Dravidadesa, Early Phase, A.D. 550-1075*, Delhi, 1986.

Meister, Michael W. and Dhaky, M. A. Ed.: *Encychlopaedia of Indian Archtecture North India, Foundation of Northern Indian Style, C.250B.C.-A.D.1100*, Delhi, 1988.

Meister, Michael W. and Dhaky, M. A. Ed.: *Encychlopaedia of Indian Arcitecture North India, Period of Early Maturity, c.A.D.700-900*, Delhi, 1991.

Meister, Michal W., Dhaky, M.A. Ed.: *Encycropaedia of Indian Temple Architecture, South India, Lower Dravidadesa, 200 B.C. - A.D. 1324*, Delhi, 1983.

Nagaraja Rao, M. S. Ed.: *Vijayanagara Progress report 1979-83*, Mysore, 1983.

Nagaraja Rao, M. S. Ed.: *Vijayanagara Progress report* 1983-84, Mysore, 1985.

Narasimha Murty, A. V. Ed.: *Archaeology of Karnataka*, Mysore, 1978.

Narasimhachar, R.: *The Kesava Temple at Belur*, New Delhi, Rpt. 1982.

Narasimhachar, R: *The Kesava Temple at Somnathepura*, New Delhi, Rpt.1982.

Narasimhachar, R.: *The Lakshmidevi Temple at Doddha-gaddavalli*, New Delhi, Rpt.1982.

Nayak, H. M. Ed.: *Epigraphia Carnatica* ; Vol. I - IX (New), Mysore.

Nilakanta Sastri, K. A.: *Development of Religion in South India*, Delhi, 1963.

Nagaraja Rao, M.S. Ed.: *The Chalukyas of Bafdami* (Seminar Papers), Bangalore, 1978.

Nandimath, S. C.: *The Relation Betseen the Chalukyas of Badami and Karyana*, Bangalore, 1957-58.

Nilakanta Sastri, K. A.: *A History of South India, from Prehistoric Times to the Fall of Vijayanagar*, Madras, 1955.

Patil, Channabasappa S: *Temples of Raichur and Bellary Districts, Karnataka, 1000 - 1325 A. D.*, Mysore, 1992.

Rajasekhara, S.: *Early Chalukya Art at Aihore*, New Delhi, 1985.

Ramachandra Rao, S. K.: *Agama Kosha* (agama encyclopaedia): vol.IV - VIII, Bangalore, 1982.

Ramachandra Rao, S. K.: *Art and Architecture of Indian Temples* (Vol.I, II), Bangalore, 1993.

Ramanayya, N. Venkata: *An Essay on the Origin of the South Indian Temple*, New Delhi, Rpt. 1992.

Rama Rao, M.: *Karnataka - Andhra Relations (220 A.D. - 1323 A.D.)*, Dharwad, 1974.

Ramesh, K. V.: *A History of South Kanara*, Dharwad, 1970.

Ram Bhushan Prasad Singh: *Jainism in Early Medieval Karnataka*, Delhi, 1975.

Rice, B. Lewis: *Mysore and Coorge*, New Delhi, 1909.

Rea, A.: *Chalukyan Architecture: Includinag Examples from the Ballari District, Madras Presidency*, (Archaeological Survey of India: New Imperial Series, Volume XXI.), Delhi, Rpt. 1970.

Sarkar H., *An Architectural Survey of Temples of Kerala*, New Delhi, 1978.

Sarma, I. K.: *Religion in Art and Historical Archeology of South India: Contacts and Correlations*, Madras, 1987.

Setter, S.: *Sravana Belagola*, Dharwad, 1981.

Setter, S.: *Hoysala Sculptures in ther National Museum*, Copenhagen, 1975.

Setter, S.: *The Hoysala Temples* (2 vols.), Bangalore, 1992.

Setter, S. Ed.: *Archaeological Survay of Mysore, Annual Reports: A Study - vols. II to IV* (3vols.), Dharwad, 1976.

Setter, S.: *Hampi: A Medieval Metropolis*, Bangalore, 1990.

Setter, S. and Sontheimer, Gunther D. Ed.: *Memorial Stones : A Study of Their Origin Significance and Variety*, Dharwad, 1982.

Sheik Ali, B.: *History of the Western Gangas*, Mysore, 1976.

Sheik Ali, B. Ed.: *The Hoysala Dynasty*, Mysore, 1972.

Shivanna, K. S.: *A Critique of Hoysala Polity*, Mysore, 1988.

Shivanna, K. S.: *The Agrarian System of Karnataka (1336 - 1761)*, Mysore, 1983.

Shivaramamurty C.: *The Chola Temples - Tanjore, Gangaikondacholapuram and Darasuram*, New Delhi, 1984.

Shukla, D. N.: *Vastu-sastra* (2vols.), Lacknow, 1958, New Delhi, Rpt. 1993.

Soundara Rajan, K. V.: *Indian Temple Styles - The Personality of Hindu Architecture*, New Delhi, 1972.

Soundara Rajan, K. V.: *Art of South India - Deccan*, Delhi, 1980.

Soundara Rajan, K. V.: *Early temple Architecture in Karnataka and its Ramifications*, Dharwad, 1969.

Srinivas Iyengar, P. T.: *Life in Ancient India in the Age of mantras*, New Delhi, 1982.

Srinivasan, K. R.: *Temples of South India*, New Delhi, Rpt. 1993.

Subramanian, K. R.: *The Origin of Saivism and its History in Tamil Land*, New Delhi, 1929, 1985.

Sundara, A.: *Some Temples of North Dharwat Dist. and Hoysala Architecture*, Dharwad.

Vasantha, R.: *The Narayanaswami Temple at Melkote*, Mysore, 1991.

Vasantha, R.: *The Narayanaswami Temple The Agamic Basis*, Bangalore, 1987.

Venkata Ramanayya, N.: *An Essay on the Origin of the South Indian Temple*, New Delhi, Rpt. 1992.

Venkataraman, K. R.: *Hoysalas in the Tamil Country(12th-14th cwnturies)*, Annamalainagar, 1950.

Williams, Joanna G. Ed: *Kaladarsana - American Studies in the Art of India*, New Delhi, 1981.

Yashoda Devi: *The History of Andhra Country 1000 A.D. - 1500 A.D.*, New Delhi, 1993.

Zimmer, Heinrich (Ed. Campbell Joseph): *Philosophies of India*, Delhi, Rpt. 1990.

Zimmer, Heinrich: *The Art of Indian Asia - Its Mythology and Transformations* U.S.A, 1960, 1983.

バンダルカル，R．G．，島岩，池田健太郎　訳：　ヒンドゥー教　－　ヴィシュヌとシヴァの宗教，せりか書房，1984。

ミッチェル，G．，神谷武夫　訳：　ヒンドゥ教の建築，鹿島出版会，1993。

図版出典リスト

第Ⅰ章

図Ⅰ－1．ホイサラ朝の最大版図（13世紀初頭）。*1:1,000,000, State map of Goa, Daman & Diu and Karnataka*, Fourth edition, 1981, Survey of India , Setter, S., *Hoysala Sculptures in ther National Museum, Copenhagen*, 1975, Fig. 2. をもとに筆者が作成。

第Ⅱ章

図Ⅱ－1．平面図の模式化。バスラールのマッリカールジュナ寺院，平面図[MAR 1934 Pl. XI.] をもとに筆者作成。

図Ⅱ－2．平面模式図（筆者作成）。

図Ⅱ－3．カルナータカ州南部見取図。*1:1,000,000, State map of Goa, Daman & Diu and Karnataka*, Fourth edition, 1981, Survey of India をもとに筆者が作成

第Ⅳ章

図Ⅳ－1．ナヴァランガの平面分割の模式図（筆者作成）

図Ⅳ－2．マーガラのヴェーヌゴーパーラ寺院，平面図，断面図。 Rea, A., *Chalukyan Architecture, Includinag Examples from the Ballari District, Madras Presidency*, Rpt. 1970, Delhi, (Archaeological Survey of India, New Imperial Series, Volume XXI.) pl. IX, Xをもとに筆者作成。

第Ⅴ章

図Ⅴ－1．クッパトゥールのカイタベーシュヴァラ寺院，平面図。Dhaky, M. A. *Encychlopaedia of Indian Architecture South India, Upper Dravidadesa, Later Phase* 1996 New Delhi（以下EITA）fig.103をもとに筆者作成，以下第５章の図版について同様。

図Ⅴ－2．ラクシュメーシュヴァラのシャンカ・バサディ，平面図。

EITA , fig.113.

図V－3．スーディのジョーグカラサ・グディ，平面図。EITA fig. 37.

図V－4．ウンカルのチャンドラムーレーシュヴァラ寺院，平面図。*The Chalukyan Architecture of the Kanarese Districts.* Archaeological survay of India, New Inperial Series, vol. 42. 1926 Calcutta, pl. CXXV.

図V－5．ダンバルのドーッダバサッパー寺院，平面図。EITA fig. 125.

図V－6．アマラゴールのバナサンカーリ寺院，平面図。EITA fig.137.

図V－7．フーリのパンチャリンゲーシュヴァラ寺院，平面図。EITA fig.135.

図V－8．アイホーレのアナンテサーイ・グディ，平面図。EITA fig. 24.

図V－9．ラックンディのカーシヴィシュヴェーシュヴァラ寺院，平面図。EITA fig. 66.

図V－10．ベーヴールのラーメーシュヴァラ寺院，平面図。EITA fig. 47.

図V－11．アイホーレのヴィルーパークシャ寺院，平面図。EITA fig.42.

図V－12．フーリのマダネーシュヴァラ寺院，平面図。EITA fig.123

図V－13．クッパトゥールのカイタベーシュヴァラ寺院，平面図。EITA fig.103.

図V－14．ラクシュメーシュヴァラのラクシュミーリンゲーシュヴァラ寺院，平面図。EITA fig.110.

図V－15．イッタギーのマハーデーヴァ寺院，平面図。EITA fig. 127.

図V－16．ラックンディのナンネーシュヴァラ寺院，平面図。EITA fig. 64.

図V－17．バンカプールのアルヴァットゥカンバラ寺院，平面図。EITA Fig.99.